THE SEISHIN

棲神

第二卷

第一號

THE SEISHIN

精神

第一號
第二卷

宗祖御入山六百五十年紀念號

目次

卷頭一言……一
本尊の贊文年代に就て……鈴木文亮……三
日蓮聖人門葉の管見……太田純志……九
日蓮聖人の宗教と價値的批判……結城瑞光……二〇
信仰の寸心を改めよ……志村晧堂……二四
念佛思想史に對する余の管見……福島瑞岳……二七
魂の鄕地を索めて……高山惠忍……三一
能化と所化……深澤雪堂……三五
聖日蓮の奮鬪……間宮觀應……三七
御草庵（散文詩）……下田冷涙……四一
月の囁き（詩）……中林蓮風……四二
本化的文化生活……岡　鳴月……四四
私の生命觀……渡邊泰深……四七
偶感……小坂田龍敎……四九
抱かれむ本佛の懷に……二宮龍嚴……五一
平和の建設……堀內義光……五三
慈悲に就て……吉川啓善……五五
友の靈に手向くべき詩と文……江原白線……五八
棲神閣に詣でゝ（詩）……照　月……六〇
理智の母（詩）……太田亦童……六一
哺乳類のいろ〳〵（詩）……平地光瀾……六二
陸奥に咲ける百合花……佐藤海澄……六四
自然と人生……富田海音……六六
反省と努力……廣瀨潮憲……六七
夏の宵……本村弘……六八
秋の觀喜……高橋是明……六九
魂の叫び……中條良陽……七〇
歩むべき道……四寬涙草……七一
寺院と酒に就て……秋永露翠……七三
か細き秋雨（散文詩）……鍋谷寬明……七五
寂寥（詩）……泰觀行……七六
郊外の夕（民謠）……秋永露翠……七七
魂の行へ（民謠）……太田赤童……七八
凋落の初冬（詩）……小松觀學……七八

民謠三篇……結城光…七八
菊、秋愁 思出草、明暗、自然の瞳(短歌)……七九
淨行(創作)……伊丹優曇華…八二
轉變(創作)……下田冷涙…八九
不幸なる哲人の物語(創作)……高崎一二…九五
編輯雜記……子老…九九
講演部から……鳴月…一〇〇
文學部から……赤童…一〇三
運動部から……冷涙…一〇四
會計部から……立谷…一〇五

—〔終〕—

卷頭一言

人法相關の道理、依正不二の眞理に立脚して、自身の不思議なる法華經の行者なること、身延の山の鷲峰に等しき靈地なることをば、宗祖大師は御遺文に

此處は人倫を離れたる山中也、東西南北を去て里もなし、かゝるいと心細き齒谷なれとも教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し日蓮が肉團の胸中に祕して隱し持てり、されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也、舌の上は轉法輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし、かゝる不思議なる法華經の行者の往處なれは、いかでか靈山淨土に劣るべき、法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に處尊しと申ゝは是也 至

彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也。

と示された、衣食給せず常に飢寒に苦めらるゝ所謂貧道の身の上に四處道場を直感し、山阿溪頭寂寞無人の僻地に於て事の寂光土を實現せしめたる大師の信仰世活が如何に崇高偉大であるかは一讀直に看取せられるではないか。又

後ろには峨々たる深山聳へて梢に一乘の菓を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし至傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ。

とも云はれ、此地の山川草木皆妙法の姿であり、事々物々實相眞如、其儘であることを述べて茲即ち靈山淨土なることを示された、其高潮せる法悅歡喜の聖情は正に葦端に躍動して居るではないか。

國民全体が大師に軌範を求めて此偉大なる信仰に入り、法悅と感謝の聖的生活を營み得るならば立正安國の素願は茲に滿足するのである。それが人類全體に行き渡つたならば、則ち閻浮統一、絶待平和の理想は正に實現するのである、爾らば此巖爾たる身延の山は國家鎭護の根本靈場、世界平和の發祥地ではないか、末法萬年の暗黑を照破する大光明の出發點ではないか、凡そ我國佛教中諸他の宗々に亘りて名山大刹は澤山あ

るが彼等は皆靈山靈刹と稱することは出來ぬ、开は「法麁なるが故に人尊からず、人尊からざる故に處亦た貴からず」の道理で實質上已むを得ぬ事である、我大師自ら「此山を本として參るべし」と勸奬なされたのは强ち信徒吸集の爲ではない、教權樹立の爲ではない、要は「我が聖的生活に倣へよ」との垂訓である、他語以て之を言はゞ破邪顯正の毒鼓天鼓である、國民覺醒の曉鐘であり、人類救濟の福音である、必ず〳〵井蛙の見、宵々の情を以て之を忖度してはならぬ、宜しく眼孔を擴めて眞理の命ずる處、道理の示す所を大觀すべきである。

本年は此世界的靈地の開創、即ち宗祖大師が文永十一年五月入山せられてより正に六百五十年に相當する依つて本山としては相當期間に於て紀念の法會が擧行されることであるが、朝夕此棲神の靈地に奉仕し夙夜行學二道に勵みつゝある吾人は、玆に雜誌「棲神」を發行して深く之を紀念し、一は以て大師の恩德に感謝し一は以て自身行學の增進に資し、更に以て天鼓の一擊、曉鐘の一杵に擬するものである。(大正十二年一月十一日)

本尊の賛文年代に就て

鈴木文亮

古來日蓮聖人の本尊を研究するに際してその曼荼羅に對する學者の考察的態度は必ずしも一樣であつたとは云へないが、併しながら大體に於てその形式的研究の方面から見るならば曼荼羅の圖式に對して常に三種の異類を分判して考察するの風潮が夙くから存したことは讀者の最もよく知るところであらう。三種とは即ち文永式、建治式、弘安式と稱するものであつて古來の學者はその多くが是等三種のうちに於て文永建治の本尊と弘安已後に於ける本尊との形式的相異やその賛文年代の不同を比較することから直ちに本尊の價値内容の優劣にまで論及して是れが校量穿鑿に甚だつとめたものである。

今その圖式に對する形式的研究の價値批判は且く措いて茲はたゞ賛文年代のそれに就て少しく吾人の管見を披瀝して見たいと思ふ、と云ふのはこの問題は單に古來の學者が著しく力を致したと云ふばかりでなく吾人を以てするならばかゝる形式的研究の偏重からそが價値問題にまで論及して遂に聖意を揣摩するに至つたと云ふことは、それがたゞに戯學的弊害のもたらした結果と考へらるゝばかりでなく『本尊に迷ふは才能ある畜生なり』とまで嚴誡せられた聖慮に鑑みてまことに忍びがたいものがあるからである。

年代計算に對する日蓮聖人の見解は、云ふまでもなく傳教大師の著作であるところの「末法燈明記」に記された二説、所謂周異記の説である周の穆王三年説と春秋の共王四年説との中ではその前者を取るものであつて、今この説に從ふならば「燈明記」の著作年代即ち延暦二十年は佛滅後一七五〇年に相當するから、日蓮聖人の誕生は二一七一年に當り建長五年の清澄開教は二二〇二年佐渡の流摘は二二二〇年「觀心本尊鈔」の

述作並に本尊曼荼羅の始顯は正しく二二二二年に相當する、從つて身延入山は二二二三年弘安五年の鶴林入滅はまた實に二二三一年に相當することゝなる。

然るに今飜つて本尊曼荼羅の贊文年代を拜するとき概して文永建治の比になれるものには佛滅後二千二百二十余年（始顯は二二二二年）と認められてあり、その弘安元年已後のものには佛滅後二千二百三十余年（弘安四年が二二三〇年）と記されてあるところから、爰に是等兩者の相異が端なくも學界に疑念を生み學者はために種々の憶說を立て相爭ふこと久しきに亘り遂に今日に至るも尙ほその歸趣するところを見出しがたきに至つたのである。

今これに對する學者の見解中その主なるものを列擧すれば次の如くである。

身延日朝師曰く、

文永建治の本尊に廿餘年と云ふは是は未再治の本尊なるが故なり、弘安涅槃の時分に卅餘年と云ふは再治定の本尊なるが故なり。云々

和語日相師曰く、

建治年中の本尊には二千二百二十餘年と云ふべし、弘安四、五年の本尊には三十餘年と云ふ勿論なり、然れ共建治弘安身延住居の時は自行證得の御本意も正しく顯れたれば、彼の時代の御本尊を手本とし當時の衆も三十餘年と書き給ふなり。云々

啓蒙日講師曰く、

或る鈔に曰く、二十餘年とあるべきを三十餘年と遊ばせる事は甚深の子細有之、又京都本國寺弘安元年七月の本尊に二千二百三十餘年と遊ばし、又下總峯日辨授與の弘安二年四月の大本尊にも二千二百三十餘年とあり、今云く、二幅の本尊の授與書に就ては尤も深意あるべき歟、諸山列聖別しては平賀代々の本尊に多く三十餘年とあるは、元祖自行御所證の御本意の顯はれ畢る時を定規とせる意なるべし。云云

扶老日好師曰く、

總て宗祖の本尊を見るに二百三十餘年と、又二百二十餘年とあり、唯此の二なるのみにして餘は之なし文

永九年壬申は正しく二千二百二十一年なり、故に本尊を圖するときの始めは文永九年以後なるべし、三十餘年の語は弘安五年是れ三十一年なれば此年に云ふは然るべし、自余の年に三十余年とあるは文字の誤りなるべし。云々

小林日董師曰く、

弘安元年以後の本尊は二佛四菩薩のみにして善德及び分身佛を書し給はず、是の如きは實に本門正宗の本尊なるべし、故に先師も文永建治の本尊と弘安元年以後の本尊とを別け隨他意隨自意の二とせり、弘安元年以後の本尊には必ず特に佛滅後二千二百三十餘年と書し給ふ聖意思ふべし。云々

嶋村日正師曰く、

贊文―┬―廿余年―隨他―廣宣流布―在世―弘通の始
　　└―卅余年―隨自―無令斷絶―滅後―弘通の後

以上の如く古來多くの學者が各自その說を立て遂に本尊に對して、隨自隨他、末再治再治定、自行所證の本意不本意、在世滅後等の分別を生ずるに至つたのである。今若し本尊の價値にして果して是の如くであるとするならば、文永十年佐渡の述作にかゝる『日蓮が當身一期の大事』と宣べられた聖人終窮の極說たる『如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔』は遂にまた末再治隨他未所証の方便說となり終るの外はないものと云はねばならない。何となれば同年始顯法華經本門の大曼荼羅は實に觀心本尊鈔の大事たる壽量品の肝心妙法蓮華經そのものを顯發圖現せられたものであるが故に、そこには本尊鈔を離れて本尊があり得ないと同時に、また本尊以外に本尊鈔の生命及び其規模はあり得べからざるが爲である。從つて又若しも本尊鈔以外にそれとは全く關係なしに獨立した本尊の生命價値を確認しやうとする學者があるとするならば、それは單り聖意に背戻するのみならずかゝる不合理の見解は吾人の知的要求とは全然相容れないものと云はねばならない。之れに反して本尊と本尊鈔との關係を上の如く密接不離のものとして考へやうとする吾人の見解にして果して誤りでないとするならば、弘安已前即ち文永十年の始顯本尊がその弘安元年以後即ち弘安式ならざるが爲と云ふ。或は又贊文年代が佛滅二千二百二十余年と云ふ條件のもとに末再治隨他意なりと斷定する以上、その能詮たる本

尊鈔はまた明かに未再治隨他意の所說と認めねばならない。その之れに反して本尊鈔が飽くまでも聖意から見て眞に『日蓮が當身一期の大事』であるとするならば、その所詮であり所顯であるところの「本尊」はまたそれ自身絕對價値の當体であらねばなるまい。爰に於てか吾人は贊文年代によりて本尊そのものゝ價値を區別し其間に輕重を附せんとするが如き學者の見解は聖意に背く妄斷であると論難するの外はないのである。

以上の論述にして誤りでないとするならばその是れに對する吾人の見解は次の如くである、卽ち吾人を以てするならば本尊に認められた贊文年代は、彼の「觀心本尊鈔」に於ける『如來滅後五五百歲始』の文と其意全く同一であつて、それは單に本尊圖式の整不整や巧拙の如何等に係るところのものでないのは勿論、その意旨の存するところは實に專ら法華經壽量品の肝心たる本門の大本尊が、一に末法行者の信行の對象として第五の五百歲即ち末法の始めに於て出現せらるべく、本化附囑の大自覺に基いて其の內容と目的とを限定せんとした銘言であつて、玆に贊文の贊文たる所以の義理が存すると共に、又實に末法救濟の本尊價値をして正像のそれと簡別せんが爲めであると考ふるのである。されば本尊鈔に曰く、

末法に來入して始めて此佛像出現せしむべき歟。

日女鈔に曰く、

正像二千年には未だ本門の本尊と申すべき名だもなし乃至佛滅後二千年過ぎて末法の始の五百年に出現せさせ給ふ乃至末法二百余年の比。云々

と、聖意是の如くであるならば二十余年と云ひ三十余年と云ふも其意に於て何等異りなく、只大數に約してかくは書せられたものと見るべく、畢竟本尊の佛滅後未曾有なるの意義と末法爲正の深意とを顯詮せんとするが正目的であると云はねばならない。

玆に於てか吾人は更に進んで聖人一代に於ける年代數字の用語例に就て考證を重ね以て其の意の存する處を明確ならしむるのであらう。

法華初心成佛鈔　(建治三年)(縮遺一六七七)

釋尊入滅の後今に二千二百三十余年也。云々

撰持鈔（建治元年）（同一二三五）

佛滅後二千二百三十余年が間。云々

弘安以後に於て三十余年とあるを以て其の本尊が再治定であり隨自意であるとの義を附すべきであるならは建治年間に於ける上記の諸御書に認められたる三十余年云々の年代用語例は是れを如何に處理すべきであらうか。云ふ勿れ本尊と御書と其意異ると、既に前述の如く本尊鈔、日女鈔等は共に本尊の顯現に就て云ひ殊に本尊問答鈔の如き具に本尊末曾有の義を論ずるものあるに於ておやである。又假りに一歩を與えたとへ後に具に擧ぐるが如く弘安元年已後の御書が多くの場合三十余年の數を用ひたることを容認するも、これとて中には或は正確に年代に合するあり或はその甚だしきに至つては五百年の數を用ふるありて一定せず、爰に於てが既に弘安以前に於て三十余年云々の用語ある點等を綜合批判するときそれ等の凡てが大數に約したものであることは愈以て明白な事實と云はねばならない。

そこで吾人は更に是等を裏書せんが爲めに重ねて遺文中大數に約して用ひられたる他の諸例を摘錄して御目にかけやう。

妙密上人御消息（遺一四三〇）

二千二百二十余年の時に生れ。云々

（聖人誕生は滅後二千百七十一年なり）

千日尼御前御返事（弘安元年）（滅後二二二七年）

佛滅後既に二千二百三十余年になり候。云々

妙法尼御返事（同）

佛御入滅ありては既に二千二百二十七年。云々

佛滅後既に二千二百二十七年になり候。云々

四條金吾殿御返事（同）

佛滅度後二千二百三十余年になり候。云々

本尊問答鈔（同）
二千二百三十余年か間一閻浮提の内に未た弘めたる人候はず。云々
九郎大郎殿御返事（同）
佛御入滅ありては二千二百二十余年なり。云々
寶輕法重事（弘安二年）（滅後二二二八年）
佛滅後二千二百余年。云々
可延定御書（同）
後五百歳二千五百余年の時。云々
治病大小書（弘安五年）（滅後二二三一年）
佛の御入滅より今に二千余年が間。云々

以上に於て是れを見るとき、等しく弘安元年に於けるもの或は二千二百三十余年、或は二千二百二十七年或は二千二百余年と云ひ、又弘安二年に在ては或は二千二百余年、或は二千五百余年と云ひ、更に弘安五年に於けるが如き單に二千余年と云へるのみではないか。

是の如く通觀し來れば日蓮聖人の年代用語例に對する一般を知ることが出來ると共に、其の多々は大數に約して用ひられたものであつて、弘安元年に於ける「妙法尼御返事」の如く二千二百二十七年と正確に引用せられたものは極めて稀であつて寧ろ例外として見るも可なりであらう。從つて其等の年代は全くその引用の目的を妨げざる範圍に於て最も概算的に使用せられたものであることは極めて明確な事實となる譯である然るに偶々弘安年間に於ける本尊書式にして共賛文の多くが三十余年と認めある點から、遂に聖人の内面生活にまで臆測を廻らし、且つは本尊其ものの價値内容に對して種々の區別輕重を付し、偏執的皮相的批判を試むるが如きは寧ろ磅礴傳會も甚だしき沙汰と云はねばなるまゐ。もと已に賛文の意義たる本尊の正像未有を表すと共に、そが末法正依たる所以のものを反照するにありとするならば、三十余年とあるを數字の誤りとする日好師の說の如きも明かに獨斷であつてまた吾人の與せざるところである。（完）

日蓮聖人門葉之管見

太田純志

△聖誕一年貞應元年壬午二月十六日善日麿

安房國東條鄕小湊（元祖化導記略傳）

安洲長狹郡市河村小湊浦（高祖傳）

安房國長狹郡東條鄕片海市河小湊浦（註畫讃）

○「一說」天津兒屋根命—十二代目—備中守共資（一條帝正曆年中遠江村櫛住）—備中大夫共保（養子也三國任豐子井伊家祖）—十八代目—四郎政直（遠江貫名住藤原氏也貫名氏ヲ繼ゲ境持通師）—二十一代目—次郎重忠—「

○舍人親王—十代目—大野吉淸（下總路野邊住人）—梅菊女—

—藤太郎重政傳不詳

—早世

—仲三重仲傳不詳

—藥王麿

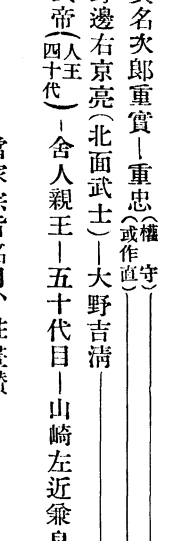
—藤平重友（池上現存御遺物帳（日興筆）存記名世居ニ下總大野鄕ニ云）傳不詳

「二說」○繼體帝（又云聖武帝）—四十五代目—三國氏（住遠州）—河內守通行—十一代目—

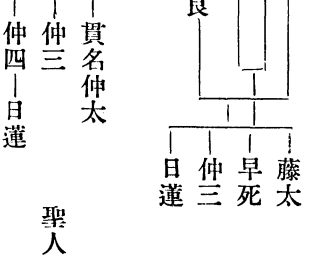
元祖化導記、略傳

別頭統記、小湊系圖

諸大家系圖、長綠寬正記



當家宗旨名目、註畫讃



○次郎重忠公號妙日正嘉二年春二月十四日八十七歳逝去統紀九、六

○梅菊御前號妙蓮文永四年八月十五日逝去歳不明

△聖誕十二年天福五年五月善日麿

○道善房（道善聖人、道善御房等）　安房國安房郡天津町清澄寺諸佛房住職建治二年三月十六日遷化（統記、譜攷）同年六月逝去（聖典辭林）氏族不詳

○淨顯房　道善房弟子住「清澄寺」又云「清淨御房」妙蓮寺歴代也法諱日仲（或專又中）紀傳寂年不詳（譜攷）或說俗籍貫名氏而日蓮肉兄云云是說難信

○義淨（作城或乘）房　道善房弟子傳不詳（譜攷）

○圓頓房（井ノ森）　傳不詳當時清澄ノ末寺住歟

○實智房（片海）　傳不詳當時清澄ノ末寺住歟

○道義房義尙　道善房肉兄天津二門寺住傳不詳

○助ノ阿闍梨　傳不詳

○圓智房（師）—觀智房（弟子）　兩人共傳不詳

○華房淨圓房　號日在俗名太郎重政日蓮舍兄云云此說難信安房妙蓮寺歷代也

○青蓮、明心、實成、西堯、圓密、圓信、聖密等各傳不詳也

△聖誕十七年曆仁三年是性房蓮長　鎌倉遊學

法然―辨阿（聖光房辨長）―弟子六名分ニ六派ー

○然阿良忠、淨土宗鎮西派第四祖諡號記主禪師

鎌倉佐介ヶ谷天照山光明寺談林能化職（統紀、啓蒙等）然ニ此年未ニレ有光明寺ニ可レ訝　念阿、念阿彌念阿彌陀佛ト云

正治元年七月二十七日石見國二隅莊生弘安十年七月六日遷化ス

○大阿　鎌倉霧ヶ澤妙見住傳紀不詳　往阿彌陀佛又大阿彌陀佛ト云貞永元年頃北條泰時ニ獻言シテ和賀江島ヲ築クト

○領家尼（名越尼）　御研學中宿所安房國長狹郡東條鄉領家日蓮上人ト血緣有リ（光日房抄）

北條義時―泰時―光時（越後守入道蓮知被レ流ニ伊豆ニ）四條金吾主君也

―朝時（名越遠江守生西新善光寺建立）―時章（尾張守西見文永九年二月五十一歲被レ誅）―公時（尾張守道鑑永仁二年卒）

○妻名越尼（豆司尼御前（三浦豆司住）或大尼駿河住ト云）

○新尼御前　名越尼御前ト云駿河岡宮ニ大尼同共ス

△聖誕二十二年寬元元年叡山遊學

俊範（惠心流）相生流―經海
―○―政海
―靜明―心賀―心聰
―○―信尊―尊海
―蓮長

惠心流―澄眞（寶地房流）―永尊
檀那流―宗源

（譜、攷、統紀、扶、高祖傳、聖典、辭林）

○俊範（作鑾）山門探題三塔學頭、大僧都、大和莊法師（或坂本法師）東塔無動寺西々谷南勝房住
○永尊　技山學僧任僧都探題
○靜明　栗田口法印當時盛ニ技山ニ於テ講經ス承久三年任僧都
○宗源　竹中法印當時學匠被叙法印正元元年四月勅願三十講証義者也
○心賀　寛元元年生ル聖人登山翌年叡山無動寺常樂院法師也
○尊海　建長五年上總ニ生ル武洲仙波喜多院中興泉福寺二世永仁四年叙僧正
△聖誕二十五年寛元四年京都遊學
○道元（曹洞禪）京都人當時居深草諡號承陽大師寛元元年永平寺建立建長五年八月二十八日五十四歳寂
○圓爾辨圓（臨濟禪）東福寺第一祖聖一國師、稲荷山傍居ニ普門寺一建仁五年十月十五日駿河國蓁科生ル弘安三年十月十七日七十九歳寂
○道隆　號蘭溪宋國人鎌倉建長寺祖、大覺禪師、京都泉涌寺來迎院住弘安元年七月二十四日死
△聖誕二十七年寶治二年
○江川太郎左衛門吉久號ニ日久一在ニ泉洲國府一後宅ニ于伊豆（統紀）
　或說　江川右衛門大郎英親（是依ニ家系一）大和國宇智郡宇野鄕住　更詳
△聖誕三十年建長三年
○眞廣法師　東寺法華堂當別當職（今成就山法華寺也）
　弘安四年春身延參拜接ニ聖化一
○藤原爲家（冷泉家定家子）續經撰集續古今集撰者建治元年五月朔日沒
○天王寺屋淨本……弘安三年九月十一日沒
　妻　妙蓮――一〇一通妙（本蓮寺建立現今妙堯寺也）
○大學三郎能本（比企能員子）本巧（行）院日學弘安九年八月八十五歳卒（或文應年中入信云）

△聖誕三十二年建長五年四月

○東條左衛門景信（蓮智）安房國東條地頭念佛信者也

○—權頭太郎　伊勢人房洲平郡泉澤南無谷住成就山妙福

○—次郎三郎　寺日念上人開基也

○日照上人　大和守祐時養子近衛大臣兼經猶子、印東祐照第三子嘉禎二年下總國能手生王澤法華經寺開山辨阿闍梨又ハ大和阿闍梨下稱ス字成辨號不輕院聖誕三十三年春正月十四歲入室（譜巧、冬十二月入室）統紀元享三年三月二十六日一百三歲寂

新羅三郎義光……印東次郎左衛門畠山祐照（下總海上郡能手領主又云葛飾郡平賀）—妻妙一尼（工藤祐經女）

○—日如御前（池上左衛門大夫康光妻）—宗仲
　　—宗長

—卯東三郎兵衛尉（左衛門尉）祐信—日祐（號智祐始尊海弟子也）

—日照

○—妙一尼（妙朗尼）—吉祥麿（日朗）
　　初嫁源有國—經一麿（日像）
　　次嫁左近將監忠治—女（池上兵衛志妻）

△聖誕三十三年建長六年

○日朗上人　筑後公大國阿闍梨下總猿島郡能手源次郎有國ノ子也平賀本土寺開山比企、池上兩山ニ董ス元應二年正月二十一日壽七十八歲化師孝第一也

○妙一尼　棧敷尼（妙常日榮）文永十一年十一月十二日八十八歲死棧敷者地名也今鎌倉常榮寺所在地也

法然—九品寺長西（覺妙）受淨土宗—

思圓叡尊（南都西大寺）受具足戒—

○—新善光寺別當道敎（稱道阿彌陀佛）—性仙—蓮證—行悟（已下淨光明寺）

四條大納解隆房—

○—大納言僧正隆辨法師　號如意寺又云聖壽寺殿鎌倉鶴岡八幡宮別當寺門流學者也弘安六年八月十五日七十八歲寂

定豪（毫）居勝長壽院（廣澤流）—

實賢（小野三寶院流）受灌頂—

○—大倉阿彌陀堂加賀法印定淸　小野流定淸方開祖

○壽福寺悲願房朗譽　傳不詳

○—富木五郎左衞門尉胤繼　常忍日常號堂修院下總若宮邑主正安元年三月二十日年八十歲寂中山法華經寺第二代也

女房御前　妙常日妙）—伊預阿闍梨日頂

寂仙房日澄

乙御前

○—曾谷二郎兵衞尉入道敎信——山城入道道崇直秀（稱四郎左衞門）

妻（下總大野右衞門大夫吉淸女）—日進

（梅菊女ト兄弟也）

日源

—下總東葛飾郡曾谷住（又作蓮谷）正應四年五月一日寂　名日禮字法蓮年八十有餘歲

○—大進阿闍梨房　於熱原法難宗祖ニ敵ス　落馬而死云フ

○—三位房日行

○—淨蓮房　下總金原大宮別當被殺法橋改名金原法橋（譜、巧、存ノ疑）

（祖書証議論）三善善康入道善信—太田民部少輔康連—（別當佛祖統紀）源三位頼政（未葉）—

○—太田五郎左衛門乘明　結城入道又云妙日正中山本妙寺建立弘安六年四月二十六日七十六歲入寂

—妻　境妙庵目錄云道野邊右京ノ子大野吉清ノ女也云云　又統紀云富木五郎ノ姉也云云　字妙連名恒女也

太田乘明ノ子—日什（妙滿寺）

○帥阿闍梨日高—…日親（本法寺）

—日祐（頂妙寺）

稱伊賀阿闍梨中山第三代正和三年五十六歲歸寂

○北條相摸守執權時賴　建長寺建立主

○—北條重時　連署　極樂寺建立主

—受法—

法然—善惠房澄空—宗觀（又云修觀）

△聖誕三十五年建長八年（康元元年）

藤原鎌足…中務賴員（江馬朝時臣事稱賴山建長五年三月二十八日卒）—

○—四條左衛門尉金吾賴基—　通稱三郎

○—月滿御前　爲ニ賴道ノ室ニ文保元年十二月十五日逝年四十七歲法號法建日妙

○—日若御前　上野氏（南條）息歟更考

令室日眼女—嘉元元年寂

名越家江馬越後入道光時子四郎親時仕事入道收玄院日賴甲州內船村隱居正安二年三月十五日寂壽七十三歲

歸寂　聖典辭林一七五二頁

○進士太郎善春　江馬家臣傳不詳

工藤民部大輔小四郎行光子

○—工藤左近亟吉隆—長榮日隆（刑部阿闍梨妙隆寺建立後改鏡忍寺正安元年九月一日歸寂）

室

姓平氏妙隆院日玉上人文永元年十一月十一日死

○推地四郎　鎌倉武人傳不詳更考

清和天皇…南部光行三男（或云六男）—

○—南部六郎三郎實長—

—長義（羽切氏祖）遠野城主

—次郎實繼　護良親王隨從元弘二年十二月十三日年五十六歲京都六條河原被切

—祐光（彌三郎）

甲刄波木井鄉地頭永仁五年九月二十五日年七十六歲歸寂

○三郎兵衛尉　波木井家一族傳不詳

藤原忠平—九代目—池上左衛門大夫（池上藤兵衛尉康光歟極樂寺良觀信者也）代々住京都大工名匠也建久元年生弘長（安ノ誤歟）二年（或云三年）六月十六日死—

○池上右衛門大夫志宗長（境妙目鏡）宗仲（統紀、年譜）

武藏國荏原郡千束郡池上住弘安六年九月十三日七十一歲寂朗賢院日宗居士

○—兵衛志　稱=藤七郎=永仁元年卒子孫足利氏奉仕

—妻日如御前　平賀忠治女云日妙尼

○荏原左衛門義宗（武州荏原郡中延鄉住）—朗慶（越中阿闍梨朗門九鳳ノ一八幡山法蓮寺開山）

○高橋六郎兵衛入道（聖密房）駿州賀島住寂年未詳

○北條義時―泰時―○―時賴（最明寺入道）―時宗

―重時（極樂寺入道觀覺）―長時　執權トナル

―政村　連署トナル

△聖誕三十七年正嘉二年

○齋藤彌三郎利安　妙覺（又云法妙）駿州沼津住人滿松山妙覺寺建立

○山本疆三郎重安　駿州沼津住人八大龍王守護山妙海寺建立（中老日實開山）

○豐前公（石本日仲上人）―

○―日源　宇智海播磨法印（豐前公或云賢秀房）岩本實相寺學頭也正和四年九月十三日寂

○尾張阿闍梨　法敵傳不詳　實相寺住

○嚴擧　實相寺院主也　傳不詳

○行智　瀧泉寺主也　傳不詳

高橋入道（駿刄住）―

○―下野房日秀　元瀧泉寺學頭藻原山第二世常在院（賜後醍醐帝）　妙福寺開山建武年中寂（或元德元年寂日興弟子ト云）

○丹波房　中老僧上總ノ人初興師資事後向師ニ就ク藻原日宗ト同人也ト（可疑更詳）

○越後房日辨、少輔房日禪（後離散）、三河房賴圓等瀧泉寺住

北條時政……南條新左衛門尉賴員―

○―南條兵衛七郎入道行僧―　住ニ豆州南條又ハ駿州上野ニ共沒

○妻妙法尼（松野六郎女）―　年不明文永二年逝去ト更考

○—南條七郎次郎時光　法名大行正慶元年五月一日歸寂　許嫁妻（石河兵衛入道孫三郎源能忠ノ女）重須地頭也

○—七郎五郎　法名行忍　弘安三年九月五日十六歳沒　聖典林二五四九

○南條九郎太郎　上野氏一族傳紀未詳

△聖誕三十九年文應元年

○秋元（本）太郎兵衛尉藤原勝元（後稱太郎左衛門尉）　下總國印幡郡白井莊富木氏ト通姻也正應四年九月十七日寂　法名常法

粟田關白道兼　八世ノ孫—┬泰綱
　　└泰業（秋元氏始稱）—┬勝元（秋元太郎歟）
　　└○（今ノ秋元子爵祖也）

○宿屋（谷）左衛門入道光則　法名最信北條時賴、時宗近侍後安國論取次者後日朗ニ歸伏光則寺建立

大井荏司入道—┬甲州鰍澤邑主（或信州大井領主）
（妻河合入道女）—┬……妙福尼

○—白蓮阿闍梨伯耆房日興　甲斐公寛元四年三月八日生岩本實相寺嚴譽ニ學ス正慶二年二月七日年八十八歳寂富士本門寺大石寺開山也

—橘三郎光房
—天折

弟子寂日房日華（鰍澤蓮華寺建立）日尊（三十六寺改宗）伊務阿闍梨日代、寂仙房日澄（頂師實弟）辨公日道、式部公日妙、待從公日毫、大迫公日助等有リ

○日朗（前述）弟子　胞合阿闍梨日像、大經阿闍梨日輪、大法阿闍梨日善、大圓阿闍梨日傳、大善阿闍梨日範　摩訶一阿闍梨日印、大乘阿闍梨日澄妙音阿闍梨日行、越中阿闍梨朗慶　已上朗門九鳳

○熊王四郎　給仕下人傳未詳

○首題房日唱　富本氏家臣始淨土宗也號鏡阿彌　文永十年五月一日八十八歳逝去
○吉田益行　武藏思田ノ神官
○吉田兼益　京都ノ人當時有名ナル神職也
△聖誕四十年弘長元年　伊豆伊東流難
義時―重時―（極樂寺建立主叡尊受戒稱覺）
○―北條長時　陸奥ノ四郎法名惠阿文永元年八月寂
北條政村（連署）ト共ニ張本人也
○船守彌三郎　稱上原彌四郎伊豆川奈ノ住人也
○伊東八郎（四郎）左衛門朝高（工藤八郎）遠州浦鹿住人建治元年三月十五日卒妙法華院日豫、五十一歳寂（注書
讃當家宗旨名目、年譜攷異等）伊豆伊東管理者歟又祐光ノ後繼者歟更詳
―妙一尼又辨殿尼（日照母）
左大臣武知麿―（十七代目）工藤祐經―大和守祐時―
○―工藤祐光―後
―後藤基綱―女三川内待―妻
―加賀法印定淸
從五位下信濃守伊豆地頭也念佛眞言信者而後日向國至リ金剛山祐光寺建立法名道加年五十四歳逝去此人歸
伏トハ難信更祥
○明性房　伊豆住天台學僧后爲門下　傳不詳
○但馬公日乘　朝高ノ胤族也　傳不詳　（已下次號）

日蓮聖人の宗教と價値的批判

結城瑞光

時代の進歩は-Ve rbessorung となり、舊套の因襲を破磯して人類共存への開放は福祉の爲に社會關係の規律を研究して健全なる社會的要素の發達を促して居るのである、從來社會學的研究の失敗は科學の歸納綜合なる哲學的基礎の閑却に因る、劇烈なる生存競爭に於て敗殘者となるのは不徹底な社會組織に依るのである、ブルジョアから見た社會は Truunkenheit（睡眠時酩酊狀態）な感がある事と思ふ、人生の本質、生活の價値……嗚呼我等は何處にか安住處を求めるのであらふ、科學は實理哲學へ而して完成せる實生活の內容に、純眞の生命の焰に燃て微妙のメロディを聽く時純にして淸高なる世界は創造されるのである。

愚鈍闇冥なりし原始時代に於て未だ多くの經驗を有せざりし人間の頭惱に自然界の現象は恐畏疑惑の影を投げた、幼稚ながら世界の原質を哲學的問題として政究した彼等は感性より悟性へ、理性の衝動は無限の欲求に向ひて已性の特徵を發揮して論理的に組織的に統一的性情に原いて之を說明せんとしたのである、換言すれば社會的組織の複雜さは部分的及び統一的解釋によつて自然的に科學哲學の發生となり與へられただけの形の上では滿足は出來なくて實在を認識し、理想を現實化そうとした要求は漸次科學哲學の諸問題を惹起し宇宙萬物の成生を明瞭ならしめんとしたのである。

箇性の發輝が科學的智識となれば吾人の客視的事象の部分的研究となり其の考察は證明となつて宇哲森羅三千の本体を合理的に說明する事になる、然し乍ら人間の欲求は眞善美の理想境にある、本能的滿足か充溢

するものなれば智識の及ばざる總合的問題即ち經驗か超越した根本的の原則を思惟し觀察する事が能る其は哲學の頭分である、既に科學者が斷えざる批判と絶えざる疑問とを以て研究しても材料は無盡である、故に彼等は不斷の努力に於てのみ彼自身の生命を見出すのである、然し冷性なる理性にのみ其の生涯を委ぬるならば余りに寂莫であり無趣味ではないか、暖き自然界の微妙なる働を体顯する時宗教的情操の春の芽生えは訪れる事であらふ、凡て人間としては盡く哲學的問題を有する以上詩歌の音樂に或は又勞働に人間味を味識する事ができるのである、近世の大科學者アイザック、ニウトン（Isaac Newton一六四三—七二七）も宇宙を造つた神の力を讃嘆して居る、若しも科學的智識に於ける社會觀ならは極めて偏重であり頗る狹義である、ニウトンの宇宙引力說は數學と力學とを以て天体の複雜な運動を解結し、光の本性に就ても微粒子說さへも唱えたのであるが、科學の世界は纖細な數理の寵兒を養ひつゝあるから、此のニウトンの說をば根底から改造したアンシュタインと云ふ二十世期の產んだ寵兒がある、彼は吾人の認める宇宙の時空は有限であるとし機械的論證で宇宙の擴さは直經三鏡光年の範圍を出ないと斷定したのである。宇宙は既に相對的であると發見した彼は物質のみの學者であると見る時は未だ彼の人生觀を滿足に表現したとは云えないのである、彼の根本問題は吾人の認識問題の全線に解れてゐるのである、其れは四次空間の曲線の交り即ち物と物との直接交涉の時其れ自身絶對であるとし其れは時空に依るものでない、即ち吾人の直接經驗は物理的法則であり絶待の存在である、座標の相對關係によつて消失するもので無いとしたのである、相對性原理の說明は專門家に讓るとしてアインシュタインの場合、デカルトの Cogito ergo sum（吾思故吾在）の絶對の存在は誰も否定し得ぬ眞理とした如くアインシュタインの絶對存在も誰も否定し得ぬ筈である。然し科學の使命は何等かの座標を持つて居る限り、其れ自身の價値を相對性の上に所有してゐるのである、今は吾人の直接經驗による絶對其のものは獨り宗教と藝術との世界でなければならぬ、而も彼自身の內的生活は至つて感情的生活の基調に立つてゐる事は、希臘の悲劇詩ソフォクレスの詩篇中でアンチゴンヌが叫んだ告白を彼の生活としてゐる點でも解るのである、彼等科學者も其の目的は現象界と本体界との研究を一括して、價値と議論的研究とに於て總合

統一し矛盾の無い世界觀人生觀を作り出さうとしたのである、此境涯は宗教藝術の舞臺である。

社會の進歩は科學的分折解剖によりて部分的智識を得るとも、之を統一的原理によりて一大活力の發現をせねばならぬ、然ば此の一大活力とは何ぞと云ふに、哲學と科學とを抱容して完全せる社會的生活の所謂文化的社會を提出する要素である、此の要素とは健全なる宗教の信仰である、何程精密なる科學研究も、深遠なる思想哲理でも實際的に無價値なものが多い、其れは吾人の生活に於て無意識的の場合に微妙なる作用で冷細なる印象或は其れに依つて刺戟を受けて働く感情、之等は嚴正なる智識の所定を肯定しない事がある、言はば死者に對する智的解釋は生理的に枯死したものとするが、一般感情の上からは哲學的見解を超越して遷滅無常の觀念から同情哀愁或は頓悟直覺を体現する事がある、人生の複雜なる哲學に於ては到底解決する事が能ない、從つて何物か力强い救濟に攝取されねばならぬ、而して自己の安全を保證する事を熱望するのである、此の宗教意識の發現は理想の實行と表れ自己の行路を照すに智識を以てするに到るのである、即ち此の信仰の對照たる神の存在を認識し歎美渴仰する精神が人生の缺陷を厭忌して宇宙の根底歸趣に縋る感情が宗教の欲求となるのである。

日蓮聖人の信仰へ

畏縮！苦惱！の反響は絶對威力に對する信賴となり信賴は歡喜の精神となつた小我の自己は大我の生命に抱括されて、玆に偉大なる價値の生活、換言すれば人間が自己生命の源泉に觸れて人性の中に神性を發揮する精神狀態即ち靈格的人格となる事である。然し此の宗教意識の定義は從來不同であつたが、神を畏敬し信順して之に伴ふ道德を實行する感情を根本とした所は同樣である、但し此の絶對依憑に對する方法に主客の二觀である、身體機制を支配し感情を養ふ行法となつて現れる事は一律であるが、他力的宗教即ち身體は假現である本體世界の生活こそ理想の世界であると社會生活の意義を非定する客觀的宗教もあれば、冥合や神祕統一の內感性を自己身體に實現する主觀的信仰もある、要するに宗教心の發現は自己以上の偉大なる力に

よつて自己の不滅を如實にするのが目的である、次に起る問題に必然的に宗教の選擇てふ事である、思想風教を異にした民衆は都て同一なる信仰を持つ事は困難であるが同一宗教に統一される可能性は確にあるべきである、世界の二大宗教たる佛耶二教の比較に於て既に明かである．基教の本質は神に絶對信賴する他力教である、佛教でも教義が廣汎な爲に他力の義分もあるが、總じて釋尊の究竟證信即ち凡佛一如の意識狀態を宗教の生命とするからには自力教である、然し實際に於て社會全體の根本宗教は自他何ぞと云ふ重大問題に及ぶのである、從て文化生活の規範を確定する事になる、故に其の信仰の釋解を根本的にする事が必要である、信仰の意義は極めて廣義であるが、其の本質は宗教上の信仰にあるは言を俟たぬのである、心理學者のジエームスは理論的不安の一切掃蕩された心的狀態と云つてゐる、猶哲學辭書に載せた三義を見れば、

A　實在の直接認識

B　吾人の認識を超越する絶對若くは超越世界に關する直接認識

C　理論的說明の不可能なる原理の直觀

此の三義は信仰の定義の諸說であるが、之を總合した原則を作れば現實を超越した活力のある實在の認識である、從來信仰の基調は感情にありと思考されたが完全の信仰は智情意の三要素より成立されるもので智情意全體の合理的活動である、科學哲學に對しては感情が中心となるとも宗教其れ自身にあつては眞善美の三要素が圓滿に活動して宗教の本義を盡すのである、之等信仰中に於ても前述の如く比較的智的方面が多分に含蓄される自力教もあり、情的方面の勝れた他力教もある、然し自他二教が統一されて矛盾のない世界及び人生が創造されるならば眞の宗教の價値が定るのである、オイケンの宗教に對する出發點は、人生に於ける烈しき矛盾の感と人心の要求と現實との衝突の感とであると云ふ見解も此の眞理を物語るものである、若し此の矛盾と衝突とを避けしめ融和と光明とを授くるものが有るとすれば前述の如く圓滿なる解結を見るのである、聖日蓮の哲理的宗教の信仰は本體世界を本佛の生命全體とし之を認識し渴仰する時は迷情の凡夫は既に本佛の妙智を體得して現實世界は本體世界となる之を佛陀の究竟的證信たる事の一念三千と稱するので

ある、此の超越世界を現實化する信仰は人格完成の活力たる五玄具足の題目に依りて實現されるのである、此の時主客二觀即ち自他力の信憑は綜合統一されて現實化し其の福音も已利的に限らず社會的となつて價値的生活を實現し人生本來の欲求たる文化的生活を體顯されたのが吾日蓮聖人の宗教である。

信仰の寸心を改めよ

志村晧堂

立正安國論を繙く時、其の終り謗法對治の催促を結する一段に此の語を拜し得らるゝ。吾人が信仰に生きねばならぬことは、古くして而かも新らしい問題である、何れの國何れの處に於ても、信仰を無視して生きんとするものありとせば、由々敷一大事と云はねばならぬ、何となれば宗教は吾人の生活上に於ける關係が極めて大であると云ふよりも、寧ろ極めて根本的であるからである。此の宗教は如何なる時代如何なる國家にも甚深の影響を與へて居つて、人が數人以上集まつて生活を共にする其處には、自然的必然的に宗教は存在せねばならぬのである、故に之を無視せんとしても許さない、と云ふよりも自ら無視し拋棄し得ない先天的約束を持ち來つて來る。

元來吾人は孤々の聲と共にそれが人である限り、宗教心を附與され之を包藏して居るのである。寸心の語は列子の「嘻吾れ子が心を見るに方寸の地虛一矣」とある此等から出て居るが、此の寸心の中には善、惡、無記の悉くが藏せられて一つも欠けては居らぬ、社會組織の要素も破壞の素因も、而して世界の耳目を驚かす何ものをも持つて居る、と同時に宗教心を欠いて居るものはない筈である、然るに此の宗教心が總ての事業に生命あらしめ意義あらしめんとして、心の奥底に躍動して居るに拘らず、之が吾人生活上に直接關係なき

ものとして、之を疎外し甚しきはは毛視して顧みない「人の人格、國の目的總ての事業の爲には、宗教の必要を認めない、唯た各自の努力によりてのみ成し遂げ得らるゝ」と思惟することが、一般的思潮ではあるまいか。

此の努力！眞摯の態度に於てなす努力!!こはそも何ものが齎すであらう、事業に向つて忠實であることは吾人が先天的に附與された宗教心の發動ではないか、此の信念を欠いた一事業に果して幾子の功果を收め得やう、此人がなす總ては輕薄であり、姑息であり、僞善であり、瀰縫である、斯の如く信念を欠きて事業を果さんとする人のみの社會は、遂に其の向上は阻止され、罪惡のみに充たされて、信ずる處は唯だ拜金の一途にして、行ふ處は唯だ詐謀陰謀のみとなり、終に救ふべからざるに至る、社會組織の要素は斯の如き人によりて根底から瀆へされるのである、如何に世は澆季とはへ痛嘆の極みではないか。

然るに今茲に宗孜心の喚起に目醒るものがあつて、心の奥に動く信念を助長せしめんとしても、吾人の心靈を感化する宗教其ものに、正しきものと然らざるものとがあることに氣付かねばならぬ、即ち吾人は如何なる宗教に依つて處世の極致となすべきか？此の一事には充分の思考を要すべきである。蓋し正しからざる宗教に依つて信念の鞏固を期し、事業に生命あらしめんとすることは、恰かも雅致ある盆栽に毒水を灑ぐにも似て、茲に一大錯誤を來たし、遂に防遏し難き缺陷を生じて、其の完成を期することは到底不可能であらう、故に吾人が最も眞摯に考究せねばならぬことは宗教其ものゝ正否如何である！

個人として安心立命をなさんとする上に、若し個人が社會を離れたものとする、否な社會を離れしむる宗教ありとせば、之を以て宗教の正しきものとは云ひ得ない、何となれご吾人は現實の人生を尊重するものであり、進んで眞の國家の存立を理想とするものであるからである。若し又人生を以て夢幻的に觀じて、厭世悲觀主義を鼓吹する宗教ありとせば、之れ亦た宗教の正しいものではない、現實を悲觀するものは、人生をして意氣を銷沈せしめ、此をして意義あるしめず、爲めに堅實なる國家社會を形成せしむること不可能の故である、或は又現實をのみ重視して、永久を說くに疎き、或は未來にのみ憧れて現實を輕視するもの等、亦

た以て正しさを失ふ宗教であると云へよう。單なる現實主義、單なる未來主義は其の是非は暫く措き、斯る主義は現實的文明の上に發達力を減ずることは明である、今茲に此の兩夫を退けて理想と現實とを調和し、永久と人生とを結合せしめて、適當なる信念を與ふる正しき宗教がある、日蓮聖人によりて唱導せられた、法華經の教がそれである。

聖祖の見た法華經の教が、吾人の心底に動きつゝある宗教心を如何に發動せしめ得らるゝか、先ち之を經文の上に見やう。

第七卷には人生を尊重して「我れ敢て汝等を輕しめず汝等皆な當さに作佛すべきが故に」とある第六卷には「資生產業皆な正法に順ず」と其の生活と法華經の信仰との一致を說いてある、之れ一切をして理想生活ならしめたので、此の理想に生き得らるゝ人生なるが故に尊貴なのである、即ち吾人をして一たび高遠の理想に上らしめ、而かも立ち飯りて現實の人生の尊重すべき所以を知らしむべく明示されてある。摩耶の生める釋迦は生死無常の世に常住不滅を悟りて無始無終の一大生命を得、此の安きことなき三界の火宅に於て、而かも能く林野に安處することを得られた、如來の安處の一切の安處であり、其の不滅は一切の不滅であらねはならぬ、即ち吾人に於て安處せんとし滅せざらんとせば、なし能ふ不可能性あることを示されたのである、佛陀の一切は吾人の一切である、吾人と佛陀と何れに異りが有らう。

之を聖祖の垂訓に拜すれば、

遷滅無常ハ昨日ノ夢菩提の覺悟ハ今日ノ寤ナルベシ

と妙旨驚くべきではないか、法華經信仰の上に人生を達觀すれば、無常は昨日の一夢と消え、今日は苦提に夢醒めて、現實の人生に意義を生じ根底を得て、茲に人格の完成を見、やかでは國家社會の安定となりて、所謂寶土の實現を見るに至らんことは、然らずや大地を的であらう。

汝早ク改メテ信仰、寸心ヲ一速ニ飯セヨ實乘ノ一善ニ然ハ則チ三界ハ皆佛國也佛國其ノ義シヤ哉十方ハ悉ク寶土也寶土何ッ壞シヤ國ニ無ニ義微一土ニ無ニ破壞一身ハ是安全ニノ心ハ是レ禪定ナラン此詞此言可レ信ス可レシ崇ム矣

と正しからざる宗教に對するが故に一善と云ふ、一の對待的なることを意義あらしめ、國家をして佛國土たらしむることはなし得ない、吾人か其の目的事業に着實にして、遂に社會を堅實ならしむると否とは、全く之に飯響し此の信念に住すると否とに存する。

今此ノ娑婆世界ハ離ニ三災一出ダルニ四劫ヲ常住ノ淨土ナリ佛既ニ過去ニモ不レ滅セ未來ニモ不レ生セ所化以テ同躰也

とは法華經の信奉によりて、現實を直ちに理想境たらしめた聖祖の叫びではないか、と同時に一面に於て此の生佛一如淨穢不二の大理想の實現は、此の現實の人生を離れて成立せざることを示されたものと拜し得らるゝのである。

今や世は先づ現實と理想との調和ある、そして人生に飯着を與ふる法華經に基き、心底の宗教心を躍動せしめて、現在成佛の平和境に達し、及び未來永遠の一大生命を感受して、人類の使命を果すべく、直ちに信仰寸心を改めねばならぬ、これ無からんか現代は終に亡びるであろう。（終）

念佛思想史に對する余の管見

福島瑞岳

一　序言

歐洲戰爭後、總ての諸問題は、世界的と成つて來た。そして、平和の聲は、風の靡く樣に傳へられて來た突如として、提唱された、ウェルス氏の、世界國の建設論の如きは、實に其の顯著なるものであらう。

然し其の平和の裏面には、何物か精神的に、根底を與へるものがある樣に思はれた。

それは親鸞上人の思想であつた。そして親鸞上人の教義思想が最も遍照光明に時代的思潮に敵し、根本的に慰安を與へて宣傳されてゐるではないか。

然し自分は如何にしても腑に落ちない。それは宇宙大平和の實現は佛教の眞隨たる法華經主義即ち日蓮主義に依らなくてはならぬと信じたからである。

如說修行鈔に。天下萬民諸乘一佛乘となつて、妙法獨り、繁冒せん時の萬民一同に、南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風を意を鳴らさず、雨つちくれを碎かず、世は義農の世となりて、今生には不詳の災難を拂ひて長生の術を得、人法共に不老不死の理顯れ時を各々御覽せよ、現世安穩の證文不レ可レ有レ疑ヒ者也。

と斷せられた。此の現世安穩は、法華經の保證で、又不老不死も同樣法華經の明文である。即ち、

藥王品に曰く。此の經は是閻浮提の人の病の藥なり若し人病あらんに是の經を聞く事を得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。

と書かれてある、閻浮提は即ち世界中の人類の病の良藥である。然らば世界最大の平和的經典は、實に法華經であつて、日蓮主義でなくてはならぬ。

然し是れは井中の蛙の大海を知らないも同樣の我田引水論だから、一往親鸞上人の思想を研究しなくてはならぬ。そしてそれを知るには歷史的根本思想に逆つて傳統的に其の經路を知らねばならぬ。

二　印度念佛思想の起因

印度に於ける念佛思想の起因は、何處から來てゐるかと云ふと、近來或人の說に依ると發端は大乘經典からだと云ふ。勿論佛陀は、淨土三部經を說いて專ら稱名念佛に因つて安養淨土に往生する事を敎へられたのであるから、佛說に起因してゐる事は當然である。然し阿彌陀經は、煩惱の爲めに苦しんでゐる一人の婦人をして、慰安を與へんが爲めに說かれたのだから、佛陀の全生命と云ふ事は出來ない、大乘佛敎が、佛陀の眞髓とするならば、大乘敎典そのものからと云ふ事は出來ない。何んとなれば、淨土三部經は、一部分的の

方便說であるからである。淨土宗の依經は、觀無量壽經、無量壽經、二卷、と阿彌經四卷との三部である。印度の龍樹菩薩、天親菩薩、支那の慧遠大師、曇鸞大師、導綽禪師、善導大師、日本の演信僧都、法然上人親鸞上人等は、皆此の淨土三部經に依つて、念佛思想史の系統をなしてゐるのである。

一、龍樹菩薩(佛滅後五百年)は、十住毘婆娑論を著作された。それは華嚴經の解釋の爲であつたと云ふ。そして佛敎を大段二種として、一を自力の難行道とし。一を易行道とした。前者は人生の實修苦行の艱難なる事は急坂を步行する樣だと明し。後者は他力本願にて往生ずる事は、丁度一平海を船で、彼岸に達するが如きであると示されてある。

二、天親菩薩(佛滅後七百年)は、北印度にて出誕された。往生論、淨土論、等の小乘の論部を澤山著作された。

「世尊我歸ニ命盡十方無碍光如來一願生ニ安樂園一」と菩薩自力の信仰を堂々と告白された。

余今此の二菩薩の思想を考察して見るに此の二菩薩は純念佛思想家であるかを疑問せざるを得ない。

安國論新註ニ曰ク、當レ如ク天親菩薩初メ依テ權敎ニ著シ唯識論ヲ立テ五性各無性不成佛ノ義ヲ明シ十界皆成ヲ又、龍樹尊者ハ初メ宣ニ十住等ノ論ヲ終ニ著シ智度論ヲ以テ判ニ爾前法華ノ優劣ヲ云云

此の意を以て考へて見ると、二菩薩の思想は、最初は、權敎に依つて、彌陀念佛思想を主張されたが、後に其の非なる事に氣付き、實敎に依つて、法華經の思想を取られたことは、事實である。

然らば、前者の龍樹、天親と、後者の、龍樹、天親と、其の人格、精神に於て、全々異ならざるを得ない內證の邊に約したならば、淨土眞宗の正系統とする事は出來ないと思ふのである。

三　支那念佛思想の系統

支那念佛の系統は、慧遠、曇鸞、善導等である。

三、慧遠大師は、道安に師事して、講說を受けた人である。廬山で、蓮華を池中に作つて、晝夜六時を定めて同信の僧俗と共に修行された、當代の名僧で、殊に十八賢と稱せられたのであつた。

四、曇鸞大師は、長命を欲して、五臺山に上りて、陶弘景に就いて、仙經の術を受け將に、歸らんとする途中菩提流支に逢ふて、長生不死の法中仙經に勝れるものはないかと問ふた。流支の云ふのには「汝長生不死を望まんするならば、觀無量壽經を播けと授けた。大師は釋然と省悟して、淨土に歸した。天親の淨土論に依つて、願偈大意、起觀生信、觀行体相、淨入願心、善巧攝化、離菩提障、順菩提門、名義攝對、願事成就利行滿足、の十科目を立てゝ、縱横無盡に、巧に解釋して、頻りに淨土思想を宣傳されたのである。

五、道綽禪師は、北國の艸洲の人で、十四に出家し、涅槃經を講じたが、後瓚禪師に事へて禪を修して、大に、造詣が深かつた。一日石壁の玄忠寺に、曇鸞大師の碑文を觀て非常に感して、淨土門に歸した。安樂集二卷を著した、道綽の四修とて、念佛の行者の修すべき、四種修行を講じられた。一、長時修。二、無間修三、恭敬修。四、無餘修、とて一心に淨土の業を修して、他に心を交へざる事である。然るに安樂集に、此の四修を明せる處はない。恐らくは隨代の善導大師の觀念法門に此の意があるから、道綽は、善導の誤れるのであらう。

六、善導大師は隨の人で道綽禪師を師として、淨土敎を究めたのである。以前の、慧遠、曇鸞、道綽等は、盛んに、淨土思想を弘通されたが、敎法の細領を組織的に、法門宣傳の、効果を與へたものではない。

然るに、善導大師は諸先哲の敎義を、組議して、大成を遂げたのは、實に此の人である。永隆二年三月二十七日六十九歳で寂された。觀經疏、往生禮讃、法事讃、觀念法門、般丹讃、等である。眞宗では。七高祖中五祖として尊崇されてゐるのである。日本の法然上人の念佛思想は、支那三流中善導大師の思想を中心として繼承されたものである。

玆に注意を要するのは、佛陀が一代五十年の敎說は、必ず前後を立て、そして權實淺深を、辯ぜられたのである。而るに、曇鸞、道綽、善導等は、諸師の權敎に就いて、權を弘め、佛陀眞髓の、實敎あるを知らないで先敎に依つて後敎を捨てゝ、原始佛敎の根本思想を探らない不知恩の者と日蓮聖人は、嘆じられたのである。次に、日本佛敎史上に於ける念佛思想觀を述べて見たいと思ふ。(未完)

魂の郷地を索めて

高山惠忍

私の今日の惠まれた尊い一日を感激しながら靜かに今日までの自分の過程を振返つて見る時、或は山或は野原に夜露に打たれながら、佛を求めて歩いた姿は、丁度高野の山に父を求めた石童の心であつた、私の淋しい心を抱いて走馬燈のやうに流浪して歩いた順禮姿を忘るべくもあらずして、ひたひたと迫の追臆に包まれながら、進まない筆で書き付けたのが本篇である。『宗教家の天職に自覺せよ』とは私がミッションスクールの門をくゞつた時に、最初に試みた演說の結語であつた。此時分の私はほんとうに若い宗教家としての熱血が漲つてゐてこの演說も眞に哀心の叫びであつた。そうして誰にも爲し得ない福音宣傳と云ふ貴重な天職にあることを心から幸福に思つてゐた。毎朝凉しい杉並木を通つては學校へ行く。私の目の前にはいつも前途の輝ける希望を抱いて一歩々々力强い足跡を踏みしめながら憬れの世界へと急いだのであつた。血に燃ゆる青年が地上のあらゆる權勢や肉の榮光を振り捨てて、飽迄も天國建設の爲に一生を捧げようと決心をしてゐたのだ。これほど堅い決心と熱い信仰とに燃へてゐた私が、今は『求めて與へられざるの悲哀を』かこたねばならぬとは、何んと云ふ昨日に變る今日の姿であらう。自分ながら今昔の感に打たれてしみじみと涙の慘む程淋しい悲しい感じに襲われる。實の處巖のやうに堅かつた私の信仰は根底から破壞されてしまつたのだ暴風吹き荒ぶ冬の荒野のやうな淋しさが今の私の生活なのだ私は『眞に宗教家の天職を味識して永遠の生命を全うしなければならぬ』と深く自分の內面生活を凝視した時大きな懷疑に逢着したのであつた。この懷疑は今迄無條件で受入れて來たことの全べてを疑ひ初めた。かくて加へてたつた一人の母の死が人生に對する煩悶となつて火に薪を添へる樣に深い々々懷疑の淵へと導いて行くのであつた。今迄愉快であつた學校の授

業もいやになつて教師の血の氣のない古典の解釋などはとても聞く氣になれない。生徒は生徒で卒業後の住職問題を論じ合ふ位が關の山で一人として、眞面目に人生の眞實さにぬかづくやうな者はない。私は其等の生徒と伍して、安價な生活を送るに餘りに年老ひて居なかつた。それからと云ふものは學校を休んで、小川の邊りや靈廟のあたりで半日も考へ込んでゐることは珍しくなかつた。しかし懷疑は日一日と募つて行く。煩悶は益々繁くなつて來る。惱みのどん底の苦しみより伸び上らんとする焦慮は益々、いらだたしくなつてくる。一方には異常の緊張味を以て、讀書慾が欝然として起つて來る。毎日學校の圖書室にうづくまつて、書物を漁つた。而し其だけでは、とても滿足することが出來ない。で、知己の家の藏書を、片端から讀み倒した。而し斯る讀書は、少しも煩悶の解決とはならずして、却つて煩悶を增すばかりであつた。果ては、自分の心に、偉大なる力を與へてゐた、み佛の姿がだん々々と、搔き消されるやうになつては、一層焦慮せざるを得ない。若しも、私からみ佛の姿を見失つたならば、自分はたゞ自殺より外に、道はないと思つた時、私の心はメーテルリンクのチルチルにミチルが、青い鳥を追ふて、逍遙ふたやうに、佛の姿を追ふて行かねばならぬと、決心した。丁度昔、猶大の民族が、エホバの神のみ姿を追ふて、エヂプトの野を逍遙ひ歩いたやうに……。しかし私には何處迄行つても、漠々たる荒野が際限もなく、續いてゐる……。淋しい無神の荒野が。どうとう自分一人の解決にあまつた私は、先輩の人々の門を叩いて、一脈のライトを得やうとした。而し其は凡て徒勞であつた。解決の緒を暗示されるどころか、訪門する度に、『失望』の二字を深く々々印象される、許りであつた。實際、先輩や大家氣取つてゐる人々ほど、つまらないものはない。どんな悶へを持つて行かうと、其膝にすがらうと、をつに自分許り、覺り濟して通り一片の、概念的な、切口上しか、答ふべきものを心得て居ない。其ではどうして、悶へに燃へる青年の琴線に、觸れよう。有名な名士や說教家の教檀の下にも、ぬかづいて見た。而し其も少しも、心を遣める料とはならない。こんな具合だから、宗教家は無用の長物として、社會から、敬遠されるのであらう。推し考へて見るに過去幾百年の、時代思潮の流動は目まぐるしい程、變遷に變遷を、重ねて押流して行つてゐる。そして、民衆の心には、其都度、深い々々恨

跡を刻み付けて、行つたのだ。最早、現代人は、人間の生活を、靈の世界に至る階段と見るに、餘りに、強く、自我の尊嚴さを自覺してゐた。そうして、三四世紀の昔のやうに、極樂淨土の彌陀の像をおがんで、隨喜の涙を流しては居ない。あらゆる空虛な傳統を押し壞して、人間生活の上に靈の世界を建設しようとしてゐるのだ。斯ふした民衆の、時代思想の何んたるをも解せずに、幾百年も昔の、先輩の說を踏襲するを以て唯一の節操と思つてゐる宗敎家に、どうして人間の魂が救へよう。人間の迷ひや。人間の悶へに對する指針が說けよう。上海や大阪に、非宗敎運動が起るのも無理はない。眞面目な人生の懷抱者や、悶への青年がどん々々、旣成宗敎の手から雄れて行くのも無理はないと、思つた。あゝ眞の宗敎は旣成宗團を離れて存在するのだ。私はもう人の話なんか、聞く氣になれない。『賴る者はたつた自分一人なのだ』としみじみと思ひ知つた。其時に思出したのは、幼き折に聞かされた、あわて者の話である。あわて者が、もうそろ々々春が來さうなものだ、一つ春を迎へに行かうと、革靴をはき辨當を携へて、海よ山よ、と探し廻つたが、春が見當らぬ。ガッカリして家に歸つて見ると、庭前の紅梅が、一輪咲いてゐるのが目に入つた。其處で『盡日尋レ春不レ得レ春、春在二枝頭一旣十分』と詠したと云ふ。長い間を、さ迷ひ盡した私は、矢張自分自身の中に佛を、見出さねばならなかつたのだ。と、云ふことが最後に判つた。全く自分以外に何處を見ても光はない。望みはない。只一人砂漠の中を流浪して歩く、旅人の姿なのだ。

さして行く笠置の山を出しより
天が下には隱れ家もなし

その儘の姿である。悶へ悶へ、あへぎあへぎ、して救ひは自分丈けだ。廣い世の中に、自分唯つた一人なのだ、と痛感した。而し其自分も『如何なる者か』となると、少しも判らなくなつて來る。全べての中心主觀である、自己か判らないのだから、世の中の萬象盡く不可解の闇に包まれて、邊りはかすかな光だもない殆ど捨鉢になつて暮したことも、二月許り。實に精神牢獄其儘である。而しそんなになつても、私の心には宗敎的要素がどうしても去らない。又ぞろ、思ひ直して、讀書し初めた。其の範圍は大分廣汎に亘つた。基

督教の教義や、信仰狀態にも、沒頭して見た。而し何等の根據もなく、理性的反看もない、只盲目的に感情を弄んでゐる、彼等の頭には、どうして透徹した、自我の意志が取り扱へやう。禪宗や眞言の書物も嚙つて見た。親鸞の信仰も叩いて見た。而し空想的假定の癈墟を、魂の住家と思ひ込んでゐる、思想には人間性の眞實さのある筈がない。斯うして、走馬燈のやうに、次から次へと、轉々して行つて遂に、哲學に解決を索めようとして、入つて行つた。當時非常な觀迎を以て紹介されてゐた、オイツケンやベルグンの思想には尠ず、興味を覺へた。彼が永遠の人性の上に立つて、盡きざる奮鬪を續けるのが、人生の眞諦であると云ふ自我肯定の氣魄には、心を惹かれてしまつた。而し探究に探究を重ねて思索して行つた時、どうしても哲學では充たされない、或る物、があることに氣がついた。矢張哲學と提携しても駄目なのだ。私は初めから、理論の整つた世界觀や、人生觀を得れば、それでよいと云ふのではない。止み難き宗教的要求が根本を支配してゐるのだ。かくして、既成宗教の何れにも、幽玄なる幾多の哲學にも、一點の光も見得なんだ私は殆ど失望の極に達した。いかに愚純な自分とは云へ、自分の頭の續く限り、根限り、もだへて求めたのに……、魂の住むべき鄕地を發見出來ぬとは……、あゝ思へば絶望の極、華嚴の瀧に身を投じた藤村操を、どんなにか懷しいものであつだらう。學校も休み、知已とも音信を絶つて、毎日ぶらぶら山の人氣のない處を歩き廻つだりしてゐた。かゝる絶對悲觀の折柄、遂に、日蓮聖人の眞意に觸れる機會に遭遇した。哀れな順禮が破産した淋しい胸を抱いて、上人の聖廟にぬがづいた時、心の奥深く々々、八重雲分けて閃き落ちた、一種不思議の光。私の心の奥の奥底迄、射通して行つた。廣い々々野原を涸渴に攷められながら、さ迷ひ歩いた順禮が、漸く清き泉を見出したやうに、アラビヤ砂漠の中に、オアシスを發見したやうに、私の心は喜びに振へた。日蓮聖人の一生、其は取りもなほさず、自我肯定の、深刻なる精神生活。自ら惡戰苦鬪することによつて、靈の王國を心內に現化せんとする彼の意志。首座に坐つても、流罪に處せられても、自若として、眞の憬へと急いだ英傑の面影。彼の心は常に萬世を包含し、永遠の生命に呼吸してゐたのだ。私は上人を追憶することによつて、偉大なる力と信念とを發揮し、この信念と力とに依つて永遠の生命を把握することが出

來ると信じた。今迄長い間求めて居たのはこれである。自分が人生の神秘に觸れてこそ、永遠の生命に生き人生を生かすことが出來るのである。自己の意志を通ずるにあらざれば、人生無意義なりてふことを、深く體驗した。哲理を要求する理智の方面には、一念三千の大哲學あり、教義內容の嚴正なる批判反省は、正しき信仰の合理性を保證し、絕對者即ち、久遠本佛の抱擁のもとに、魂は安らけく憩ひ、自己の意中に現化して、常寂光を作り出す、あゝこれこそ、人間生活の壯麗なる殿堂ではないか。思へば本佛の懷ろに寢つてゐた自分が、偶像や虛飾の城廓に障へられて、眞のみ佛の心を知らなかつた。そうして、家を飛び出して東西南北を流浪してさ迷ふたが、再び本佛のみ許に歸らねばならなかつた。而し其本佛は最早や、五重の塔や、優秀なる調刻を施した本堂の中にはなかつた。形式の偶像を離れた大自然の中に、自己の胸の奧深くに秘められてあるのだ。憩ふべき魂の鄕土、其は日蓮聖人によつて教へられる永遠無窮の玉座であつた。假相を脫した眞實の樂園が展開されてあつたのだ。—(十一、九、二十一)—

能化と所化

深澤雪童

能化所化は師徒の關係である。敎師と生徒、師匠と弟子、皆能所相對である。けれ共今自分は、道俗の能所相對に就いて考へて見たいと思ふ。若し、日蓮聖人に對し、又遠く大聖釋尊に對し奉れば、現在の道俗共に悉く所化である。而も其の所化たるや、壽量品に於て、能化佛陀の久遠成道顯本と共に、我々も久遠已來の所化である事が顯されたのである。

扨て其の道俗相對に就いて考ふるに、能所共に、責任即實踐すべき道がある。先づ能化の責任を云へば、

所化を教化善導するにある。身口意三業を以つて教化する事が出來るも、時期相應の方法は、勿論口業教化である。所謂辯說である。此の口業教化は、貧富の別なく、老若を論ぜず最も普遍的に利益を被らしむる事が出來る。けれ共、人もとより、能あり、不能あり、萬人が萬人辯說に巧みとは云へない。故に强いて辯說を用ひずとも、充分教化する事が出來る。即身業教化である。古から身を以つて或は社會事業に力を致し、或は自身戒律堅固に持つて、衆生教化に盡して菩薩と呼ばれ、活佛の如く崇められた、高僧も澤山ある。更に現今に於ては印刷術の發達を利用して、文筆傳導も容易に出來る。けれ共是等身、口、文筆等の源は何處か意より口に出で、身を動かし、筆に走らすのである。故に吾々能化者は、第一に意を清淨に持たなくてはならない。思ひ內にあれば色外に現る。若し意になくして、言葉に發し、行動に現はれたとしても、其れは極めて力のない教化である。教化と見えても教化の價値はない。若し此樣の者があれば、全く、宗教家としての假面を被る、宗教家と云ふ名義を以つて、己が生計の手段と心得て居る者である。されば能化者は如何なる心を根本として、化導に當るべきか。謹で案ずるに釋迦如來の說法、宗祖大士の弘通、皆衆生救濟と云ふ大慈悲心の現れである。故に吾々能化として立つ時は、宜敬く此の佛陀及び宗祖の御心を心として衆生救濟の任に當るべきである。慈悲を離れて衆生教化は出來ない。然し慈悲には自ら嚴愛の二方面、所謂父格の慈悲、母格の慈悲のある事に注意する必要がある。攝折二門共にの慈悲の教化である。只蓮華の如き淸い慈悲心から發して、一雨の能く三草二木を潤すが如く、努力する事が肝要である。

次に所化は能化の教を受けて、佛道修行に勤むべきである。又所化は能化より法施を受くると同時に、財施をなし外護して、是を助くべきである。能化所化は離るべき者でない。車の兩輪の如く、鳥の雙翼の如く相輔けてこそ、佛法も興隆するのである。內ニハ有テ智慧ノ弟子ー覺リニ佛法ノ深義ヲ外ニハ有テ淸淨ノ檀越ー初めて佛法も久住する事が出來るのである「今生は實長が身に及ばん程は見つぎ奉るべし。後生をば聖人助け給へ。」と六百五十年の昔波木井公が宗祖に御願ひし契約された樣な、淸い信仰さへあつたならば、大聖人は何時でも「靈山へましまして艮の廊にて尋ねさせ給へ。必ず徒ち奉るべく候。」と、仰せらるゝであろう。

然るに現今の信徒の中に、斯の如く清い信仰の所有者が何人あるか。多くは金の力を以つて大壇越と稱し自分の淺薄の智識を以て、少しく教義を研究すれば增上慢に陷り、僧侶を批判し、欠點を探し出し、天晴大學者となりすまして居る者が澤山ある。甚たしい者は經文讀誦の音聲、節廻し迄を云々せんとする者さへある。是等の人々は誦經を以つて浪花節と心得、或は先祖の廻向を以つて寺院との交際術と考へて居るのである。

自分は殊に宗祖棲神の法窟たる延山近傍に、此の傾向の甚だしいのを歎かざるを得ない。身延の村民にして、月に一回祖師堂に參拜する者が何人あるか。八十余歳の法主猊下が、四方御親教の御發錫、及び御歸山を迎迎する者が何人あるか。彼等は或は庭に立つて互に私語しつゝ眺め、間違つて低頭禮拜する者さへ極めて稀ではないか。宗祖大士が「縱ひ何處にて死に候とも未來際迄も心は身延山に棲むべく候。」と宣ひ、「日蓮が弟子檀那等は此の山を本として參るべし。」と御遺言あらせられたからには、身延を以つて信仰の中心としなくてはならない。身延こそ眞の常寂光の都たるべきである。然らば常寂光土建設に要する最大急務は何か？法貴しと雖も自然には弘まらない。如何にしても完全なる能弘の師が必要である。「人貴キカ故ニ處貴シ」とは此の事である。斯くの如く考へ來た時に、自分は完全なる能化輩出即教學の勃興を叫ばざるを得ない。

ある人現在の延山を評して

「杉の栽培も結構である。けれ共人物の殖栽は一層大切である。」と

聖日蓮之奮鬪

間宮觀應

渺茫たる海洋峥嶸たる峰巒、偉大なる自然を背影として七百年已前東條安房の一角に旃陀羅が子とし孤々

の聲を擧げし聖日蓮は吾等が常に忘れる事の出來ない最も猛烈な最も意義ある清い奮闘の軌範者であつた。

彼の奮闘は西洋に於けるルーテル以上の宗教革命の献身的奮闘であつた。彼が此の奮闘を開始するまでには宗教に對する多くの疑問もあつた煩悶も有た。然し其の疑問の結果其の煩悶の結果勇敢なる宗教革命の運動は開始されたのである。

彼は十二歳の時より清澄の雄刹に於て經教卷に目を曝らし清澄に在る一切の書籍を讀破した。

時に聰明なる彼の胸裏にはムラ〳〵と一疑は生じた彼は突如として叫んだ。

現今八宗十宗有りて互に權實を爭ふと雖も釋尊の本意は定で一なるべし何れが是れ眞佛教なるや。

自ら問て又自ら解んとし默然沈思する事數刻然し彼は遂に妙解を得る事が出來なかつた。彼は彼の力の及ばざるを知り師の教を請はんとした。

依法不依人、依義不依語、依智不依識、依了義經不依不了義經、とは槃涅經に說く四依弘經の法にて候。然るに各宗同じからず華嚴宗は華嚴經に依り天臺宗は法華經に依り念佛宗は阿彌陀經に依り眞言宗は大日經に依て立てられて候。此の中釋尊の眞意に適ふものは熟れにて候か。

師道善法印は學德兼備の高僧であつた。然し彼の此の質問には答へ得る事が出來なかつた。

師に問へども答へず。彼は佛教に對する疑問はより以上深く煩悶は更に煩悶を重ね夜の目も閉じられぬ樣になつた。彼の佛教に對する疑問と煩悶は抑へんとして抑へがたく問ふに師なく語に友無く學ぶに書なき片輙の一寺では滿足出來ない。彼が遊學の心は愈〻抑へ難くなつて來た。而して目指す所は先づ新氣運の動きつゝある覇府鎌倉であつた。

四年の鎌倉遊學五年の叡山遊學及び園城寺、高野、天王寺、等の諸寺歷訪苦學遊學十數年其のかい有つて遂に彼は八宗十宗中何れが眞佛教であるかを定め得、兼て見込を着け來てた法華一乘釋尊一佛主義は愈〻明確となり此の中心主義に照して見る時は諸宗各々釋尊の眞意にあらざる事は瞭然となり法華經に對する信念は愈〻堅きを加へる樣になつた。「法華經第一」是十數年の發奮靜思攷究修行の結果として生じ來た大主張で

あつた。彼の主義は決した。主張は定まつた。そして是を萬天下に向て發表する成算も漸く熟して來た。而し此の時に於て彼の胸中にはまたもや苦悶が生じてきた。

今自分は一切經の勝劣八宗十宗の正邪は辨た。而し今公然と世間に發表したならば三類の强敵の競い起る事は掌中の玉を見るよりも明白な事である。もしも是を言はなかつたならば釋尊の身命を喪ふとも教を匿さざれとの諫曉を用ひぬ者となり無慈悲の者と終らねばならん。如何になすべきか日蓮が身體はこゝに極まれり。(報恩抄取意)

彼は手を叉み冥目しそして熟思した。時に彼の胸中に浮び來たつたのは法華經の文であつた。

如來現在猶多怨嫉況滅度後云云又曰〝一切世間多怨難信云云又曰く我不愛身命但惜無上道云云又曰く不自惜身命云云涅槃經に曰不惜身命云云

今度自分が身命を惜んだならば何時の世にか救世の大願を全う出來樣か世間より怨嫉されるに依て初めて自分は法華經の行者としての價値があるのである。人事を盡して天命を待つ命を的として法華弘通をしたならば必ずや釋尊の大理想廣宣流布の大願は實現する事ならん。

數刻にして彼は兩眼を見開た。その目は希望と決心との光に充ち滿ちていた。彼の滿面は歡喜の色が漲ていた。たとへ胴をばひしほこを持てつゝき足にはほだしをうちきりをもつてもむとも命の通はん程はよも南無妙法蓮華經の御題目は捨てない。かゝる大決心は彼の胸裏に深く深く刻まれた。斯の如き献身的大決心大覺悟の前には『わずかの小島の主のおどさんにをそれては閻魔王の責をば如何にすべき』と呼號され刀杖瓦石の難、遠離於塔寺の難、數々見濱出の難、有りとあらゆる迫害は風前の燈の如きものであつた。

此處に始めて彼の意志は決定し權實二教の戰端をば淸燈の一堂に於て開た怨嫉多難の佛の豫言は的中し遠離於塔寺の難を始めとし或は燒打の難或は龍の口或は佐度四箇度の大難無量の小難襲ひ來れば來る程彼は勇氣百倍また百倍奮鬪に奮鬪を重ね獅子王の如き勇猛心のもとに突進した。彼の一生は奮鬪の歷史であつた。彼は奮鬪の勝利者であつた。

聖人滅後六百五十年の今日に於て旭の昇るが如き勢をもつて益々その精神を發揮し來り時代の進化と共に彌々社會より歡迎を受けその向ふ所滔々として流れ今や聖日蓮の偉なる人格は廣遠にして且つ玄妙なる教義に乘じて世界到る處に君臨せんとするに到りしは一に彼の献身的奮鬪と犧牲的努力との然らしむる所である。

吾人等はかゝる堅忍不拔の勇者の末輩である。『日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず』『佛法を學し謗法の者をせめずして徒らに遊戯雜談のみして明し暮さんは法師の衣を着けたる畜生なり』と訓誡叱咤され二陣三陣續けよかしと我等弟子等を策勵されたる御聖訓を體得して大いに現代社會の惡思潮と戰ひ日蓮主義の顯揚に盡力せん。

聖訓

鏡に向つて禮拜をなす時、浮べる影、又た我を禮拜するなり。（御義口傳）

信心の血脈なくんば、法華經を持つとも無益なりと。（生死一大事血脈鈔）

藏の財よりも身の寶勝れたり、身の寶より心の寶第一なり。（峡峻天皇御書）

一諦をなめて大海のしほをしり、一華ををして春をすいせよ。（開目鈔）

俗間の經書治世語言資生の業等を說かんも、皆正法に順せん。（一代大意鈔）

師々王の如くなる心をもてる者、必ず佛になるべし、例せば日蓮が如し。（佐渡御書）

御草庵

下田冷涙

天に華咲き地に果なる
靈鷲の峯や日域の
比叡の山にも勝るぞと
宗祖大士ののたまひし
身延のみ山の尊しや
雲の姿も鳥の音も
吹く松風の音までも
みな妙法の響きあり。

□

ときは文永十一の
皐月なかばの事なりき
鎌府をあとに上人は
六老僧を始めとして
倶奉の信徒も數多く
身延の山〻わけ入りて
草の庵に棲みたまふ
ときに御歳五十三。

□

仰げば秀峯青巒は
天を劃りて聳え立ち
嵐を聯ねて暉を含くむ
腑して足下を望むれば
庵をめぐる清流は
實相眞如の月浮かべ
無明深重の暗はれて
法性の空に雲もなし。

□

塵滓を脱し玄冥に
身を遁るるの思ひあり
妙法讀誦の御聲は
梢をわたる風と和し
轉法輪の凡音は
河の流れともろともに
久遠に傳へて今もなほ
廣宣流布の利益あり。

□

軒は崩むき柱くち
四壁おちたる庵室は
夜半に燈火なけれ共

棟にさしこむ月光を
便りに御經讀み給ふ
吹き入る風は御經を
繰りて讀涌を扶けける
あゝたふとししや大上人

□

嵐はげしき折り〳〵も
霧立ち登る山嶺に
登りて薪ぎ取り給ひ
草露ふかき寒む空に
深澤に下りて芹をつみ
流れも早き山川の
岩瀨に立ちて菜を濯ぐ
死身弘法ぞたふとしや

□

落葉〳〵の色深かく
月日は流るゝ水の瀨か
弦をはなれし鏑矢か
こゝに六百五十年
今に傳へて西谷の
御草庵とは申しける

あゝ神境か靈境か?!
此處ぞ大士の栖なれ

□

紅ひに咲く裏山に
紅葉踏み分け嚙く鹿の
聲は聞かねど山門の
夜半の嵐に誘われて
月下に立ちし吾れは今
大士のみあと偲びつゝ
拙撰なれども一篇を
草して諸子に見へなん

月の囁き

中林蓮風

塵の子も
今は早や、
尊い嚴かな
眠りの神に護られて、
遠い遠い天國へ
登り行く。

○

白い月
黑い森、
二人で何やら
囁いて居る。
私はソット
軒端に立つて、
それを聞いて見る。

○

喃喃といふ
月の囁きに、
森は謹んで
耳を傾けて居たが、
何時の間にやら
スヤスヤと
眠つてしまつた。

○

月姫は怫として
黑雲に身を包む。
私は急に悲しくなつて、
手に有つて居た
ハーモニカを
ふいて見る。

○

ホノ明い月の光！
ハーモニカの
傷ましき叫び！
私は恍として
白い靜かな宇宙の中へ
茫として消えてしまふ。

身延山偶吟　寂照院日乾上人

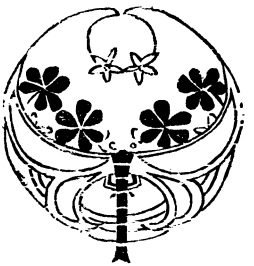
今古不レ更本地顏　唱題穩坐別頭關
何須迹化舊年曆　山默水談人自聞

同　正住院日中上人

本地唱題成二本因一　凡身全是覺皇身
定中自不レ識二余在一　法海圓融往處眞

同　養眞院日住上人

處々猿聲十二時　唱題遺レ世亦忘レ飢
定心穩坐白雲裡　日暮風淸月亦隨



本化的文化生活

岡　鳴　月

感謝、報恩、感德、報德!!何んぞ觀念の美なる、又人生の靈上として將又眞人としての價値、全く此處に存するを知るのである。

今や文化の發展は日進月歩、其の反影としてか思潮の流姿は千態萬狀で、而も其の善的皈趨を知らない、天下の全人迷惑の暗雲に閉覆されて、其の前途の光明を失ひ、前まんに道なく、住らんに處なく、匹夫野人と雖人事の不祥生活の不安を涕泣せざるはない。玆に於いてか憂人概世の仁人は嘆して之れが救援の道を莫不購雖、未だ其の當を得ない耳ならず、反つて赤荒の巷は益々赤變荒化し思潮の混濁は日夜に汚物を混入して、目眩しい文化開明の裏面には、精神的人生の進路愈々錯雜し、宇宙の全人は皆德薄垢重の極に達して居る。惟ふに之れ、外と文化開進の物光に驅られ、內ち神冥佛陀の慈光を失ひ、人情自然の美は陰れて、人事の凡て赤化の泥池に陷れるのでは無かろうか。約言すれば人間相互に感謝感德或は報恩報德の觀念は地に落ち、人間通有の私欲私情に捕らはれて、天理人道の本源を忘れて居るのである。所謂宗教的に之れを謂へば信仰と云ふ美的念慮は皆無と云つてよい位である。

「信道源功德母」と佛陀は說化し孔夫子も五常の中に信を加へてある凡べての人が此の五常の信は、佛が勸むる所の信仰、即ち神佛の前に額いて合掌し、祈願し誓願するものと異り、早く云へば世間的のもの信義信用などと云つて、決して花や線香の薰りのしないものだと考へて居るが、之れは大なる誤解である。佛の示

した信仰とて、世間を離れた信仰で無く、又孔子が云ふ所の信とて、佛道神道の云ふ信仰を離れた信ではない、凡へてものを信するの觀念即ち一信念を名けて宗教的意味を加味して信仰と云つたのである。故に人間の言行動作が、必す一信念に依つて左右されて居る。其處で信道源と云つたのである。彼のグリイクの哲人フィローンの如きも「信より智は來り智より德は來る」と云つて、人事の凡べて信が根本なる事を極言して居るではないか。

然し只信仰の二字を以て、萬事を解決せんとすると或は窮屈かも知れないが、三思九考の後には必ず此の信念、即ち信仰と云ふものに依つて解決されるのである。今其の信仰は、然らば何に依つて起るかと云ふ事を知らなければならぬ。云ふ迄もない、恁ふした美的觀念たる信仰は本より温情幽微の切なる認議觀念より起らなければならない、所謂信仰の出發點、否其の原質は即ち感恩の情である、靜に考慮した時、而して萬有の上に働いた時、此の感恩の情程、人間味のある而も眞善美の三者を圓滿に具備した神秘的なものはあるまい。

其處で古來の聖賢は此の情味の表現なる四德を說き、聖者佛陀は四恩とて一父母、二國王、三衆生、四三寶の四恩を垂訓された、此の四恩の中、一二及四の恩德は人間として適切に觀し、又報謝と云ふ事も可なりに知つて居るらしい、處が社會十中の八九の人が、此の第三一切衆生恩即ち社會的人類相互に蒙つて居る恩寵と云ふものは殆んど知らない樣である。然も方今世界人類として、最も痛切に要求する世界的平和は他の三恩は勿論であるが、此の人類相互の感恩と云ふものが、最も有數の要素をなすものである。例せば物價暴騰に際し、神佛には濟まないが、一儲けして一躍千金の成金の風を吹かしてやらう、と云ふ人間的な所有欲に蔽はれ、自已と云ふものに驅られて、他を省みない是れ即ち尊貴勢に對しては似て非なる感謝の念もあるが同等人類に向ては、更に感恩の念がない、自分のみの存在を認めて自已保存、自已滿足の主我的快樂派の盲者となるのである。其處で他人は此の非を鳴らし邪を結責して、其處に諍鬪不和、喧轟修羅の巷に化するのである。而も人間各自は、此の主我的乃至愛已的の盲者としての同行者である。「人を見たら泥棒と思へ」

の里諺的現實界である、故に不儀非道の名譽を欲し地位を賴み財寶を蓄へて得々としておるのである恁ふして荒凉無味更に感恩などと云ふ高尙幽深の念なく、所謂更に人間味の無い我利々々盲者の集合に依りて築れた人間團體……如何して平和の神が宿るであらふか？

吾々人間は無心の內に、有情非情を向はす宇宙大自然萬物の恩惠を受けて居るのである。況や人間相互に於てをやである、佛陀は先づ此の觀念を助長せしめて、平和の都を創造せんとした。故に信解品には、佛陀自ら此の大自然を以て自我とし、而して天地の廣大を主觀的に一信仰の軌範に依つて、人生各自に此の恩德を示された。所謂「世尊大恩在乃至不能報」の四十余字を以て示された、世尊とは此の實在界である、實際吾人が此の大我から受得する所、又人間相互の恩惠と云ふものは、測量する事は不可能である。故に先此の感恩の念が人間進路の第一歩を爲して居るものである。

其處で日蓮聖者も亦此の範を指示された、宗祖の船守彌三郎許御書を拜すれば判るが、御自分の化導に依り而も記別を與へられた、一信者一行者の彌三郎に對し其の供養法師の衆生恩に感銘せられて、彼等夫妻を以て、我が父母の恩德と同視せられ感謝の意を表示し玉ふた、恁ふした觀念に住した時、自已に對する凡べての物は法性の妙用とて更に呪咀憤怒の情は起るべきでない「渡る世間に鬼はない」と里諺に至つても諒解されるのである。故に日蓮聖人は釋迦に提婆的、逆惡非道の東條左工門景信に對する態度は、「我れ先づ景信を成佛させんと」の大抱擁性を持つて、即ち敵に報するに德を以て仕へ玉ふたのである。

如斯して一信仰の許に感恩の情操を養はれ、一大安心を獲得し玉へる日蓮聖人の身邊には、名譽、地位、財產は勿論自己の存在するも認められなかつた（本より惜無上道故愛身命と云ふ事は云ふ迄も無つた）故に「世間を以て論すれば日蓮は閻浮の第一貧乏人である然れども精神的安定を以て論すれば世界第一に富める者なり」と、大言壯語せられたのである。

此の軌範を去て、吾人の進路もなく目的も無い從つて安住所も無い只一つの感恩の念慮に因て獲る所の結果は恁ふした絕待的人間相互の存在を計り、又一つの信仰に因つては人生最善の極裡に達して大安心を得、

眞の平和を喚起するのである。

天地間最下の動物乃至非情物に到る迄、感恩と云ふ美的行爲がある、況や靈長としての吾人に此の感恩の情無らんやである、此の感恩の情、神佛に對しては慈悲と表れ、人類に對しては信仰と現はるのである此の慈悲と信仰の接觸する所に、萬物の價値と、人間味を計る事が出來るのである。

二三世紀の昔から改革改造の聲は、吾人の耳朶を叩いて居た然かし未だ其の實現を見ない故に此等の文字否叫びは、單なる時代的流言としか思はれなかつた。恁ふして遲々たる社會步調の中にも微少ながらに其の改革改造の花は咲き、方今文化生活とて、やゝ人間味を帶び人生に幾分の滿足を與へるかの樣に思はれる。然し本化的見地から之れを見た時、只現在實行されんとしつゝある文化生活は、人生を容れる外殼のみである。實際其の主人公たる人間の文化的生活は奈邊に存するか、疑はなければならない此處である、大業として否本化的見地の超勝なる所以は上述の如く、一感恩の情に活き、一信仰の念に住して、所謂報恩生活に安住した時始めて、人生として眞の文化的生活を營むものと見做す事が出來るのである。

要するに物質文化の上に精神文化、即ち本化的信仰に活きる所、眞實生活の安定と、眞の平和とを把取するのである。……紙上有限の事故概略を記して本化的文化生活の骨目を揭示した譯である。

私の生命觀

渡邊泰深

人若し、九州の地圖を開かんか、鎭西唯一の大都會、玄海灘怒濤の灣頭に當りて、松綠翠を重ね、白砂渺

たる勝景、千代の松原の中に、蓋然として、天空に聳ゆる、世界の偉聖、日蓮上人の嚴然たる、銅像を見るならん。予昨の晩年、杖を拽いて彼の砂上を徘廻し、追想せし事多時、感甚だ深かりき。

推ふに上人、今を去六百五十幾星霜の昔時、武州玉川の畔り、一夫子の邸に、一縷の法煙に化されしと雖も、尙ほいまだ滅せず、爾來時移り、人渝り幾世幾代、文物爲に進化し、民衆等しく、濁流に混せども人類の奥底に、光澤爛として、滅せざるは何ぞや、肉体の死は、即ち靈の永久の生命たる事、誰か疑はざらんや昨は今日の過去にして、又今は未來の過去たり、生々番々連綿として、不斷の進化を呈する事、豈に人爲と謂ふべけんや、時は物の破壞たると同時に、又來るべき創造建設の基礎たり、吾人の求むる明日は永久に來らざる如く、而して人生五十年は、只行路の一波のみと、云はざるべからず、而して吾人は、過去の產物として、現世を知覺し、未來の觀念は吾人亦宣く、因果律を信じて、過去なる種子を播く處に存す、げにや、過去も吾人の爲に存し、未來は亦吾人あるが爲に開くるを疑はず、而して未だ、三者相須たずんばあらざるなり、何ぞ道は嚴にして、人感ずるに疎なるや、故に因果は宇宙の眞理にして、宇宙亦因果の顯現たり、如何に人爲の尊を極むとも、貧者賤民の底に泣くとも、生死の觀或は生の由來する處に至りては、兆等しく己れの力にもあらず、父母にもあらざれども、父子の因果に適ひ、道德律の上より見て、彼を父母と云ひ、我は子と名けらるゝなり、而して父子の二者、又宜しく擴大して、因果律を造り家族制を布くなり、思い此處に至らば、自已對父母の生命の連鎖は、運命てふ自然の力に、任するを常とす、故に佛敎は此を不可思議となし、我は以つて妙法となす、知るべし月は、盈飾の當相を月の本然とし、花は散開の儘に、妙法を體すと云ふ。

古人死を評して云へる事あり、紅顏よく幾時ぞ黃粱一炊、夢は忽ち野戰の枕に破れ、榮華一瞥魂は空しく黃壚の山に迷ふと、又聖者「ソロモンの榮華の極の時だにも其の粧、花の一箇にも如かざりき」と死以つて然らんか、生も又評するあり「夢なき眠り如くんば死も亦憂あるに足らん、曷ぞ生を煩ふや」ど。

あゝ惜むべし笑ふべし、故に樗牛「人々死を考へよ死を考ふるは、死滅の謂にあらずして生を知るなり」

と。

吾人以て如何となす。

肉體は土より出でて土に歸り、靈は空より出でて、漠として去る、而も靈たるや生を育み、常に進化創造の神として、否佛として軈ては、人生の確付者たるなり。吾人人生に倦める時、或は自然の驚異に、神ありと信ずる時、其の人の生命の中には、神あり佛存在す。

而して此の觀念の延長は、引いては宗教の偉大なる部分として、運動を補佐するなり、所謂る吾人佛を信ずるとは、過去の有限的覺體を信ずるにあらず、又理想の影を追跡するにあらず、換言すれば佛とは全能なる力にして、信ずるは圓滿なる佛の行爲は吾人の近く否吾人の實際に働くにある、此の信仰の爲めに吾人努力の必要あり、修養の根底を有するなりと、云はざるべからず。あゝ白砂綠上の偉聖、日蓮上人の、千古不朽の尊像に對する時、吾人は深く上人の、過去を追想し求心的に總ての果德を、吾人の小なる五尺余寸の、身上に根ざさんことを希ふ。

偶感

小坂田龍教

一、本尊の濫授

私は日頃から我宗殊に勸財上手な坊樣達に依て、その相手の信不信に關らず、寄附金の額により、施物の

夥少により矢當らに本尊が濫授せらるる事を深く感じて居ます、その事がよいか惡いかと云ふ事は今更にて云ふ迄もありません、宗祖日蓮上人が大尼御前に與られた嚴しきお諭へを思ひ合す時、彼等禄財巧者な偉い坊樣達はどんな感じがするでしよう、彼等は絶對歸命の正境たる眞正な本尊を何んと思つて居るのでしよう、施物のお返しか寄附金の領收證位に考へて居るのでしうか敢へて諸師の一考を煩します、先年御大典の奉獻本尊に對しても當時可なり物議を釀もした樣でした、これは授ける者ばかりではなく受ける方でも考へが間違つて居るのであります、どうかして此の狀勢を打開して、本尊をしても少し價値ある眞正な本尊にしたいと思ひます。

一、死せる敎

世の中が開けると共に人々は色々の方面に賢くなりました。殊に人を欺かす事が上手になりました、口先きでか、肩書でか、見てくれでか、色々な方法で人を欺かす事を考へて居る、だから今では何々博士とか學士とかそう云つた肩書がなければ人が相手にせぬ樣になつた、で自然に人々は實力は第二として金力か權力によつて肩書を得樣と競ふ樣になつた、それにつれられて宗敎家殊に布敎家に此傾向を有する人が大分ふへて來た、彼等は演檀の上で講座の上で如何にせば人々を感動せしむるかに吸々として日も足らざる有樣である、其處に何等の信仰と自覺もありません、ですから一時人々を感動させた割合その感化力は甚だ僅少であります、これ彼等が一向敎義の深遠を賴りとし自分の技巧を賴りとして其處に何等の力と云ふものがないからであります、如何に敎義が高遠であつても蓄音器では人々を化する事は出來ません、宗敎は敎理も大事ですがそれよりも布敎家宗敎家そのものの人格が大切であります、偉大なる人格の前には何等の批判力も要しません、これから敎檀上に立つ青年宗敎家の一考を願ひます。

抱かれむか本佛の懷に

二宮龍巖

朝に希望の微笑あり、夕悔恨の涙あり、斯くして吾人々生は暮れ行くか、微笑と悔恨の交會これ僞らざる吾人の現在事實の生活である。

鷄鳴曉を報じ人は褥を蹴つて起き出づる時、誰かその日の活動の希望の微笑を抱き生に對する愛著を思ひ起さゞらんや、さりとて梵鐘の音段々として天地法界に夕を告ぐに時、朝の希望の微笑は泡沫の如く失せて追懷の涙、悔恨の涙と變じ、果は一日の勞苦人間生存の苦痛を感じ憂世なる哉の歎聲を漏さしめ、鐘の音と共に娑婆を脱離して涅槃寂常の慰安を求めて依つて生く。朝の歡喜奮鬪は日蓮を思ひ夕の慰安は親鸞を想ふ。こゝに二聖ありて吾人の如實の生活をして宗教の必要を絶對に感せしむと云にむ乎。

朝の生の希望は日蓮に依つて娑婆即寂光土の理想を說かれ、夕の人間苦痛の懊惱は親鸞は依つて極樂往生欽求淨土の示を吾人に提供されぬ、生の微笑苦の懊惱これが如實なる以上二聖の宗教が吾人人生に對する眞理なることを頌く。

試みよ！

太平洋岸安房の小添に詣づる時、一眸遮るものなき廣濶なる海原怒濤岩を吠み萬波岸邊を洗ふところ、此處に誰か聖日蓮の雄姿を偲はざらんや。

遠く靜かに水平線上に赫灼たる光明を放つ赤帝を拜しては、その雄大絶大崇嚴なる光景にうたれ、我が血

溯の躍るを覺へ感激の涙滂沱として双頰を濡し、雄渾の氣魄溢溢し生に對する希望の微笑を祝せざるを禁せず、宣なる哉聖日蓮の精力絶倫の目醒しき社會改造の叫びはこゝに放なたれる事を。日蓮の生に對する微笑や如何ばかりなりしならん。

『あゝ吾人は生きんこせば日蓮の宗教ならざるべからず』さあれ一歩飜つて京都に遊ばんか、京の町を包む山々のシットリと蒲團着たる愛くるしい姿――、滾々として絶へぬ加茂川の清き流。げに京都は山紫水明の都なりの僞りならざるを覺へぬ、殊に夕闇のヒシ〳〵と迫りて涙ぐましい樣な燈影が、靜かな京の町を照して闇の世界を消して行くとき、傷み易い人の心にはさらでだに一脈の淡い哀愁が起つて來る時、嘗つて得たりし安房の雄渾の氣失せて、誰か敢ない人生を思はざらんや、宣なる哉、聖親鸞の欽求淨土の宗教のよつてもつて人生一面の眞理を穿てるを。

吾人は朝に聖日蓮の教に依つて人生々存の微笑を識得し、夕には聖親鸞に依つて僞らざる人生苦痛の懊惱を味得するを得んとやせんか？

日蓮の宗教やその旭日の如く、親鸞の教やそれ夕日の如し、嗚呼吾人はこゝに至つて苦樂思ひ合しての聖語を透して、日蓮の能除所幽冥の教を聞き、以て悟り涅槃の寂靜に遊び、不斷の本佛の御懷に抱かれて生きむ。

耳を澄して聞け！久遠の惠む梵鐘の響を！

「今此三界是我有吾中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護」

遠藤霙溪

勅諡立正大師號謹賦　次東溟韻

宗徒唯畏帝王言　立正名聲萬古存　安國至誠誰所比　閻浮第一大師尊

恭賦曉山雲頌宮中春

富嶽巍然對曉光　大千今日入新陽　雲如賀客頻來往　乃想宮庭拜聖王

平和の建設

堀内義光

戰爭は悲慘なものである。幾多貴重なる人命とそして國粹とも云ふべき一國の美を飾る歷史的記念物と雖へども、共に殺傷と破壞の運命を免れぬのである。然して之に要する戰費の莫大なる、到底單純なる昔のそれに比すべきでない。隨つて經濟界の動搖より來る生活難は、思想の惡化となり、延いては國家滅亡に至らしめる等、數へ來れば戰爭は實に慘鼻の極である。若し世界に戰爭なるもの無く、國力の向ふ所を以つて、悉く文運に資するを得ば、如何に人生は幸福なる生活を爲す事が出來やうか。此れは獨り宗敎家、哲學者のみの思ふ所にあらず、誰れしも思ふ所にして、然かも實現の困難なる、常に不可能事を以つて稱せられて居つたのである。見よ從來屢々開催せられたる萬國平和會議の座場に於ける、殆んど各國代表者の懐裡を絞りに絞りたるも遂ひに、世界の平和を握るべき名案は吐き出されなかつたのである。今でこそ軍備縮少の如き不誠意なりとの非難を蒙むりつゝも、稍や實行の途に就き居れるも、彼の歐洲戰爭以前の如きは、各國共皆他國の誠意の有無に疑惑を抱き、爲めに何時も抽象論に終つたのである。國際法の如き幾何の權威があらうか。そも〳〵人類に發生するの罪惡を防ぐは法律なる文字が防ぐにあらず、其背後に於ける警察なる威力に依つて初めて効力を生ずるのである。然るに世界各國に於いて各々他國の侵掠と云ふ一種の强盜を威壓し得る程の威力ある警察が何處にあらうか。既に無しとすれば即ち他國の暴は、自から暴で防ぐと云ふ、所謂于才に訴えるの大慘劇は行はるのである。

人生の此の世に在る、うも何にが爲めに生れ、何故に生きて居るのであらうか。戰爭の爲めか、將又平和の爲めか。此の疑問は解決すべくして、未だ解決せられて居らないのである。人は如何なる考へを以つて世を渡りつゝあらうか。人間としての責務なるものを覺醒したであらうか。其覺醒とは平和なる世界、理想の國土を實現するのを云ふのである。此の理想を優勝劣敗の現實に與へんとするには、どうしても世界を統一して此の戰爭を除かなければならない。然らば物質的か精神的か、何れに依つて統一すべきか。ナポレオン一世の企てたる世界統一は志未だ達せざるに先だちて破れ、英雄に不可能なる文字無しと云へる彼れの全勢も全く一時の夢にて哀はれ最後はセントヘレナ孤島の一隅にて「嗚呼余は遂ひに猶太亞の大工の子に及ばざりしか」と歎息せしめ、果敢なき人生を恨みつゝ黃泉の露と消えたのである。近かくは獨帝カイゼルの如きも皆其類である。物質的統一が斯くの如しとせば、此れを精神的統一即ち宗教に求めなければならぬ。信者の數に於いて今や我が佛教に匹敵するの勢力を有する、キリスト教も科學の進歩と共に因果の理に外れたる忘說なりとの斷定を下さるゝに至れば、此れも亦前途は推して知るべしである。然るに我が佛教は如何にと見るに法華經以前の教は佛自から法華の開經たる無量義經に「知レリ諸ノ衆生ノ性欲不同ナルコトヲ性欲不同ナレバ種々ニ說クコト法ニ以テ方便力ヲ四十餘年ニハ未ダ顯ズ眞實ヲ」と云はれて居るから、爾前の經は格外とするも法華經に於いては世界人類を統一救濟するの意を最つとも强く示して居る。譬諭品に「今此ノ三界ハ皆ナ是レ我ガ有ナリ其中ノ衆生ハ悉ク是レ吾カ子ナリ而モ今此ノ處ハ多シ諸ノ患難ニ唯我レ一人ノミ能ク爲ス救護ナ」と一視同仁の眼を以つて我が子なりとして統一し、普邊平等に救世濟民たるの實を擧げんと努められたのである。畏くも明治天皇に於かせられても

四方の海皆はらからと思ふ世に
など波風のたちさわぐらん

と仰せになつて戰爭を御歎き遊ばされたのである。日蓮に依りて紹介せられたる、佛陀の法華經は實に世界統一平和建設の方法を敎へられたるものにして、本宗の最高目的とする所は全く此處に存するのである。西洋の或る學者は人類の道德が漸次に進步し、世界に於ける個人個人が正義と積極的博愛と消極的博愛とそし

て合理的自愛との四條件を實行し行きて、遂ひに全世界の人類が皆悉く此の四條件を實行するに至るならば其時は吾人人類が最大幸福を共樂すべき理想實現の時であると云ひ居るとの事なるが、此れを本宗より見る時、前四條件實行とは即ち妙法蓮華經の五字を以つて全世界を統一したるの時なるべしと確信するのである願はくば平和に生きんとするの人々よ各自が應分の力を盡し以つて妙法蓮華經の五字に統一し、此の理想實現の一日も早からん事を切に希望して止まぬのである。

慈悲に就て

吉川啓善

慈悲に就いてと云ふ表題は、實に大きい廣い意味を成してゐます。けれど、私は此處に柊ては唯だ感感の一端を述ぶるのみであります。凡そ吾等人間は勿論畜類に至るまで、何れも、何等かな慈悲を蒙らないものはありますまい。その慈悲には、或は佛の慈悲、或は祖先の慈悲、或は師の慈悲親の慈悲等種々あります。亦此れは佛教の方面より申しましても、普通一般から云ふても、誠に離されない自然の情であります。

處で佛様の慈悲は如何様でありませふ。既に吾等が知つて居る通り、大聖釋迦牟尼世尊は限りなき、一切衆を憐み給ふて、『三界の衆生は悉く是れ我が子なり』と。仰せ給ひ、佛様は大慈大悲の御意より吾等の親となつて、而も『唯だ我一人のみ能く汝等を救ひ護る』と。申されて、末世末代の衆生を御法の岸に救ひ下されたではありませんか。亦親の慈悲の厚き事は現に吾等が痛切に覺ずる處でありませふ。斯様に森羅萬衆皆自然の慈恩に浴せないものはありません。偖て此等の慈悲を心から謝し、此れに對して何物かを自覺する者が幾許ありませふ。嘸ぞ少い事でせふ。私が丁度京都に在つた時、恩師に導びかれ度び々々宗祖大聖人の苦

學の地且つ聖人の一代に於いての一大感悟の御靈地なる、比叡山横川の東塔定光院に參籠して居りました時種々古來の比叡山の僧徒に關する風說を承玉わりました、その中にも正算法師の母の慈愛物語は今只私の頭に、さながら繪の樣に殘されて居ります、今參考までに述べませふ。正算僧都は比叡山の兩塔院に居られた、若い僧侶でありました。此の人は至つて貧乏な人であつて、寒さ飢えさを忍んで學問をして居られましたが、京都に一人の母親がありましたが、これとても同しく其日々々の煙も立ち兼ねる樣な有樣でありました。頃しも冬の末方四方の山に白々と雪の降り積るを見るにつけても、子を思ふは親の習ひで、我が身の貧乏よりも只、小供の事が片時も忘れられぬ位なものであるが、さて正算僧都は此の寒さに、飢さも忍んで學問をしてゐるであらうか、世に在る親ならは、せめては折節毎の付け屆でもして、人中で肩身をしぼめさせまいに何を云ふても此の貧乏な母親が、そうする手段もなし、近頃は久しく便りもないが、病み煩ひでもせぬかと思へば、心元ならぬに依つて寒さの時分なれば、身體を大切に學問せられよと、細々と文認めて、夫れに白米一升を添へて使の者を賴んで正算僧都の許へ贈られました。案の如く京都に夫程に雪が積る位だから叡山は目の及ぶ限り、一面に白妙。漸く暮方に叡山に着きましたが、窓に燈火の光るかすかに見ゆるを便りに彼の使の男は『私は京都より正算僧都の母御の使に參りました』と。云ふ、聲を聞くなり正算僧都は出て來て其の男に會われると、使は手紙と白米壹袋とを差出しましたれば、正算僧都はこれは珍らしや。京都の母上より來た文であるかと、再三卷き返へし『アヽ勿體なき母上の御慈悲は有難い者である。何はともあれ、其の米を出して炊いてあげよう、ササ寒かつたであろう』と。御飯をたいて其の使の男に食べさせ、自分も箸をとりて心よく食べられたが、どうしたものか、彼の男は御膳に向つて御飯を食べずに、只ホロリホロリと涙を零して居る。正算僧都はハテけしからん、此の御飯はなぜ食べられないかと問はれたら、男が答へて云ふには『さればでござゐます、貴僧は此の白米を唯尋常の米と思召して在らせられる樣ですが、此れは、貴僧の母御が此の間より色々思案なされた、けれども如何んとも仕樣がない、夫れ故、自分の髮を、はさみ切つて賣代なし、その金にて買ひもとめられたる、此白米。女の身は髮飾りとて一筋を千筋なれとかきなでて

金錢よりも、大切に思ふ黒髪を、可愛我子の爲めなれば斯樣になされたのであります。私は母親と云へば同樣、嘸ぞ、此の樣に思ふてくれるであらうに、夫を夫れとも思わずに、母に向つて、知らかに言云ふた事もなく、一日片時の孝行さえ盡した事も無い、夫れを思へば悔しくて、今此の御膳に向ふにつけ、白米は親の肉、此の飯一粒々々が母御の髪筋一筋々々に當ると、思ひますれば、我等が樣な賤しい者でございますが、餘り哀れに思うて涙に胸もふさがり、中々食事も喉へは通りませぬ』と。物語り致しまするとと、正算僧都は一部始終を聞かれ。『さてさて左樣でありましたが、親は思へど、子は思はずと、そう云ふ事とは夢にも知らず居たのは、淺間しき事でありました』と。暫時の間ひれ伏して感涙に咽ばれたと云ふ事でございます。

此の樣に親が子に對する慈愛と云ふものは、實に熱裂なるものであります、けれども、子は此の厚き慈悲を受けつつある事を思はない。茲において日蓮大上人も斯くの如くであります。吾吾末法一切衆生の爲めに去る六百七十有餘年のその昔悲雨慘風の六十年の御生涯を、師子奮鬪せられたではありませんか。噫！。吾等聖人の門下よ、何んぞ、永き夢中より目覺めて佛の慈悲に報せずに居られませふ。

題聖誕七百年記念塔　塔老父之建立而從來有鏡石之稱　　遠藤霞溪

聖誕今茲七百年　幸逢嘉會喜奇緣　延山鏡石人知否　讃詠玄題永刼傳

思郷

僻性宜應住僻村　枉交塵累豈堪煩　常懷高祖棲神地　況我師親老尙存

慈上謝恩

驅烏往歲侍貞松　今日阿蒙上鷲峰　法乳恩深猶未報　頤顏只喜接慈容

友の靈に手向くべき詩と文

江原白線

空蟬の中に吾は生きじ
自然の影にぞ吾は宿る
聲なきみ空に月し見れば
曇らぬ鏡に吾たまうつる

と、君よ思へ!! 此れは君が其生前かつて人靜けき畔りで、口吟んだ愛人バイロンの詩だ。

秋の今宵更けてゝとも深い、往しの人の歌つた樣に『三五夜中新月色、三千里外故人心』の心も徐ろに偲ばれる。嗟呼詩人をして泣かしむる秋の哀れは、亦亡き友を追想するに足る多くの時間を持つてゐる。斯ふした愁ひに讀まれる自然の調べと、偲ばねばならぬ亡き友を持つた僕の今の痛ましさとは、氣に僕をして眞調に泣かしむるに價する長恨の響と變つて行く樣に思ふ。騷音に絶へた此の靜寂な環境!! 纏綿として碎けて行く心の緒!! 君ならでは僕ならでは分たぬ思の數々!! 泌々と浸つて來る君の生前の面影!! あゝ何の奇しぞ、君の病中せめても其の快癒を祈つた僕の心の殊勝さも、今となりては薄く消へた君の運命の裏にそも何の私語を續けてゐるかしら!! 君の死を見て無理に涙の種を增したくない、けれども僕には哲人の見た樣に『夢なき眠りの如くんば死は生の夫れよりも安らけし』と斯ふ冷靜になることの出來ない人間美の誇りは、更らに深淵に刻み入つて一層强く此の感を求めたいと思つてゐる此の友の心を諒としたまへ。古人謂へることあり、『亡くてぞ物は戀しかるべき』と、嗟呼。

知らず僕は涙を抑へて
氣に浮雲の生命なれ
あゝ西山の夕日かや
廣き自然に永らへて
名こそ殘さぬ誰人も
花をまたなん果敢なさよ
千草にまろぶ春の野や
月の眺めの秋の宵
集ふ睦みの享樂に
誰か浮世とは云ひそめし
兎烏匆々の人の世に
生死愛別の理りの
織りなせし神の恨みなる

思ふ自然に生死なく
競ふ文化に有待なしと
語る佛者の心哉
開示悟入の金讖に
覺むへきが眞の道なるか。

と次から次へと綴つて來るうちに、僕の死に對する想いは其の深みの度を增して來る。佛陀は且つて『最高尊貴の果報者は誰!!』と大きな謎を垂れて、六合の悲哀を吹き渡す双林の下に示寂されたことを記憶する。ヒマラヤの麓ガンガー河畔の流れに沿ふた一寒村に花の女の死に面して生前最も彼を愛した、一青年は彼女の葬りの席で『孃は死すと云ふとも生前の吾の戀は變らじ死後たりとも吾の戀は生前の夫に三倍す』と誓ひしとか。あゝ永久は尊い、そして亦永遠を誓ふ切情を見て其の死の刹那の感慨の程も察するに餘りがある。父はなく母は亦渚さの捨小舟の寥しさを知る小さい孤兒が只人の緣しを求めて、心も身も全部を人の憐情に待つことによつて、滿足する樣に、人間が其の理想や希求を果てもなき永遠へ投げることによつて、安んずる樣に、人間本姿の投影こそ眞の生命の使命であり得る。と斯ふ理會して來た時に僕は、未だかつて廢せざるの生命の永久に參ずることが出來やう。更らに亡き友への靈の手向けば、只日々夜の友の心の湧く時に甦る。君自身の肉の破綻は、夫の如くは有機的には永へに還らないし、靈の呼吸は刹那に君を知れる多くの人の靈台に宿つて生命を續ける。そして大きな伸轉の手を延ばして窮りなく流れて行く!!あゝ呼吸して行く。友の追憶が永久ならば、矢張り君の靈は永久だ。若し祈りの中に僕が籠の鳥であるならば、君は青く澄み切つた天空に自由に移ることを妨けられない、翼を擴げて行く、鳥かも知れぬ。そして時折永遠の多くの魂は、其まばたきを初めて、岐路に迷ふ幾多な小さい人間に光りとなつて甦つてくれる。斯ふ思ふと生は死を友にし死は亦更らに生を呼ぶべき、不可分の關係に存することを思ふ。オー懷かしい死の友よ!!永遠に至る、來るべき力の基調よ!!其によつて人はより偉い薫化を與へられる。死者の魂の薫りが無制限に止まらないならば人生すべての動力は不斷に廻つてゐる。死を考ふるは全く人生の前面を明瞭に導く唯一の方規だ、ノルムだ。力だ、愛だ、此に情感し、意志し、躍動するところに、人生奥底の惱寂は

拂はれる。オー美はしき死の靈よ!! 山海幾百里を離れた西南の暖國、其處は君の里であり、生前君を知れる多くの人は集つてゐるそして君の墳墓を見守つてゐてくれるのだ。斯ふした人々によつて手向けらるゝ新らしい香花は、そは君の靈の永遠をつなぐ、何よりの贈り物でなくて何であらう。終りに君の靈を祈りて又歐はん。

白砂青松の玖島潟は
親しき君の靈を抱き
千枝に榮へ行く綠り葉は
亡き君の名をぞ傳ふらめ
幸と榮へに眠る君か
手向けに薫る君のおくつきか
思へ自然のめぐみぞ
泣けよ永生の理りよ
落ちて朽ち行く秋の葉に
緣したづぬる由よりも
君を思ひ君の靈祈る
身のなさけにやいと深しは
人の心の殊勝かや

棲神閣に詣で

照月

聖誕茲に七百年
善惡諸人共どもに
靈に生きるの紀念ぞよ
津々浦々の道の友
功積み德を累ねんと
吾も人もと誘ひつゝ
靈跡めぐりて參拜し
身延の山にいそぎ行く
いたむ足身も厭はせで
勇氣はげます尊さよ
祖師の弘宣は末法に
久遠の慈悲と流れ來て
闇路を照すその効は
至らぬ所無かりける
毒氣になやめる人々は
闇に闇にと迷ひ入り
出づることなきあはれさよ
十界皆成の法華經は

順逆無別の理ぞ
來れ人々法華經に
吾は佛に護られて
行きてそれらを救ふべし
七字の光明いやまさる

理智の母

太田赤童

美と榮光にときめく自然に
瀾熳と花が咲いた
小鳥が來て甘い美しい夢を見た
人々は喜びに滿ちて躍つて居るうちに
かすかな音をたてゝ
地上に花は散つた
小鳥は歌舞の醉から醒めたのに
人々は笑ひ續けた
藝術家は獨り泣いた。

生育と躍動にひらめく自然に
爛々たる灼熱に生あるものゝ凡てが
力一ぱいに生きてゐる
草も木も水も山も蟲も鳥も
人々は宵の色彩と燈火に親んだ
蒼穹に輝く星と月との神秘を
人々はだまつて見てゐた
哲學者は獨り考へた。

透徹と靜寂にしづみゆく自然に
玲瓏の感じ深まりゆくとき
凋落と孤獨が地上に來た、
人々は落膽と失望とに
輕い溜め息をついた
苦痛の叫びも絶えて凡てが死に歸つた、
宗教家はだまつて見てゐた。

荒莫と廢殘にさすらう自然に
萬有はしづかに眠つてる
創造と試みにつかれたやうに
――煩悶――燋燥――
人々は自滅の投影をみつめて
暗黑と恐怖とを呪ふた

道學者は知らん顔をしてゐた。（一一、九、二六）

哺乳類のいろ〳〵

平地光蘭

ぐる〳〵廻る地球上に
ウヨ〳〵動く動物の
その數の半は哺乳類。
數へ上げればヒヒゴリラ
猩々等は人に似て
類人猿と稱へられ
キャッキャと叫ぶ猿類と
一所に合せて靈長類。
聞くのも恐きライオンや
虎狼や灼ひぐま
北海產の白熊や
うらの可愛い〻小猫まで
他の獸類を食ふ故に
食肉類の名を得たり。
晝間は屋根の蔭に居て
黃昏時に飛び廻る
うすゞみ色のこうもりや
小笠原產の大かうもりは
前肢長じて翼の樣
故に翼肢類と云ふ。
田地や畠を据りまわし
小虫類を捕え食ふ
眼は大方用なさず
お日樣は禁物の
おかしなモグラは食虫類
まだ妙なのは契齒類
此の類すべて憶病者
齒がズン〳〵とのぶ故に
大事な膳碗タンスまで
かぢつて廻る惡ネズミ
リスやウサギやモルモット
此等はすべて此の種なり。
アフリカ、亞細亞の產物で
大きなクセに忠實で
人の手傳ひ小守まで
細目でセッセとする象は
鼻が名物長鼻類。

最も人の役に立つ
牛馬等を初とし
水牛、トナカイ、鹿や犀
氣の荒々しい河馬等も
みんな合せて有蹄類。
南洋の中の大洲で
オーストラリヤの産物で
カンガルーや袋獵
お腹の袋に子を入れて
ネン〳〵コロリと守をする
面白おかしい有袋類。
陸は小さくてすみ切れず
海の潮に乘つかつて
魚の類を捕へ食ふ
鯨は魚偏書くけれど
此も立派な哺乳類
此の他ラッコ、オットセイ
四肢は變じて尾ヒレの様
水に棲む故遊水類
鳥か獸かわからない
こうもりよりもまだ妙な

單孔類は熱帶産
體は獸の様なれど
口には齒がなくそのかわり
黄色い口ばしもつてゐる
足はかもめの足の様
チャンと水かき付いてゐて
泳ぎ廻つて魚を捕る
オーストラリヤのカモノハシ
アリクイ等の此の種類
尿道糞道一孔なり
又此の類には齒が無く
貪齒類とも稱せらる。
すべて哺乳類の條件は
温血、胎生、背骨あり
皆子は乳にて養育す。
寒熱温の三帶に
亘りて棲める哺乳類
その數上げれば幾千萬
嗚呼地球は大きいなあ。

陸奥に咲ける百合花

佐藤海澄

「如日月光明能除諸幽明」

現代教育者の甚浮薄に流れ行く今日、一婦人の身を以つて雄々しく職に殉じたる小野訓導について書きたいと思ふ。

大正十一年七月七日こそ實に怨の多き此の悲劇を生んだ日である、此の日宮城縣宮尋常高等小學校尋常四年生受持訓導小野さつき女史に引きつれられたる六拾四名は、小學校より約七八町距でたる白石川河畔中河原にとこそ野外寫生に出かけた、其日や天氣清朗川を後に前を見ると濃綠の林稍はなれて山あり更に遠く距つて、はるかに連峯が聳て居るので遠中近の描寫六法を授けるつもりであつた、思ひ〳〵に筆を運して居た生徒は當日の熱にたえかねて先生水を浴びさせて下さいとせがむので、始めは今は學科の時間であるからと說き聞かせて、熱心に寫生を續けてゐた。

何しろ水泳などの一番すきな年頃の四年生であるから、女史の見守の目を盜み早や二三人の兒は水煙を立てつゝ嬉々として水泳をやつて居る中に、何うしたはずみか三人の生徒は深き所にをちいり助けを乞ふ聲女史の耳目を驚かした。

突然起つた悲しき救命の聲、始めて成澤志村大塲の三生徒が水に溺れんとして居るのを見たので、ちつとの

隙もなかつた女史は、袴たびをつけたまゝ飛び込んで、志村大塲の二名を救ひ三人目の成澤を救はんずるせつな、早や成澤の姿は水に沒して了たので更に、水に濡れて活動の自由をしばる袴を除くすきもなく、成澤を尋ね居りしが苦しさの餘りに縋つく成澤のために、全く身體の自由を失ひ遂に力も盡きはてゝ成澤とゝもに、水底深く沈みはてゝ終つたのであつた。

之を目擊して居りたる兒童は、施す術も知らず只聲を揚げ泣くばかりであつたが、此の慘劇を見て先生が死んだ……、と狂氣の如く部落をかけまわる三四名は、學校に駈け込んで「先生と成澤さんと川に沈んだから早く來て下さい」と息きれ〴〵に報らせた。

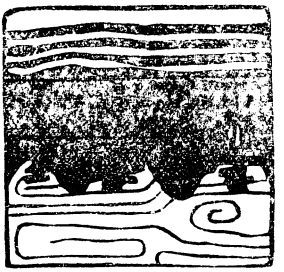
此れを聞いた訓導達及び村の人達は、宙を飛んで白石河原に先生及び生徒を引上げ色々と蘇生に手をつくしたが、二人の魂魄は天に歸したか遂に蘇生するに至らなかつた、二人の父母及び村人は二人の屍體を取りまきながら悲嘆の涙にくるゝばかりであつた。

一時四十分！それは小野女史が職に殉した時刻である、水にぬれたる小野訓導の特計の針は實に一時四十分を指して停つてゐた。

刈田嶽の夕雲につゝまれて暗く、遠く近くの麥やきの煙も訓導の魂を弔かと思れいとどかなしき間に、女史及び兒童の屍は學校へと運れた。

悲しき一夜明けて、九日午前三時教育者の龜鑑さつき女史の遺骸は茶毘一片の煙と化し終つた。

叫鳴小野訓導の魂は永久に生きなんか。



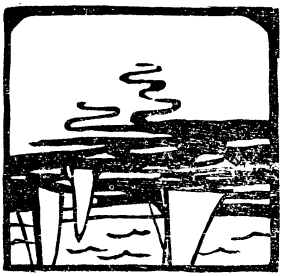
自然と人生

富田海音

照りもせず降りもせずむし暑い日に、山路を辿つて上の山へ登つた途中、汗を拭きながら考へた事がある。

勝れない天氣に自分の考へまでも何んとも云へない陰鬱な思ひに覆はれて來た、登るも進まず下るも欲せず氣儘に考へを足に任せて近々と登つた其の考へは、自然と人生の事を思はせた、今は秋の彼岸で定まらぬ天候である、むし暑い陰鬱な氣は天地に充ちて居る、これが即ち眞理である自然である、此の自然の徵候は吾人に勝ち得ない、然し人生は此の自然の周圍に依つて替る又人情も時處に變換される、これが又人生の持ち前であると博く考へた時、心も少し勇んで來た思はず上の見晴しまで來て心が自分に反つた時、眼下に富士川の白蛇の横たわる樣な景を眺めた、四方の山々に綠翠に仲秋の黃褐の色を交へて居る中にも、黃色な稻田が遙かに散在して見える、富士川の上り舟は秋風に航をかけて銀河の中を登るのである。此の見晴しのよいのと忽ち木葉を縫てて來た冷風とは自然の鬱氣を醫した、呼嗚これも自然の賜物である、眞理に據つて支配された人生の愉快も苦痛も自然に依つて又醫される、そこで人生が自然の何物にか接して種々興味が感ぜらる夏目漱石氏が自然と人生とについて自然の景色に依つて醫し住みにくい世から住みにくい煩を引きぬいて、有難い世界を親りに寫すのが詩である畫である或は音調彫刻である、別に寫さないでもたゞ親りに見ればそこに詩も生き歌もわく、着想を紙に落さずとも鏗鏘の音は胸の裏に起り、丹靑を畫架に向つて塗抹せずとも五彩の絢爛は自ら眼に映る、たゞ自己の住む世を斯く觀じて、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を淸く麗

しく收め得れば足りる、と云つた。自然は凡て然りである、苦あれば樂あり幸福もあれば又災難もある、此の轉變すを眞理に依つて、善く感ずるも惡く感ずるも、愉快に思ふも鬱氣に悶えるも皆、人生間に於ける意識の働きである。佛敎で煩惱即菩提と云ふと同じである、吾人は此の自然の理法を巧みに摘んで、又用ひて思慮をよく快せねばならぬ、自然の詩である畫である音樂と聞ゆる鳥の音も、其の趣味は其意義に去られて仕舞ふ、此の妙なる自然を考へた時、自分は前とは一轉して自然の事物に味方され喜んで送られる樣な思ひ非常に愉快に感じつゝ上の山まで着した、仙人の樣な思ひで頂上から瞰した時四方を眺望する事物は悉く俗界を離れて壺快に見えた、登り乍ら考へた煩惱は皆去つて、新しい淸淨界に出入する思ひがして別乾坤に住する、これが自然と人生の支配であると深く感じつゝ書籍を机上に置いた。



反省と努力

廣瀨潮憲

自已の現在狀態に安んじ攷々として其の業にいそしむるものは、通達の人にあらずんば凡愚の徒である、通常水平線上にあるものは何人も、自已の現在狀態に安んぜず「これではならぬ」の感に打たれざるものはない、此の「これではならぬ」の感は直ちに、向上門を開くの鍵となり、自已革新の第一歩となるものである、現在に安んずるものに向上なく「これでよい」とするものに發展はない。世の中は進みつゝある、我は

果たして之に伴ふの準備をなしつゝあるか、日夜營々唯だ學問の爲めに追はれ身は過去の責に償ひ、現在の務めを盡くするに念にして、何等將來に對する準備もなく後より來たるものに續々追ひ越され、獨り人世の落伍者となつて甘んじ得るか、「これではならぬ」「どうかせねばならぬ」と感得したるものは、自已の現在の境遇より進み出すの微光を認めたもので、この微光を辿りてこそ吾々は向上の大道に進む事が出來るのである、此の思想なき者は全く黑闇裏に沒在して、何等發展の素地をも修ふ能はざるものである。

人類の進歩は「これではならぬ」に萠し社會の發展は「どうかせねばならぬ」に基き、吾等の向上も「これではならぬ」「どうかせねばならぬ」を外にして得らるべきものではない、「これではならぬ」と現在の缺陷を看破し「どうかせねばならぬ」と理想の實現を欲求し、「これではならぬ」が故に反省し「どうかせねばならぬ」と努力奮發し、此反省によつて缺陷塡補の策は立ち努力によつて理想實現の計はなるものである。

夏の宵

本村弘

机に向つたが蚊の攻撃が激しいのでとても家には居られない、團扇片手に前に散歩に出ると鏡の様に透き徹つた空には、何時しか盆の様な月は、雜木林上に登つて無數の星は金砂子を散したやうに、瞬く如く煌いてゐる。

翠綠滴る木の葉は其の光に映發して銀色になつて晝かと欺かれる様である……、邊は寂寞として山門の大鼓の音のみ手に取る様に聞える、谷底の庵の煙は靜かにのぼり鬱蒼としてゐる、森の中に或は高く或は低く

建てる裏門●我等の學院●教頭寮等を背景に、躍るが如き松の潔く夜景を飾りたる有樣はまるで油繪の樣である。

淡墨もて描いた樣なる遠山の彼方に、幽に見えたる白雲は長く〳〵長蛇の如くなつては、蜿蜒迂曲して次第〳〵に山を取卷き谷を埋め、見る間に雲海を生じ覺林坊の燈も灰色につゝまれた。

池の鯉は逃げ去り星墜ちて水面絣の如く堂前の燈籠は、折しも一しきりの風に嬉しさうに搖れて動く……。

秋の歡喜

高橋是明

故人は秋を悲しいものゝ樣に謂つて來ました。が、自分は最も秋を喜ぶのです。月の光、虫の音、秋の寂しさの中に溫味を包んでゐます。哀れなるが中に樂しさが含れてゐます。決して悲觀すべきものではないと思ひ、且信じて居るのです。蕭條とか、寂寞とか好んで陰氣な文字を使つて、秋を寂しい樣に謂ひ、悲しいものゝ樣に嘆ずるのは陳腐です。又月並です。

天は高く氣は澄む、今迄の暑さに蕩けた身體も、金風一度肌膚を吹くと、肉が緊つて來ます。骨が硬くなつて來ます。そして、其處に新らしい血が潮のやうに湧いて來るのです。青春の氣が身體中に充ち溢れて、泰山崩れよ、北海荒れよ、物の數かは、我に戰ふべき準備と力と、武器とがある、いざ、一番と腕を叩いて躍り出したくなります。

秋の自然程自分を樂しませるものは、ありません。山の姿や、端麗、水之流れや、清澄、野には可憐の小

草が錦の褥を織り、虫聲唧々秋の歌を謠つてゐるのです。造化は自分等を樂まさせるべく、こゝに秋と云ふ清涼の好季を與へ、たまはつたのではありませんか。それに對して徒らに悲しむのは、禮を盡したものといへませう。

憂ある人よ、悲しむの人よ、將に又歎き煩ふの人よ、心を平かにして清涼の天と、靜寂の野に、嘯けそして無邊大なる、天地と、同化せよ其處に卿は慰を得るのであらう、同情を與へられるであらう。斬うして卿の憂ひ、卿の悲しみ、卿の歎のき煩ひは、拭はれ散ぜらるゝに相違無い。そして秋の樂しさを、しみ〴〵と思ひ感じ、味はされるに相違無いと思ひます。

我々一同は此の時節に臨みて學びの海にと漕出でゝ亦も再び漕行くのであります。

魂の叫び

中林良陽

童等小流より鮒を捕へ來りて將に炮らむとするに、彼れ尙泡を吹いて依然たり。ああ、鮒や鮒や、汝うつせみの世に生れながら、世を憂きものとも觀じやらで、ひと瞬の間も猶生を貪らむとはするか。さても幸の極なるよ。

げに世は果敢なきものなりき。釋迦や彼れ、無上正覺を成じて法身の常住を叫ぶと雖も、沙羅双樹の花の色は、遂に遷りにしを奈何。奈翁や彼れ、盛名を史典を殘すとも、セント●ヘレナの白露は、遂に消え失せぬるを奈何。おゝ果敢なの人の世や、斯くて我れ何處より來り、何處へ去らむとはするぞ。

我れ嘗て富士の高嶺に登りき。登りて大いなる自然に接したりき。嗚呼、山や空や永しへに依然として變

らざるものを、人のみなどで斯くは生死の巷に流轉せざるべからざるか。憶へば傷ましきの極なる哉。

されど見ずや、朝に、輝き渡る旭日に向ひて、啞啞と飛び行く烏の群を。夕に、月を宿せる白露を擔へる萩姫を。汝何が故に爾く世を果敢なむぞ、善く食ひ善く飲む、これ人生の事實に非ずやと。——斯くて我が魂は慰められ、默して止みにき。

歩むべき道

四寛　涙草

人生それは悲慘な人間苦の事實である。

苦しみの過去の人間生活から未來への苦しみの人間生活へと進む旅程ではあるまいか、生きようと願ふ……それには悲慘な人類相鬪の苦しみの劇が畫出されずにはをかれない。弱肉强食の事實が畫かれてゐるのは人間ばかりではない、野に咲く名も知らない可憐な草花にも、空飛ぶ鳥にも生を欲しながらも悲愴な生に對する事實を認めずには置かれない、まして人生には必然の事である。

生きることを欲しつゝもズル〳〵と時の力に引きつられて、暗黑へと導かれ行くはかない運命の持主が人生ではあるまいか、生きることを願ひつゝもローソクの火のいつの間にか燃え盡して消え行くごとく、……しかし風に搖がれつゝも消えまいともがさながら燃え續ける、そして彼自身の身を燃やし乍ら餘燼かすかになる微光までも消えまいともがき終には暗黑の世界を造る、丁度人生もローソクの火のやうに終にば消え失せ

て終はなくてはならないのに、生に對する愛着がなぜに斯くも一切對一切爭鬪の相を現出しながら生に執着しつゝあるのか、たれしも誘はれなくてはならない死の魔暗黯の深淵如何にせばとて斷滅の運命の不可抗力に支配されるのだ、だからと云ふて一部の人々のやうに享樂主義刹邦主義に本能の衝動に任かせて生きて行くのが本當だらうか、生きて行く以上自身を生かすことが大切だ自分さへ生きれば人なんか少しもかまふことがない强く行け……多殺一生して直進すべきであると云ふ已愛主義が社會進化の眞理であらうか、否それはあまりに怖ろしい惡魔の生き方である、人生の旅程は靈魂に求めて行く純なものでなくてはならない。

たれしも觀られない死の所有者である以上死の運命は否定し得られない事實である、過去の悔恨現在の努力未來の希望其の理論を語るよりも、現在の生の事實に刹那々々の生に如何に淸く美はしく輝かしく生くべきであるか、充實した靈魂の抱持者そのものではあるまいか、眞暗であつた過去と光明であるべき未來は現在といふ苦惱の經驗世界の連續に外ならぬものとすれば、三世貫通の人生はあまりに悲慘である何處にか歡喜の涙に滿でる淨化の樂園があるべきである。

暗黑と爭鬪から去つて無爲の濁衣を脫して眞實の生命の奧堂に達した人こそ聖者である、人類の美しい犧性者開拓者となつて煩惱の世界を一掃した聖者の道こそ我々の生く可き道である、人間の本然の姿は光りの體でなくてはならない光明に接する時に照されるのではなくて、光明それ自身でなくてはならない、と聖日蓮は敎へてくれた。「日蓮は泣かねども涙ひまなし」……「一切衆生の異の苦を受くるは日蓮一人の苦なり」……

斯ふした溫い聖者の慈悲に浴しつゝある私はどうかして光りの體になり得ない、此の感激の涙もて自身に深く努力するのが歩むべき道であると思ふ。

聖訓

正像二千年の大王よりも、後世を思はん人々は、末法の今の民にてこそあるべけれ。（撰時鈔）

國は法に依つて昌へ法は人に因つて而して貴し。（立正安國論）

寺院と酒に就いて

秋永露翠

惟ふに佛陀三千年の昔既に五戒中不飲酒の一戒を設く、是を以て見れば酒なるものが國の如何、洋の東西を問はず、其の需要の歴史如何に古きかを知るべし。又禁酒論なる一の叫が事新らしき叫に非らざるを知ると共に、其の及ぼす害毒の如何に大に、又如何に古くより認められ居りしかを知るに余あるべし、古來酒禁なるものが其の需要の多端なる何れの國にも一樣なり、百花爛熳として風暖き春、瓢を携へて落花に戯むるゝも可し、炎天燒くが如き晝間の勞を、夕陽沒し風、風鈴を鳴らすの時一コン傾くるも亦可し、林間の酒を暖めて紅葉を燒く又可なり、白雪皚々身瀟然たるの時アッカン一本、そが勢に乘じて雪中尙寒さを覺えざる亦可なるべし、實に百藥の長、亦喜努愛樂を悅び迎ふるものは酒なり、吾人酒の如何なる味を要するを知らず、唯想像に訴ふるのみ。已上は愛酒家の立場に酒を思考せるもの、好酒家尙已上の價値を論ずるならんも吾人は寧ろ其價値を否定せんとするものなる、見よ！世の愛酒家を、彼等の多くは否彼等の全部は所謂酒、人を飲むの類、醉眼懞懂として横行活步し、三尺の童兒尙よくせざる、訥言をして得々たる恰も精神病者の類、甚數に至つては道路に臥して公衆に迷惑を及ぼす稀ならざるべし、社會に及ぼす其の罪惡や知るべし、殊に是が婦人にありとせば、將又染衣の人に於てありとせば、實に言語道斷なり、而して彼等の多くは紳士として或は現代の紳士は是を當然とするものはあるにせよ、吾人は彼が斯くも酒をあふるは果して何處ぞ！夫婦と酒打ち飲むと云ふ如きに非らずして火燭晝をあざむき美女待べるの處に求むるや、そが及ぼす影響や如何？自宅には淋しく獨寢の夢必らず夫の身に辿るならん、或者は病臥に呻吟せる親をすら忘れて酒色に迷

ふ者あり、小兒は飢餓に泣き妻は料店の書札を見て膽を潰す人少なしとせず、噫！社會の裏面殆んど然り、若し僧侶に見んか、自己の本分を忘却し、そが責任の幾分を俗服にのがれてすら酒店に出入するに至つては心地憐むべきものか、其の結果寺門の經營はおろか、寺有物件を賣却す或は一方に費やす故に、一方求むるの策を講ずるに急、只目にあるものは金と酒、然も附隨物たる女のみ汲々として求財に奔走し、金の前には匹夫にも尙よく敬禮するの狀、志あるもの丶憤慨激努其の頂に達する處僧侶に酒の害毒なるを知るべきなり尙寺院は殊に酒に緣多も、鎭守の祭禮或は其の他種々の場合酒を用ゆる彼等の多く酒僻として過度にすぎ易し、從つて自己の地位並に周圍の事件を察するもの稀にして傍若無人の振舞に出るを常とす、神靈たるべき寺院も如斯んば果して如何!! 察するに餘あり。

山寺　東溟

桂花香盡古龕幽　向晚前林宿鳥投
一片白雲寒墮影　磬聲夕作一山秋

同

石室鈔經思入微　一燈隔竹動涼霏
滔々徹耳惟流水　月落西巖僧未歸

同

石壇香冷桂花幽　潭影虛涵萬象秋
嵐翠撲眉霏作雨　打鐘僧下夕陽樓

山寺

石磬聲幽隔竹聞　桂花如霰落紛々
夕陽潭水孤僧影　獨倚寒巖飽看雲

同

諸天只隔白雲層　月落寒潭夜色凝
與佛同分龕半壁　萬梅花擁一詩僧

同

掃石焚香古佛前　三更皓月四禪天
乾坤一白梅花雪　疑是毫光照大千

か細き秋雨

鍋屋寛明

細い絹糸のそれの様な雨が、朝から小止みなく降つてゐます。
庭の枯木はしつとりとぬれて、そよとのゆるぎも見せません。
軒をくゝつた瞬間!!
降りかゝつてゐた雨は、私の周圍から離れました。
そうして戸影に立つてぼんやりと。
來りし方を今更に見入れば、地の面にはそのハネが白く波をぬつて、千馬を一面に飛ばしたやうに薄白く光つてゐます。
室の外からしめやかな雨滴の音が、悲しく私の心を唆るやうにコトコトと間遠に聞えて來ます。
獨り胸をかいこめば。
泌々と物想ひにふさわしい今日です。
連想の長い繰糸は悲しい事をのみ求めて!!
それが過去へ過去へと曳かれて行きます。
噫呼逝けるその日の
幼けなかつたなつかしみ

それは淡いものでした。
然しそれが今更のやうに深い深い悲しみの思出となつて、このブレストに泌められてゐるので有ります。
私が小僧になる前の事でした、五年も六年も、
小さな可憐な妹は遠い松林のたんとあるお寺様へと連れて行かれて仕舞つたのです。
美しく白布に包まれた小さい柩が、人々に抱かれて嚴かに家を出て行く時、私は聲を出すのがそら恐ろしく只しくしくと泣きました。
私しには妹を連れて行く、それらの人々が恨めしい程憎らしいと思はれてなりませんでした。
列が靜かに靜かにほの白く光る路を過ぎて行つた後には、二三人の人より殘つて居ませんでした。
母の石蠟のやうに青白く變つたいた〳〵しい顏!!
永遠の神秘を示すが如きその瞳は、黑水晶に生命をあたへた如く聖く寂びしき色を漂はして、
花びらもて綴つた様な唇、青白いまで純白な頰こそまあその顏は何と言ふ、しかも言ひしれぬ神秘を含む面影であつたでしやう、
赤い唇も蕾のまゝ稍の霜に凍つたやうに閉ぢられて動きも見せず、

それがそのまゝミイラになつて行くやうにも見えました。父の双の瞳、それもやつぱり露に結ばれてゐました。

柩の列がしめやかに
　雨を縫ふて
黒き沈默の人々は私しの家を
　幻の如く出でて行く

それは丁度今日のやうな日でした。
列が一廻して見えなくなつた後は、強い〳〵雨となりました、その時私は母の膝に凭たれて、雨の音に耳を借しながら佛前の灯に瞳を輝かしてゐました。
然し何故かおのゝいてゐました。
ほんとに私は佛壇の灯が淋しくそら怖わかつたのです。
それでも母が灯をつけ替えて鐘をカーンと一つ鳴らす時は、そのいつまでも〳〵ひゞいてゐる音律に耳を澄すのでした。
するとそれが遠い妹の所へまで聞へて返事が來るやうな感じがしました。
だからいまか〳〵と待つてゐました。
それは毎日〳〵鐘をならす度毎、
その時の後姿がウットリと夢のやうに浮かんで來ました。私しはその時はまだ死と言ふものがよく解してゐなかつたのです。
そりや初めてゞ有つたからです。
このあどけない私を母は見てどんなにか泣いた事でしやう。
あゝ物語りのヒロインは今宵いづこの空に!!
雨は又一頻り強く降り出して來ました。
こと〳〵と間早やに打つ雨垂の高いひゞきが私しのしづかな幻想を破つて。
新にこみ上げしかなしみは熱い涙を誘つて止度なくそうして白紙に型を落しました。
それが二つ三つしみぬきのやうに廣くちりました。
見はてぬ夢を追ふごと恍惚と涙さしぐみし瞳をはるか、山亦山を見渡した時餘波をたゝへた鐘の音が夕靄の奥からゴーンと響きわたるのでした。

寂寥

秦　觀　行

安息の胸に手をおき

大地はまさに眠らんとす
あゝ空のはてに
夕燒はなづみつつ
永遠のたましゐぞよりそひ
默せる鳥、二羽

コバルトは優しくなげきぬ。

○

夕暮の雲は眞赤に
釣する子等は夕燒を唄ひ
山寺の鐘は遠く〳〵響き渡り
案山子は默し
鳴子は風幽に渡り
鳥は一聲鳴きて飛去る

○

「寂寥」はまた來りぬ
しづかなる
夕暮をしたひて
寂寥はまた秋に來たりぬ
あゝ鳥の瞳にも
我が蒼ざめし顏のうつるや。

○

行きくれし
曠野の果の野の果の
靑い星にてらされて
枯枝になく旅がらす

郊外の夕

秋永露翠

汽笛が鳴る
ものすごい鐵のドアが開かれる、
どよめきの聲
蠢動の響
勞動につかれた一群がはき出されてゆく、
けたゝましい音と共に
あざけるやうに
オートモービルが走る、
そのガソリンの臭氣の中から
繩ノレンの燈火が
力なげに黃い人ごみを照して居る。

魂の行へ（民謠）

太田赤童

山の夜の靜けさ
牙え切つた數知れぬ星
巨獸の眠てるやうなだんまりの嶺
永久の存在は、
自然？
人生？
神祕主義者は自然に驚異を求めた、
自然主義者は人生に裸體を求めた、
醜い主義者は次から次へと
いろいろの騷擾を釀しつゝ……。
大生命の壺をさゝげて
蹌踉めきつ何處へ何を求めて、
あなあわれ……
魂の香泌む壺とも知らで
青き月の光りに
森の奥深く影は次第に消えゆく。（一一、九、二六）

調落の初冬

小松觀學

樹々は日々に衣を剝がれて慄えて居る
風は面白そうに落葉を轉かして驅けて行く
薪を負ふた女は白い息を吐きながら通る
後からから〳〵と落葉が走つて行く
荒涼たる山路！……。
向ふの山々は疲れ果てた太陽の弱い日脚を受けて茜に
染まりながら暮れを惜しんで居る
そして初冬に這ひ寄つて來たのである
と遠くで夕鐘を撞いて居る。

遠くなります（七面山）

結城光

遠く鳴ります
あらゝぎ山に
鐘は寒空
遠茜。

玉はとびちる（みのぶ）

玉はとびさる
青いろ水は
みをやたまやに
ほろとなく

ちらり〳〵と（寮の窓から）

ちらり〳〵と
涙に光る
星のなくのに
なぜなかぬ

菊

久遠寺の庭に咲きける白菊の心うれしく香りつるかな　田川惠良

白菊の盛りと見ゆるさ庭べに朝日さすなり寺の靜けさ　同

久々にみ山訪づれ庭菊のなつかしう見ゆ花の色と香　同

さ庭べの東をさして咲き匂ふ園にほの見ゆ菊のま盛り　同

山寺に菊の盛りとなりぬれば土の香いとゞなつかしき哉　同

我が庭に秋訪れて白菊のいまゝ盛りと咲きにほふ夕べ　同

鉢菊の枯れたる夕べに法の雨恵みに生えて又盛りゐぬ　同

秋ふけて薄き黄色に咲き出づるさ庭の小菊懐かしき哉　同

杉桓のもとに一本寒菊は霜にうたれて淋しく笑めり　下田雨女

秋愁

夜もすがら吹きにし風にものなやむ苔の衣につゆ結びけり　田川惠良

秋くれば寂しさましぬさ庭べに鈴虫の啼く夕べなるかも　同

もの憂ふるわが此の頃の顔をやせませりよと君はいわるも　今泉智旭

つくづくとわが淋し顔をながめゐる我が身の如く君

は悲しむ　同

二ッ三ッ取りのこされし柿の實の色さむげなり冬の山畑　太田赤童

たゞ一つ濡れたる如く光る星の君があの夜のまなざしにて　同

母の手にポタリとをちる涙見ていずまいなほす小さき妹　同

北國の空をながめて今日も又母と妹としみじみと思ふ　同

ひぐらしの聲もかそける啼ける日を友病むと聞き涙すわれは　同

思出草

前の世は兄弟ならめ此の二人あまりに奇しき運命なるかな　今泉智旭

語らひの重なる程に運命のあまりに似たる二人なるかな　同

此の惱み此の愁だになかりせば永久に二人知らざりしならめ　同

同じ道同じ惱みを辿り來て佛の仕ふる奇しき縁よ　同

しづしづと生命の壺を捧げてゆく手おのゝきし若き日のわれ　太田赤童

低唱はうちさびしくもしみじみとわが聲ふるふ悲しみのわく　花島涙草

明暗

必ずも僧侶であつて呉れませよ辛棒しませとはげませり君　今泉智旭

魔の神のいとゞ我が身を襲へども我は動かじ心やすかれ　同

うづ高き文にうもるゝ法の子の末の望みは燈臺の守　太田赤童

寺平一本松のもとに來て傾きくるゝ夕日をぞ見る　同

曉の雲たなびける山の嶺の晴間より見ゆ眞白き美女かれ　同

讃經のこえ波うつゝ朝堂の光影もれ來し朝のたうとさ　江原白線

樵夫（きこり）は斧をおさめて歸り來む鳥はねぐらに我はこゝろに　同

老ひの身に星を頂き月を踏む野山の業もわ子を思へ

ば　戸田峯仙

末せ世のわれ等をすくふ法の聲いゝど貴く我が胸をつく　花鳥涙草

不輕品の「我深敬汝」のみことばを大地にぴたり耳あてゝきく　同

自然の瞳

秋くれば野山の神は菊園に月はきらめく露に宿らぬ　田川惠良

たをやめの黑かみときて瀧の端の白き肌へに白玉の散る　江原白線

そよ風に散るもみぢ葉はいとしくも我をしたいて訪づれにけり　下田雨女

白糸の瀧端に立てる乙女子の姿尊し羽衣の橋　太田赤童

風なげる秋の夕べを音もなく庭もせに散る會式櫻は　同

天の川さやけくはれて七面の峯に星ふる逝く秋のそら　同

冬の日に山の庵ののきの端に小さき蜘蛛の住家つくりぬ　同

山寺　東溟

鐘聲迥出最高層青壁無梯不可登
千壑萬峯生暝色一樓有箇看雲僧

同

梵宮高出白雲層露欲爲霜月氣凝
一点燈光透疎木上方應有坐禪僧

同

隔崦清鐘一杵傳禪扉半掩夕陽天
石泉白咽僧無語雲冷山茶花落前

同

木魚石磬上方聞　尋到禪關樹竹分
端的入房先問道　老僧笑指一峯雲

送僧

楚水吳山不計程　無心端的是平生
問君錫杖歸何曰　笑指行雲一片輕

行脚僧

偶爾隨緣出翠微　一瓶一錫一麻衣
白雲猶是時歸岫　三界無家何處歸

創作

淨行

伊丹優曇華

朝方は天氣もよくて二六時間中青天井の見へない此の土地も、工場の煙塔より吐き出される煙も、まばらなのか一入晴れてゐたが午後からは、ばい煙も大分と殖へ、かてて加へて天候が急變して來た。時々思ひ出した樣に安治川あたりから吹きまくる風がそこらあたりの土塵を卷きかへして過ぎて行く、右往左往に行交ふ人は袖を顏にあてゝ此の時ならぬ襲擊を防ぐのであつた。町端の商家の硝子戸はチギッテ投げ付けた樣な時たま小石をも交へた黃い風が吹き付けて、ペチン〳〵と音させるのがなんとなく通行人の心を痛ましめた。

墨を流したような空は夜の幕を降してをるのか、森より家へ家より人へと覆ふのに忙しく見へた。其の上雷鳴は暮れ行く空の靜寂を破つて、かすかに聞へて居たが秒又秒分又分、を加ふに從つて其の島動は激しくなつたと思ふと、粟粒のような雪交りの雨を振り種いて來て通行人の下駄の音も彌々姦しましく、けたてゝ家路をさして急ぐのであつた。

人の足音も大分靜けくなつて戸毎の点燈を吹きすさぶ風のセイか消へては付き消へては付きして寂しそうな淡い光を道端に投げて居た。

大亮は終日の淨行を終へて今し方誓文拂で人を以つて埋めて居る賑榮な大阪の地を離れて住吉の大鳥井の前に來かかつた。白の天笠木綿の合衣のに麻の如法衣を着ながし、木蘭色の七條をかけて、白脚半に草鞋と云ふ出で立ち。つかれ切つた重そうな足を引きずり乍ら、正心庵を目がけて歸るのであつた。

やせぎすな、せのスラリとした三十路を越して未だ日も淺い壯僧であつた。彼は日に焦けた神經質らしい

顔には更に心の深い苦しみと孤獨の影が、いたましい程に刻み付けられて居た。

大亮は全身風雨の爲めにシットリと濡れたまゝ手を無造作に組んで闇路をトボ〳〵と歩み乍ら、『先師の言はれた「淨行」！行はれた「淨行」是が自分には分らんのだ。淨行は自分に取つて苦に導くものだ何んの慰安も未方も是に依つて報ゐられぬのだ。

「淨行」是れが人生の全體なのかて、人生はこんなに單調なものか。否其處には深刻な人間味があらねばならぬ。そんなに薄つぺらな者ではないんだ。嚴師より幾百年も傳へられて來た此の淨行！雨の日も風の日も欠行なく、町に出ての托鉢行……今自分が重苦しい足を喘きながら、踏みにじられたあぜ道をトボと歩むように幾代も〳〵もの先師がホンの型の如く傳へて來た淨行……夫が左程まで永久の生命を保ち、絶對性を宿した淨行なんだろうか。そして是が人間として否僧侶として寧ろ自分一個として最高の淨行だろうて。此れ己上何等の最高の願行がないのか是が人間としての總てで全一の「行」なんだろうか否々そうとは思はれぬ。其處に何等かの塞ざされたるある者がなければならぬ。』と引きも切らず取り止めも無い次から次へと並より狹い頗に皺をよせながら考へつゞけるのであつた。

あたりはもうシッポリと暮れて道さへ分らなくなつた。今までひとしきり吹き降つて居た雨はカラリと止んで眞暗な闇をツンザイテ星の光がチラホラと漏れて來るのが漸くにして道をあやまらぬまでに歩を進め得るに過ぎなかつた。南海電車のキシル不快な音がスベルように闇に消へて行く。界隈は全く初冬の靜寂さを充分に味あはせて居た。

彼はまたも思ひに沈んで居た。水の音も電車のキシル雜音も幾度か空をかすめて流れた星の光も倒底彼の沈思の意識よりひるがへさすに餘り力が弱はすぎた。因襲的な型の如き淨行……氏に對する疑問、……內的煩悶……そして「性の悶え」「孤獨の悲哀」……とヒシヒシ靈臺方寸につめかけるのであつた。

いつしか彼の足は正心庵の門に運ばれて居た。

丈助は時鐘をつく爲めに小走りて鐘樓に昇つて行く。

＊　＊　＊　＊　＊

正心庵の背に當つて。高臺にはモーソだのマ竹だのの混り合つた藪が一面に生ひ繁つて居た。住吉街道に向つて右手の方には栗の木か何んだかの落葉樹がコンモリと生ひ立つて居たが大部分の葉は落されて終つた黄ばんだ葉が、アチラコチラに殘つて居て其の隙間々々から寂しそうに家の軒端がチラホラと見へて誰かの匂だが

冬枯れや木立のぞかん賣屋敷

と云ふ冬枯の風情を充分に味はせて居た。

正心庵の門の前には大きな石の塔に「不許葷酒入門」の六字がいかめしく刻みつけられてあるのが殊更に人目に映じるのであつた。門を這入ると直ぐさま小高い處に鐘樓が風雅に建てられて其の向ふの方には寺の建物としては旦て見た事のない、どちらかと云へば宏莊と言ふよりは寧ろ風尙な若し自分が大膽に批評する勇氣を持つならば極く古風な御茶室を何十倍かに擴大された其れの極に地味な建方であつた。

自分達の常識で云ほうならばどうしても板を用ゐなければならないような所にも竹をさいて其に磨きをかけた竹板が用ゐられてあつた。

此の正心庵は今から凡そ二百五六十年前自家一流の異派を立て近州あたりから此地に移つて此の庵を建立した戒律堅固な玄修上人の開基にかゝる名刹である。此の流れが今に至るまで其の法燈が相續されて先代大勤に至つたが大勤は在職四十餘年の法箇を其の高德と嚴格とによつて世人の專敬を大身に集めて居たが去る七年前正心庵の離座敷に現住大亮に世を讓つて閑居生活に這入つたのであつた。そして此の法流の眞精神は「戒律」を以つて其の第一義とし「淨行」は其の實行方面であり体驗の世界であつた。

現住の大亮は七才の時から大勤の嚴格な手に育てられて成人したのであるから世の中の困苦と恁うした寺には有勝ちな寂しい空氣とには充分な經驗をなめて居た。是れと云ふ學校には通學したと云ふのではないが嚴師の昔風な訓育振りを受けた。生れつき聰明な頭惱の持主である彼は相當の年頃となつた時は大畧の宗學

と佛教學とにはあら方の了解も得開基以來の漢詩をも物するやうに成つた。

彼は朝五時に起きて約一時間半ばかり朝勤の讀經を修して早々、毎時ものような身仕度を整へて是れと云ふ日あてなしに淨行の拕鉢に出かけるのが一日の日課でありこれが佛に勤める唯一の奉仕であつたのだ。

* * * * * *

それは或る日の夕方であつた。

裏の竹やぶには雀の一群がチュー〳〵と塒を探して居た。山おろしの風が一層の冷めたさを以つて吹いて來る。人通りは云ひ合したようにピタリ杜絶して犬の遠泣きがかすか彼方より聞へて來る。

大亮は師の大勤と臺所男の丈助の手になつたいつもの精進料理で夕飯を契した後で茶の間の直き次ぎである八疊の爐の前につくねんと坐つたまゝ二人は暮れ行くあたりの靜寂を見まもつて居た。

『丈助！お前誠にすまないが御飯をたべたら例の大和川え行つて餅米を廿八日の餅搗きの間に合ふようにあつらへて來て吳れればいゝがな。そして其の序に吉川え寄つて二疊臺の圓座を賴んであつたからそれも貰つて來て御吳れ。』と。

他人を使ふのには是非斯ふなければならない言葉の優さし味を以つて大勤は彼に事付けるのであつた。丈助はきはめて勤勉で實直な下僕である。

大勤が十二三年前毎時もの淨行をしながら大和川に沿ふて河内と大和の境の土堤を歩いてゐた時に彼は田市の中の野雪隱に今や飢と寒さでをのゝいて居る行き倒れ人のあるのを發見した。大勤は彼に近づいて行つた。そして有合せの氣附け藥と若干のむすびとを與へて彼の危急を救つた。三千世界にたつた一人の弟のある以外（それも今は何處に暮して居るか其の生死さへも不明であつたのであるが）誰も身内としては無い彼を大勤は自坊に引き取つて下男として使つて來たのであつた。

かく奇しき緣によつて……而も命の救ひ主である大勤に對して丈助はモー影日向なく骨身を惜まずに立ち働いて、若し一旦緩急の場合には自分の體によつて其の危急を贖ふ事が出來るならば一命を的とする勇氣と

決心とは彼の頭を常に支配して居た。

怎うした境遇に置かれてあつた丈助は大勤の命とあるや毎時ものハキハキした返事をして活潑そうに用向きを果す爲めに寺の定紋の付いた渉藍色のはげ綴つた風呂敷を用意して出て行つた。

月が出るので河内の山脈が黝い大空に明闇の曲線を投げはじめた。絹のやうな絲を描いた雲が動きはじめた曠野の暗い大地をつゝんだ露が月の光りに照されて來た。極月の寒さがメキ〳〵と庵につめかける。

大亮は爐の中に絶へず薪を投げ入れた。

彼は師の大勤に言ふのであつた。

『得行此の意味が全く私には分りません。先師……其の人には成程絶對の權威を以つて居たかとも知りませんが而し夫は天龍川や大井川を運臺や肩車なんかで渡つて居た非文化生活の時代で御ムいますから……大正の今日は眞實に生きる時代でムいます。今までの私共の生活は生きて而して死せる者でムいます。』

『なせそんな事を云ふんじや。如來の淨行を行じて居るではないか俺に毎時も云ふ通り此れ以外眞實に生きる道があるか。お前は淨行が分らんと言つたが淨行夫が「佛心」なんじや。佛行じや禮拜であり奉仕なんじや。開基は此が爲めに一派を立てられて世の崇敬を一身に集められたでは無いか。淨覺は千里の道も遠しとせずもろこしから遙るばる其の令名を辿つてはせ集つたではないか。開祖の爲めには身命をとすると契つて指まで捨てし玄淨。丹沈。靜然とがあるではないか。其の高德は一世を靡たのじや。其の流は今に至つて今日の正心庵をなして居るのじやないか。淨行の恩寵はやがて眞實道の樂境に至らしむる生活其のものじや夫に何んの不服があつてそんな事を云ふのじや』大勤の青白い顏にかすかに血の色が射た。大勤は一言一句語氣に力を込めて言つた。

『では淨行が佛心だとすれば淨行以外に佛心と云ふものも佛行も無いんですか。』大亮の聲は力んで居た。

『そうよそんな事が未だに分らんやうでは怎ふするのじや。』やゝうるさそうな聲で……

『而し私はそうとは思へません。私はマンマと凡ての事をも批判に受け入れる事は出來ません。私の煩悶は

淨行によつて解決するにあまり複雜です。そしてあまり大きすぎます。私も人間として生れて來た以上には人間並の事は致したうムいます。僧侶と雖も同じ血の通つて居る人間ですから……。』

と大亮の聲は振へて居た。戸外は一層靜寂を增して居た。ひとしきり鼠は天井の上をあばれまはつた。

『人間並みの事……人間並みの事とは何んじや富貴？名聞が……そして在俗と身を伍して一日も餘慶に生きのびやうと安逸を貪る心なのか……。』

愈々意氣天を突くの有樣でなほもつゞけるのであつた。

『そんな心はお前の妄執じや。邪見じや。其妄執を斷たんでは誠の淨行は產れぬ。眞實の道を歩む事は出來ぬのじや、生れる時一文の錢を携へて來たのでもない、一人の友と云ふ者を伴れて來たのでもない、一日の生命をも持つて來たのでもない其處を考へねばならぬ。一合の米に一日の生命を生きのび得た事すら有難い事ではないか。俺とお前との此の二名が因緣あつて互に主伴となる事さへも誠に幸福な事じやないか一日の飯米が無くて飢に一夜を明したと云ふ日があるか。此が「淨行」の德じや求めんでも自から得られるのが淨行じや出家の心は虛に飯へる事死に入る事じや。一切は虛無なのじや心を虛しくする事が佛心じや。』

諄々と說き出す舌端は火を吐くやうであつた。天井裏の鼠はもう荒を鎭めて內外共に寂寞であつた。

大勤はなほも言葉をつゞけて……世の中の凡ては虛無じや宇宙の本體は何んであるか無極なんじや。無極で太極じや、太極より分れ出たのが春夢の萬象じや、宇宙の萬物は……宇宙の萬物はやがて無極に飯らなければならぬ。そこには生も無ければ死も無い喜として欣ぶ事もなければ怒として憎む事もないのじや。此の境地こそ吾開祖のお心なのじや。淨行は此れより出發しなければならぬ。玆に眞人間道があるのじや』大勤は前に比して强いて自分のある感情を抑へつけようとつとめた。

『……』小窓の下の棕梠の葉がガサ〳〵と風に吹きつけられるたんびに戸を打つのであつた。二人の間にしばらく緊張した沈默が續いた。

『御師範！貴方の御談しは强く解りました。だが而し今の御談しでは私は萬足が出來ません夫は人間の本性

を取り去つての御談しです。そんなに世の中を簡單に始末を附ける事が出來ましやうか、私は僧侶として生きるよりも先づ第一人間として生きとう御ムいます。』

大亮は消へんとする爐に薪をくべながらチョット口を噤んだが尙も思ひ切つた語氣で、

『わたくしはもうすぐ三十二になります過去三十年間の生涯は私に取つて誠に寂寞でした否寧ろそれは冷い人生でした「無味乾燥」と云ふ字を如實に味いましたこう云つては誠に御師にすみません二十何年と云ふ長い年月を御育くみ下された鴻恩は頭頂を以つて禮敬し一切を以つて供養するとも又報ずる事は出來ません。而し私の今申す事柄は過去幾年間の止み難い苦悶なんです。私の血を逆道せしめる處の悶でムいます。

因襲的な習慣とか洗滯した××の命に從つて生きていくよりも私の心の奥底から流動する處の萬人の琴線にふるゝ處の人間本然の性によつて呼吸して行きとうムいます。眞實の生の躍動其のものが私に取つてまことに親しいのでムいます』やゝ神經質的な青筋を額一面に立てて……

『そうだとすればお前の眞實に生きると云ふ事はどんな事なんじや。』大勤は言葉をため直してやゝ聞うとするような氣味を以つて……

『そうです人間本性を土臺とした淨行なんでムいます。いかなる高遠な理想も幽遠な哲理も此を無いがしろにした者であつたならば何んな値打ちも無いと思ひます。淨行は淨行として人生とかけ離れた超然として高々とまつて居るやうでは或は夫がたとへ高尙であるとは言へても人生の温血に解け込んで人間其の者を左右して行く事は出來ません。淨行は見にくい人生……賤しき芥を以つてまみれて居る人生を淨化して行くのでムいますまいか。無極を以つて人生を眺め虛無を以つて世の中を律する事はとりも直さず此の世の破壞であり人生の否定であります」況んや人生の無い處には僧侶生活のある定理はムいません。』次の間の六疊には小僧のうめき聲が思ひ思したやうに氣味惡く聞へるのであつた。

『人生の煩惱を肯定し見にくき人生の裏面を淨化して行きたいのでムいます。夫にはほんとうに人間道を味はなければなりませぬ。虛飾も虛僞を投げ捨てゝ眞實に、赤裸々に人間の生活を味ひ乍ら淨行をして行き

たいのであります、此れより出發しない淨行は空行でありそして寧ろ罪惡なんでムいます。』大亮の聲は益々活氣を帶びて來た。

『どうしても御前は先師の流れを吸む事が出來ないのか否先師の言を一個の反古として省り見ないのか。』大勤は前身を微動させ乍ら言つた夫は彼が毎時も意氣まく時には怎した態度を取るのが常習だつた。

『御前はなぜ共共に氣を合して行く事が出來ないんじや。ァヽ仕方が無いお前と俺とは互に異つた二つの道を歩まなければならぬのじや。』歎息の調子だつた。

『そうでムいます。』と大亮はつゞけた私は私としての道を歩みとうムいます私の淨行を行じとうムいます。たとへ道は互に異つた二つの道を歩みますとも而し私の血は御師範の血管に通つて居ると云ふ事をお忘れ下さら無いやうに御願い致します。』

と大亮の語句が言ひも終らぬや、大勤は爐の傍に忽倒した。大亮はをどろいた　やにはに彼は大勤の手を取つたがもう已に氷の如く冷たく成つて脈は何んの手ごたへも無かつた。死のブラックベールは大勤の面を覆ふて血の氣もなかつた。而し大亮の體には生氣〳〵した動脈が依然として淨く流れて居た。

時は已に三更をすぎて夜泣きウドンの氣味惡い笛は遠くかなたに眞夜の寂寞を通じて聞へるのであつた。

創作

轉變

下田冷涙

それは文永元年十一月十一日の遲い午後であつた。

晩秋の物淋しい霧が其の邊一帶の松原に低く垂れ罩めて太平洋の彼方から海面を辷つて來る風は、松の葉末を頻りに搖り動かしてゐた、丁度其の時。

霧の中に降つて湧いたやうに現れた百人餘りの兵者があつた。

『如何に强情我慢の日蓮も、今日ばかりは袋の中の鼠も同然、各々方は伴の奴原を遠矢にかけて射止められよ、當の日蓮は某し一人にて打ち果し申す、ナニ高の知れたる僧俗共!!。』太く逞しき駒にうち跨り斯く叫んだのは、云わずと知れた東條左工門影信であつた。

彼は近鄕切つて並ぶ者なき權者として鎌倉の極樂寺家から、特別の恩寵を受けてゐる傲慢な、自負心の强い惡地頭で而も念佛に飯依してゐた。

日蓮大上人に去る建長五年四月廿八日、清澄寺で初轉法輪の際、彼の歸依する念佛を破折され自負心を蹂み躙られた彼は、『おのれ憎つくき日蓮、眞ッ二に致して吳れん』と、意氣卷いた事があつた。既に其時から怨みを持ち、其の上清澄山の領地爭ひの節も名越方の味方になり、彼を不利の地にたゝしめ、彼の惡計を覆えし傲慢の鼻柱をへし折られた爭もあつた。無念に無念を呑んで折もあらば此の怨みを——と思つてゐた處に、此の度び上人が慈母の病氣見舞に房州に歸られたと云ふことは、影信に取つては勿快の幸ひであつだ、而も上人が一月も二月も影信の存在を全然認めぬが如く振舞われた——(上人は只慈母の見舞かたがた、別に何の意味もなく法を說いてゐられたのであつたが——)のが彼の怒を增す大きな原因のひとつでもあつた。

此の日は大上人が近鄕なる天津の城主工藤左近之尉吉隆に請われて、彼の館に趣むかれる日であつた。此のことを知つた影信は、好期逸すべからずと腹臣の者を叫合し、扨は上人を要擊せんと小松原へ乘込んで來たのであつた。

かゝる陰謀が途中に企てあらうなどと云ふことを夢露存じ給はぬ大上人の一行は午の刻(今の十二時)に花房を發足つて御伴には、日朗、日澄、鏡忍、乘觀、其他歸依の男女十餘人と共に、高聲に御題目を唱へつゝ此の小松原へと差し掛られたのであつた。

木末を渡る松風に送られて來る題目の聲を、遙か彼方に聞いた影信の一味は、互ひに云ひ合わせたやうに目配をして無言のまゝ彼方此方の松影に身を潜め、固唾を呑んで待ち伏せた。

軈て大上人の一行を、矢頃に遣過した彼等は。

『ソレッ』と、ばかりに打つて出た小松原の只眞中――射る矢は霰、劍は稻妻――、此の態を打ち眺めた時鏡忍坊の眉毛は、ピリ〻ッと動いた、彼は大上人の門下の中でも十人力の强の者として誰知らぬ者もなかつたくらい力の持主であつた。

『お師匠樣!! 一大事で御座りまする、此の場は鏡忍命の續く限り喰い止めますれば片時も早く天津の方へ―』と、云ひも終らず兩方の衣の袖を肩の所にしつかりと結び、手近にあつた松をメリ〳〵と引き拔き、

『おのれ佛敵。』

と、無二無三に暴れ込み、當るを幸ひ左右に撻き伏す、左藤次、長英も、これに勵まされ同く拔き連れて斬り込んだが、多勢に無勢の悲しさには三人共亂軍の中に題目を唱へ乍ら落命した。

折しも、亂軍の中から馬を煽つて大上人の側に乘り寄せた影信は、

『ヤー積る怨みの賣僧日蓮――其處動くなッ。』

と、馬上から振り翳した三尺餘りの得物、日蓮大上人は、

『慮外者ッ退り居れッ。』と、云ふより早く念珠の親玉を以つて、發止と受け給へば、梅の木の親玉は眞中から切り割られ、勢ひ餘つて大上人の御額に二三寸、三ヶ月形に斬り付けた。

『仕損じたり。』と、影信は二度目の太刀を振り下ろそおとした時、彼の刄は鍔元からぽッきと折れた。

『ヤ〻ッ。』と、影信あつけに取られてゐる間に大上人の姿はまう其處には見へなかつた。

* * * * * * *

『御注進――』

『御注進で御座りまする。』と、氣魂ましく叫び乍ら吉隆の館に駈け込んだ一人の若者があつた。

『大上人様の御身の上一大事で御座りまする。』
『ナニ大上人の御身の上に一大事とは――。』
吉隆の顔色はサッと變つた。
『アノ影信奴に御座りまする、只今大上人様の御一行小松原へ差し掛り給ふ折柄、彼の法敵の兼ねて期したる……み味方の腹臣、小手腹卷に身を固め前後に伏せたる百餘人……。』
『エヽッ。』
『して大上人に如何なされた――。』
『お命の程も覺束なふ御座りますれば寸時も早く御助勢の程を――。』
『扨ては憎ッくき影信めが――。』
『彌總次〳〵。』
『ハヽッ。』
『馬の用意を致せッ。』
隆は俊馬に打ち跨り一と鞭あてヽ、
『者共續けッ。』と、小松原差して眞一文字に駈け出した。
晩秋の短かい日足は、早西の山の端に沒して塒に急ぐ鳥が二ッ三ッ、渚にそおて翔けて行つた。
押寄せては倒るヽ灰色の波の音は吉隆に、悲報を傳へるものヽ如くに聞こえた。
吉隆が走せつけた時は入り亂れて戰つてゐる眞最中であつた。
『ヤー正法に刃向ふ邪宗の奴原、此の吉隆が馬蹄にかけて片ッ端から蹴散らし呉れん。』と、群がる敵の中へ面も振らずに斬り込んだ、一心籠つたる切つ先は見る〳〵内に十人餘りを斬り倒した。
これを見た影信は、
『それ吉隆なるぞ由斷すな、日蓮が身替りに遠矢にかけて射殺せよ。』と、下知をなしつヽ自分はそれにかま

わず、大上人を血眼になつて探してゐる。
『大上人様、大上人様には何れにおわすや、工藤吉隆お迎ひにまいりましたる上は、二百に足らぬ狠籍共何に程の事や御座りませう。』と、
彼は戰い乍らも大上人の安否を氣遣つて叫んだのであつた、折しも四五丁先の松影に一人の出家――。
『あれなるは慥かに日蓮。』と馬を翻つて馳け出さんとするより、これを眺めた吉隆は、
『推參ッ。』と、ばかりさつと彼の面前に馬を乗り出し必死となつて斬りつけた、影信は烈火の如く憤どおり。
『邪魔だて致して後悔すな。』と、これも同じく斬りかかる、兩人は馬乗り廻し秘術を盡して丁々發止と火花を散らして斬り結すび、十二三合も戰ふ内、影信は次第に切り立てられ、後へ〳〵と退つてゆく、折しも何れより飛び來たつたか征矢一本、吉隆の庫腹のあたりにグッサと立つた、さしもに强氣の吉隆も、
『ウム。』と、云つたまゝ鞍の上に腑向きになる、得たりと影信近か寄らんとする間一髪、北浦忠吾、忠内の兄弟は、主人の大事と見てとるより、影信の左右から必死となつて斯りかゝつた。
其の間に他の家臣は吉隆の馬を附近の松原に引き入れた、影信は齒噛をなして殘念がつたが、早其時は夜の戸張はあたりに迫つて人顔さえさだかにわからなかつた。
『大上人様には如何なされた。』忠吾、忠内に前後から看護され乍らこう訊ねた吉隆の顔色は、土よりも青かつた。
『只今一同の者お探し申して居ますれば、おつつけお見へに成りまする、お氣を確かに……。』
『ウム、痛む吾が身は厭わねど――大上人のお身の上が……。』
『して狠籍者は……如何致した。』
『皆引き擧げまして御座りまする。』
彼は苦しさに堪へぬものゝ如く目をつむつたまゝ、
『ウム。』と、輕るく返事をした。

其の時松の枯葉に付けられた火は、一時にぱつと四方りを明るくした、吉隆を見守つてゐた一同の面てには表現し難い、憤怒と、悲痛の、色があり〳〵と見られた。
『お丶吉隆殿!!』こう叫んだ大上人は思はず吉隆の手を、しつつかと握られた。
『お丶大上人様か?!』彼は兩眼をくわつと見開いた、一同の者は思わず襟を正して顔を見合せた、そおして彼等の内には人知れず涙を拭いてゐる者もあつた。
『傷は淺そお御座るぞ、お丶氣を確かに持たれよ。』
『あ丶有難う御座りまする。』彼は大上人の顔をきつと眺め乍ら、
『して貴方様の其のお傷は——。』
『なにこれしきばかりの掠り傷——。』
『それにて安堵致ました。』彼の眼は段ん〳〵暗くなつて行つた。
『したが此の吉隆、か丶る深手にては——。』首節から胸の方へ通つてゐる、大きな血管が時々、ピクリ〳〵と波うつてゐるのが焚火の明りで微かに見られた。
『大上人様、吉隆最後の御願ひ……と申は、ほ、ほかでも御座りませぬ、只今愚妻は懐胎の身の上、も若しも男の兒で御座りましたら……何卒御弟子に——。』
『何と云われる、たつた一人の男の兒でも——。』
『く、工藤の家と法華經とを替えられますれば、某しの本望——。』
『お丶天晴見上た吉隆殿、日蓮身に替えて育み申す。』
吉隆はゴックリ唾を呑み込み乍ら、大上人様お丶さらばでござりまする、南無妙法蓮華經……。』
『國の爲法華經の爲、まつた日蓮が身替りとなつて……』こ丶まで云つて大上人は感極つて衣の袖に面てを覆つてしまわれたのであつた。
『果、果報者じやと云つて下さりませい、南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……。』

『御身の殉死なされる法華經は、三途の川にては船となり――冥途にては燈火となり、靈山へ參いる橋で御座るぞ、梵天帝釋、四大天王、閻魔法王の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮が弟子檀那と名乘つて通られよ。』

『あ、有難う御座りまする――。』

二三度、微な聲で題目を唱へ終つた時、吉隆の顎はガックリ、と前にうな垂れた。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經〳〵……』一同に唱ふる、嚴肅な、靜かな題目の聲は靜かな夜の松原の奥深く泌み渡つて行つた。

* * * * *

數日の後、舘の後ろの丘に大きな新しい土饅頭が出來て數十本の長い旗が、麗かな朝風に翻がへつてゐたそおして其處には、二人の出家が靜かに讀經してゐた、それは日蓮大上人と、弟子の日朗とであつた。

不幸なる哲人の物語

高崎一二

一

春の野邊に可憐な花がにつこり笑ひ少さな鳥や蟲などはたのしげに戀のうま酒を汲みかはしてゐました。野の向ふに大きな森こんもりしげつてゐて森の傍には始終暗い影の漂つてゐる廣場がありました。そこに入る者は何となく氣が滅入りました。例令其人がどんな金持にしろ乞食にしろ軍人にしろ政治家にしろ道覺者にしろ宗教家にしろ詩人にしろ皆同じでした。

詩人などはたえられなくてしく〳〵泣出した相です。
そこは昔の刑場でした然今は何でもありません強いて昔の名殘を索たらばそこの中央に雨風に曝らされた二本の柱が立つてゐました。
人々は云ひました。
「その刑場で刑死した多くの人達のたましいがそこに殘つてゐる」と。
多くの人達はちつぽけな土地をもどうにかしようとごた〳〵爭つてゐましたがそこばかしはこうすると云ふ者はありませんでした持主はあるでしようが俺の物だと云ひ張る者もありませんでした。
其處を訪ふ者もなく四邊は古池に石を投げた時起る水音の餘唄の樣な靜さでした。只夕暮になつて灰色の靄に四邊が漬ると森を越して原を越した彼方の寺の晩鐘がごーんと戀する人の林に靜にそこを訪れました。
すると木々は戀人の甘い口づけにあつた樣にざわ〳〵と身をふるはして喜びます。二本の柱は甘い陶醉にたえかねた樣にゆら〳〵とゆぎます。
どんなにでも戀人はそこを訪れました。
雪の日など彼等は白妙にきかざつて戀人を迎えました。そしてその美くしい粧の禿げ落るのも厭はずにざわざわと悅びました。凍付いた樣だつた彼等の戀人は彼等の愛情に暖められては森を超へ原を越えて歸へつてゆきました。

二

或日一人の男が其處を訪れました。
釣瓶落しの秋の日が落ちて灰色に包まれた二本の柱は恨を呑んで刑死した多くの人達のその樣に見えました。汚れた袷一枚に繩をぐる〳〵と腰に卷き付て髮の延た目の異樣に輝く其男は物の怪を知らぬげにうそ〳〵と歩いてゐました。
彼は哲人でしたそして亦詩人でした埃立つ人生を唄ふ得難い詩人でしたそして突として人生を語り人生を

唄ひました。あらゆる物を彼は美化しました。

春になると彼は陽炎の萠え立つてゐる綠の草の中に色々の花がかすかに笑を浮べ乍ら眠てゐて黃色や白の蝶がひら〳〵と花の上を舞ふと花は蒼蠅相に葉を動して又深い〳〵うまいに落ちます、眠りほうけた蒲公英などはたのしいまごろみにぐつたりと多くの蝶の爲す儘になつてゐるのを見乍ら。

そしてにほやかな春風に送くられて來る……

「野良唄や、馬子が鳴らすのどかな鈴音ひだるい鷄や猫の鳴聲、可愛い鳥や蟲の呼き、草や花から起るさゞめ言」などをきゝ乍ら。

じつと天地の呼を耳にして默想に耽り春のひだるさに、ひんと云ふ馬のいなゝきにたのしい夢より醒めた樣に、にやりと滿悅の笑をもらしました。

生きんが爲の烈しい競走にあくせくと汗を出して働いてゐる多くの人の群を見ると彼は、にやりと笑ひ乍ら、

「お前さーたちはなんだつて此の結構なお天氣にそうやつて汗さーたらして働いてゐるだに」と云ひました人々は笑ひ乍ら、

「岩公手前にはわかんなかんべーおらたちやあー斯ふやつて春だらうが夏だらうがよ、またあ冬だらうが汗たらして働かなきやくえなえんだ」

と云ひますと。

「くえなえつて、おらみていにかうやつてめえにち、おてんとさまあ、御拜んでよ歩きやあ、おてんとさまあ腹がやへつてくりや——あそこへいんでくえといつてくれらーな、そしてよポカ〳〵暖くなりやあ、奇麗な花を咲かしてくれたりちつぽけな鳥をなかしたりしてくれるだに、おめえさーたちあ、おてんとさま、あにおがまねーだ、おてんとさまさーおがんでよおらみていにこうやつて方々あるきなせい。」

とさも〳〵氣の毒相に云ひますと人々は、

「あは……」
と大き聲で笑ひ乍ら行きます。
人々は彼の事を馬鹿の岩公と呼んでゐました。そして彼は馬鹿が自分か岩公が自分なのか別りませんでした。
彼は又どうして生きてるのか何うして食ふのか考へてゐませんでした、腹のへると云ふことが自分にとつて最悲しい事だと考へてゐました。
人々は彼を見ると可愛相だと云つて食物を與へました、につと怪しい笑を浮べては彼はそれをたべました。彼は腹がへつて來ると所々の家の前に立つてはたべ物を呉れるのを待つてゐました。
そうすれば人々が彼の爲に食物を與へて呉れると考へてゐましたから……　（未完）

編纂雜記

過去は反省と悔恨で、現在は奮鬪と努力で、未來は希望と光明に滿ちて居る。悠久の過去から永遠の未來へと絶えず流れ行く「時の力」は嚴肅な回顧を敎て居る。逡巡と懷疑と暗黑が去つた」と、四國の一師が年頭に述べられたが何と云ふ尊い宣言であらう……。

文學必ずしも全藝術ではないかも知れぬが、毎年一度づつしか生れぬ此の棲神、私共としては尊い生命の躍動であるのに何といふ貧弱な藝術品であらう。いたづらに文字を弄ぶ思索的遊戯、層も越え得ず殼も破らず繰外にも飛び得ぬ、廢殘と形骸の遺品としか見られない、誰しもそう思ふのは眞實に情け無い事である。御互ひにもう少し社會文化に對して宗敎的表現價値に見醒めてもらはればならぬ第二號第一卷として堂々と編輯して見たものゝ、此れが祖山文書の粹華として世に出るかと思へば涙ぐましい。潑溂たる意氣が何度にある、切實なる宗敎的生命が何處に通つて居る、世相百般の問題に對して不徹底と安價な妥協のみではないか、此の悲慘な闇影を諸君は嬉しく見られるのか、もう少し讀書趣味と文書傳導に熱を持つて戴きたい。顧れば確に意義深重な過去であつたではないか、聖誕七百年、平和祝禱會、立正大師號宣下、と吾々青年求道者の血肉涌躍の時に、更生と轉換と純化に「吾叫ばずんば石叫ばん」の大生命が次から次へと去來したではないか、其間に於て吾人は如何なる宗敎運動を爲し得たか、冴え渡つた深夜に大空に響き渡る除夜の梵鐘を聞く毎に「自己を知れ」「自己を救へ」「自己に覺醒せよ」全身がおのくでは無いか、靈性の枯れ果てた冬の野に闇黑の影が「既成」の二字で覽の如く四面を塞いで、吾人をして泣かしめて居る、破綻と改革のみでは現代人は滿足し得ぬまでに、吾人の頭角の上に出て居る若き宗敎家の胸に燃え盛る焰は驚く可き革命の使としての自覺である。如來子であり如來使である吾人は、聖者の法風に……、聖者の御懷に……、何で安逸と賴墮であり得やう、ウンと勇猛精進であられねばならぬ。

今の處プロレタリアーである同窓會としては毎月一回づゝも發行したいのは、ほんとうに希望する所であるけれども、年一回が最大限である。然も此の第二卷第一號が生れるまでには既に、三代相續の難物であつた、部長も幹事も共に過去二年間にどれだけもがいて見たか、誠に會員諸君に對して申譯けの無い事である、その罪はどちらも負ふ義務は有るまいが、幹事そのものか惡者になつて置かう。同窓會としての詳細な記事は事の有る都度文學部から、身延敎報と天業民報とに、掲載する事になつて居るから今は只骨目の概錄に止めて置く。

大正十年三月の臨時大會から、七月の定期大會から、大正十一年六月の定期大會から、十一月の臨時大會と可成の變遷があつたので部長幹事の任免ばかりでも余程の歷史を持つて居る。十一年度の初めの幹事は江原亮勇君（講演部）福島瑞岳君（會計部）渡邊泰深君（運動部）高山惠忍君（文學部）、十一月改選の幹事は岡觀修君（講演部）太田純志君（文學部）下田光泉君（運動部）立谷長康君（會計部）となつた。

會長は小泉院長猊下で、副會長兼會計監督は富木敎頭、文學部長伊丹敎授、運動部長鈴木敎授、講演部長中條敎授である、大正十年七月七日江原亮勇君の東京雄辯會出席報告あり、九月三日皇太子殿

下御歸朝奉祝茶話會あり、十月十六日には在京同窓會紀念參拜あり十月二十七日より三十一日まで、江ノ島鎌倉横須賀方面に修學旅行あり、十一月九日字田川教授送別茶話會あり、十二月五日會計幹事富田君依願免職せられ江原幹事兼任と決す、十一年一月十一日新年茶話會あり、二月十六日宗祖降誕會に於ては全校各教室の室内裝飾中一の緣門中二の塚原三昧堂中三の德勝童子中四時宗の靈夢中五の人物展覽會高全のコーヒー接待等、各々趣向をこらし雨天にも關せず非常な盛會であつた。夜間の余興としては聖典劇聖者の半生、佐渡塚原阿佛房歸伏、喜劇萬歲題目、西洋奇術、歌題目等參觀者四百名實に稀有の盛況であつた。四月十二日には東京別院に擧行せられた法主小泉日慈和尙謝恩會に太田純志神同義法二君出張參列した五月二十三日から二十八日まで東京日光中山の方向に靈跡參拜の春季修學旅行あり、七月五日清水教授遷化の爲め本葬參列代表者として結城瑞光君渡邊泰深君出張された、九月一日には舊教頭關本龍門師を送り、新教頭富木堯廣師を迎へ、全生徒、設深支院、深敬病院長學院出身者諸氏の出席あり、又學院の追億も層一層の基礎付けられた事を痛感した。九月十二日龍口法難會茶話會並幻燈會を開催した、十月四日には臨時學生大會を開き秋季運動會の件に就て議し、十月二十七日學制發布紀念として陸上運動會を開き、大々的に祖山健兒の勇猛精進振りを遺憾なく發揮した。十月三十日學制發布五十年式典執行、十一月十一日入營者石黑湛然君秋山清吾君辻行眞君森泰常君送別茶話會開催、十一月二十日立正大師諡號宣下書奉迎二十一日奉安大法會等であつた。

もつと詳細の事件を報導するのは當然であるが、教報や民報紙上と記事の重復するのは好ましい事でないから此の位で許して戴いて此の第二卷第一號が宗祖入山六百五十年といふ嘉辰に產聲を擧げた事は、のみならず二月十六日の聖日をトして發刊した事に、何等かの意義と、深刻なる印象とを思ひ敢して戴きたい。現今、宗教對藝術問題の渦中に、何物を見出さんと現代人はもがいて居るのか學師は、「聖人凡化よりも凡人聖化」と垂訓されて居る。私達青年僧侶は幾多の醜き階級差別と、政略鬪爭より脫して、退嬰保守を擊退せねばならぬ。そうして燃ゆるやうな自覺と、嚴肅な氣分に、世法即妙法の靈妙味を眞に體驗せねばならない。（赤童）

講演部から

時運の趨行、今や兵武の交戰其の跡を陰し、方に舌鋒を交へて、其の俊ぎを削る兵和戰となつた。

惟ふに、平和戰自ら文筆、言論の二途が有る、文筆の効顯亦驚歎すべきで有るが一たび四筵を壓する雄辯の快起らば文筆自ら第二位に陷るの感が有る、曰く彼れは間接的、消極的で有て、此れは直接的、積極的、實際的で有る謂つべし雄辯の遂たる其の範曠く、其の用多なりと。

知らずや西曆BC年間アテネの志士デモステネスが、雄辯を揮ひグリークの危急を救はんとし、西紀十六世紀にマルチン、ルーテルの宗教革征の叫び又浩ける大雄辯ではないか。或は德行、言論、政治、文學の四科を立て、殊更にアンテーの光を說き人道の軌範を示した東洋の哲人孔夫子は、當時の周をして、天下を統一せしめ中華永遠の計を畫らんとしたのも、亦雄辯を以てしたではないか。覆天の大聖佛陀の長廣舌は法界を蔽ひ、末法澆季の長暗を照破せる萬餘

の典籍、亦雄辯の莫ならざるはない、大聖日蓮が宇内の靈元たる扶桑國に降臨在して、國家安康四海皈妙の大理の下に破耶顯正の大絶叫を遊ばされ乃至、六十年の御生涯を綴る史實は皆之れ雄辯の實ならざるはない。而して、彼の爲政者か言論以て國家否世界を左右し或は三歳童の戯論遊舌、また山川草木の自然鳴乃至、樹間梢頭に囀る寸鳥の聲、一つとして雄辯ならざるはない、あゝ偉なる哉不爛三寸の舌頭、大なる哉辯論遊説の世界。前に我か祖山の遊子は、一世の仁人四海の聖者たる宗祖久遠の流辯を汲み、其の耕辯唐術日々にいや増し滔々快辯の意氣天を衝き、雄税の舌頭縱横に宇宙の玄理を論述して倒行逆施混混渾其の皈趣を知らざる思潮の濁流を清々皈一の清流に化し、妙玄法爾の大光を宣揚して世界雄辯の猛者となり、宗門法器の實を發揮せんとして居る。想へ、延嶺雄辯の花は方に開かれ、驚天動地の菓を結ばんとするを。

驚峯開闢の幕は開かれて、已に六百五十の星霜を經た祖山本化の雄辯は、社會の進展に伴ひ、其の文化に相和し、久遠の生命を把持して、世界人類の上に、遺憾なく實現されて來たので有る。而して我が同窓會講演部の長足の進歩は勇猛精神、不懈忘心の健兒に依り表現されたので有る、講演部の練磨會は一周二回、(水、土 各十數名の辯士の熱辯に連れて、新眞の氣分を表發し、耕辯の實を擧げて居る。のみならず、毎學期開催の聯合雄辯大會は、本化獨特の雄辯を吐露して内ち大教的に、外と社會的思想の上に將又現實に向つて咲いた雄辯の華は美にして且つ大なるを見る。又高等部生の山内布教及び中五の特派布教(本妙臨師の居庵)は不虚潛達向上の路を開き、或は他地方有志諸彦の招待に應じ幻燈携帶出張布教をなし、爲山爲宗實社會に新生命を付與して止まないので有る。然かし世界文化の要求に從ひ、眞の完全を期する迄には、尚幾多の努力と熱誠とを要するは勿論で有る。方に覺醒の歩調を揃へた生等青年求道者は雄辯の實義を闡明して、本化的理想の下に基礎付け全人の上に、眞の樂園平和の天地を創造し、而うして生活の安定を與へなければならぬ是れ祖山講演部の生命にして 且つ吾人の責の存する所で有る。

今大正十一年度已降の延嶽及び他地方に於ける講演布教の實狀を略記せんに。

六月廿五日各級聯合雄辯大會開催(於本學院講堂)

開會之辭		高山幹事
法華經主義の後陣に立ちて	中一	佐藤隨感君
愛山の思	中二	森島見薩君
眞の救世主とは?	中三	渡邊要孝君
久遠の御光り	中四	間宮感應君
生活の意義	中五	佐野玄榮君
原始佛教の眞髓	高一	福島瑞岳君
過度期に於ける吾立脚	高二	太田純志君
來るべき民衆運動と吾宗徒の態度	高三	結城瑞光君
部長の挨拶		鈴木教授
閉會之辭		江原幹事

七月已降五十日余の夏季休暇を利用し本院の囑託に依り出張講演をなす。

會場	九州長崎縣及岡山地方
期間	自八月上旬至八月下旬
講師	本學院教授鈴木文學士
應援	本學院内九州學友會

會場　北陸各方面
期間　自七月下旬至八月上旬
講師　本學先輩伊藤海聞師
應援　本學院內北陸學友會

同夏季休暇中、自八月五日至七日三日間左の名士を招聘し於本院大講堂講習會開催す。

法華經の神髄と日蓮教義の要旨　清水龍山先生
大午的文化の建設　濱田文學士

本學院生一同聽講す。

九月廿八日出張幻燈布教

會場　本縣西八代郡岩間妙現寺　本學院出身小林宣師住職）
出張者　辯士　高二　戸田文明君
　　高一　江原亮勇君

右同日

會場　郡內靜川村石畑來光寺
出張者　辯士　高三　結城瑞光君
　　中五　富田海音君

十月十日

會場　山內妙石坊　對告衆甲府市團參七十余名）
出張者　辯士　高二　岡觀修君
　　同　太田純志君
　　高一　福島瑞岳君

十月廿五日

會場　山內林藏坊
出張者　辯士　高二　戸田文明君
　　高一　江原亮勇君

十月廿一日

會場　本郡南部妙成寺
出張者　辯士　高二　岡觀修君
　　同　太田純志君
　　中四　原智晄君
　　技師

十一月六日

會場　七面山本社
出張者　高二　岡觀修君
　　同　戸田文明君
　　同　太田純志君
　　同　森田一耀君
　　高一　野崎學隱君
　　同　安藤教全君

十一月十一日　本學院生入營者（五名）送別茶話會

同　廿九日　第二回聯合雄辯大會（於本學院講堂）

開會之辭　岡幹事
義の觀念　中一　今泉智淨君
日頃の想　中二　吉川啓善君
宗教より見たる勞働問題　中三　秦觀行君
學生の自覺　中四　森泰常君
吾人の覺悟　中五　渡邊泰深君
開れたる眼　高一　安藤恭善君
勝ちの哀みと弱者の誇　高二　森田一耀君
さゝがにの糸　高三　結城瑞光君
輓近宗門內部に動く二大思想　鈴木教授

部長の挨拶　中條教授
閉會之辭　太田幹事

十一月三十日

會場　靜岡縣川崎町法光寺　本學院出身小屋舜正師住職）

出張者　辯士　高二　太田純志君
　　高一　福島瑞岳君
　　中四　原智晄君

技師

以外に登山參拜團及青年團に對し講演布教せし事數多今は悉皆列記するの余裕なければ略す。

終りに先輩並に有志諸彦の御後援と會員一同の熱誠とを以て講演部の益々隆盛發展の程を切望す。以上（鳴月記）

文學部から

過去を救ふ事を知つて未來を救ふ事を知らぬものや、未來を救ふ事を知つて現在を救ふ事を知らぬやうな諸種の宗教團體が、雜亂の地上に所夾まきまで列べられて居る、人心救濟、生活改善、社會浄化、此等が宗教運動の目的であり理想であるならば、今後の宗教家は人類主義に徹せる信愛を表寥しなくては、光り輝く宗教生命には觸れ得ない。伽藍佛教の獨禪寂主義は像法過時の遺物、個人解脱の自利的行動は正法時代の化現である、今にして吾々青年宗教家が自覺しなかつたら、共々に冥きより闇きに入る」としたならば、人間は單に動物以外の何物でもない、神や佛がそが寵兒として何の爲めに理智を與へたのであろう、上有頂から下奈落に住む吾々の心は本來本有の眞理ではないか、そこに確かに沈んで居るのは宗教の眞髓ではあるまいか、その法性をしつかり握り得た人々こそ佛陀であり聖人である、「法は人に依つて榮える」そうだ宗教は人に依つて現はれ、人に依つて培はれ、そうして人を養ふてくれるものだ、現代に於て其の表現方法に二方面がある。一は辨論と、一は文筆である、今辨論の價値を云々する場合ではないが、批判は對立的にせねばならぬ、姑息な見解かも知れぬが、辨論は横に空間的（十方）の所產で空のもので、文筆は竪に時間的（三世）のもので有である、然らば存在と價値に於ていづれが時代を大多に支配し活動し進化し行くか時と場合に依つて其の優劣は決し難きも、其の根本は文筆に依つて價値づけらるゝ事は明白なる事實である。會員諸君が祖山の辯筆を自らほこるの慨はあるが、はたしてそれが人間精靈の奥扉を開き得るか、辨と文とは或点まで一致と同理を認めねばならぬ。然るに此の棲神はどうが、余りに紙上を醜くするやうな苦言は爲し得たくない、只校正の不備と編輯の不振とを謝し、追々と諸君の努力と奮闘を祈るばかりである。

毎月寄送して下さる書籍雜誌等を、一同熱心に拜見して居るから其の御芳名を錄し、虔みて謝意を表しよう、大崎學報（日蓮宗大學殿）、天業民報（天業民報社殿）、日宗新聞（日宗新聞社殿）、身延教報（身延教報社殿）、雄辯、太陽、中央公論、現代、解放、改造、望月軍四郎殿）、唯一、覺醒（大日本覺醒團殿）、三寶（森江書店殿）、宣明庵（日蓮妙龍會殿）、閉の教（京城閉教社殿）、信友會月報（信友會月報部殿）、あさひ（大阪あさひ社殿）、傳道（大阪傳道閣殿）開顯　天業民報社殿）微妙（大阪顯正護國會本部殿）、東海中正新聞（佐藤天洲殿）、香川日報（黑澤松南殿）、購讀雜誌の中に無礙光、合掌、法華、中學生、中學世界、佛教學雜誌、第一義、宗報、密宗學報、佛教研

究、六條學報、中外日報、宗教の藝術、民衆公論、文藝通報、中央佛教、佛教倶樂部、清流、文化生活等である、斯く内外に亘つて居るからには圖書室のみに於ても、一角のもの知りと成り得ると思ふ大いに勉強してくれ給へ。（赤童）

運動部から

新しい時代を造るには、新しい活動が必要である。新しい活動の盛んな國は、いつも新しい方面に發展しつゝある國である。それと同樣に、運動も又時代と共に歩調をそろへて進む可きものである、故に新しい時代の新しい運動は、其の時代を形造る處の人間の力强い心の發動である。

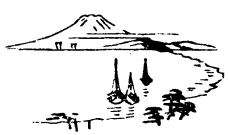
近時吾國に於て各種の運動が、世界の先進國に亙して進歩しつゝある事は、國際的にも、社會的にも、將又國家隆盛の上から云つても、眞に喜ぶ可き現象である。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」とバアナードショウが云つたように、如何に高遠な理想、抱負を以てゐても、それに伴なわない肉体を持つてゐては、到底現實への道程に登る事は出來得ないと云ふ事は自明の事である。

吾々青年宗教家の卵子が將來自覺せる宗教家の一員として、復雜な社會の表面に立ち、混沌として渦卷き流るゝ思想海に浮沈しつゝゐる時代の人心を救濟するには、自分自ら其の渦中に拔手を切つて進んで行くと云ふ覺悟がなからればならぬ、其の覺悟である以上身体の强健と云ふ事は片時も忘却してはならぬのである。此の意味においてか、吾祖山學院にも近頃非常に運動熱が頭を擡げて來たと云ふ事は當部に於て最も喜びとする處である。□各部の中でも劍道部が一向振はないのは殘念だ、それにはこうした靈山に餘り烈しい擊劍の音がするのはどうかしら……と云ふ懸念もあり、一つは時代思潮の餘波が此の山の奥にも流込んでゐるせいでもあらう。周圍の事情や還境に支配される必要はないから遠慮なくやつてもらいたい。□弓術部の方は反對に非常に盛になつて來た、大正の奈須與一を以て自任してゐる連中が廿人以上も居るから素晴らしいものだ、何時行つても五七人引張つてゐない時はない、それと云ふのは以前の矢場のように矢の藪入の慮ひが全然なくなつたのと、地方に弓術が盛になり競技に出かける者が多くなつて來たせいでもあらう。カラリと晴れた青空の下で滿月の如く張つた弓の矢が弦を離れた瞬間―靜かな空氣の中を直つしぐらに、的に當つた刹那は、若い青年の血潮に詩的なそうして何と云へないデリケートな氣分を起させるからナア。□庭球部は何と云つても、吾運動部のオーソリテイだ、毎日白熱的な猛練習を續けてゐる、シングルもやればダブルもやる、殊に昨春以來峽南庭球大會が所々に開かれ、其の都度出馬するようになつてから一增猛烈になつて來た。が目下廿人餘りのプレーヤーの專有物かのようになつてゐるが、これから未熟者もドシ〳〵やつてもらいたい球拾ひの半年もやつてゐる間には少しはウマクなる。兎に角毎學期一回宛の弓術及び庭球の大試合が一回毎に盛大になり且つ技術が熟達してゆくのは喜ばしい、本年度の初試合までには第二コートを是非共完備するつもり諸君の努力を望む。□五月廿四日會則第十條に準じて五泊四日間の豫定で中山、東京、日光方面に修學旅行に出かけた（別記事參照）十月廿七日には、學制令發布第五十記念の陸上大運動會が開催された、式後直に運動にかゝつた、時に九時―

秋晴れの空は飽くまで高く澄渡つてゐて、時々思出したように眞白い斷雲が浮遊してゐた、四方の山山はすつかり秋のよそほいをして、雨上りの地面は麗かな朝の陽を受けて軟かい地の香を放いてゐた、高二より成る音樂隊の一段高い所から奏するオーケストアは、靈山の朝の空氣の中に大きな破紋を起して、當日の運動氣分をいやがうえにも喚起した、こうした雰圍氣の中にユニフォーム姿りりしく吾祖山の健兒は吾れを忘れて飛んだり跳れたり轉んだりして眼新しい競技はプログラム通り、次ぎ〳〵に進行して行つた、午前中は觀客も少なかつたが、一時二時頃はさしもの運動場も立錐の餘地無きまで押寄せて來た、附近の二三小學校からも先生達ち引率のもとに數百人の生徒が一方に陣取つてゐて種々面白い遊戯をして觀客を喜ばせた。會報係りから廿分毎に發行される記事が慢畵印象の臍をヨラせてゐた。運動が終る頃には短かい秋の陽は西の低い山の端にかくれて、遠くの山山から夕闇がのぞいてゐた、斬くして運動會も盛大裡に終了し、運動部長發聲のものに萬歳三唱して開散した。

おゝ樂しかりし秋の一日よ!!

終りに望んで會友諸兄に希望す、純な清い信仰と理想を於ける諸君等よ!! 大に學び大に運動し、天晴未來の大宗教家たられん事を。(冷涙生)



金品寄贈者芳名

（次第不順）

大正拾年度（自六月至十二月）

一金五圓　佐賀市　前田龍存殿
一金參圓　東京市　小宮士太郎殿
一金五圓　大宮町　石川定七殿
一金參圓　學院　大泉寺殿
一金參圓　學院　服部雪淳殿
一金參圓　學院　故清水水靜殿
一金貳圓　庄司存忠殿
一金九圓　山田一英雄殿
加藤文年
青二宮龍忍殿
一金貳圓　學院　鈴木文亮殿
一金參圓　今江即淳殿
一金貳圓　靜岡縣　青島淳雄殿
一金壹圓　東京市　在京同志會殿
一金拾圓　市川日調殿
一金拾圓　香川縣　廣昌寺殿
一金壹圓　本院殿
一金貳拾圓

一金五圓　大阪市　深見靈照殿
一金五圓　北海道　齊藤純正殿
一金拾圓　南部　荒木經明殿
一金貳圓　妙淨寺殿
一金五圓　本院　小屋舜正殿
一金拾圓　本院　加茂富川監督殿
金四拾六圓　荒木經明殿外十三名

大正拾壹年度（自一月至十二月）

一金參圓　本院　太田日定殿
一金參圓　學院　水野潮音殿
一金參圓　學院　伊丹靈瑞殿
一金參圓　石川縣　青野慈明殿
一金五圓　江尻町　不退會殿
一金參圓　平原遠明殿
一金壹圓　支院　荒木唯明殿
一金貳圓　支院　妙石經坊殿
支院　志摩坊殿

一金參圓　學院　中條是明殿
一金五圓　前橋市　田代氏殿
一金五圓　橫須賀市　身延講殿
一金五圓　小川圓如殿
一金拾圓　相澤和助殿
一金四圓　南部　妙淨外三名寺殿
一金五圓　大阪市　安田妙德殿
一金五圓　佐賀縣　前田龍存外信徒殿
一金拾五圓　學院　關本龍門殿
一金拾圓　學院　富木堯廣殿
一金參圓　長野縣　早川圓澄殿
一金參圓　神戸市　菊地泰旭殿
一金五圓　北海道　齊藤由松殿
一金拾圓　松本興光筆殿
藤田望月宗康
一金五圓　佐賀縣　前田龍存外信徒殿
一金參圓　學院　小川英正殿
一金參圓　山內慧海殿
一金硯箱百個　武井坊殿

大正十年 秋季修學旅行隊

金品寄附者御芳名

一金五圓　本學院　院長猊下殿
一金拾貳圓　大明寺殿
一金壹圓　身延深澤恒雄殿
一金五圓　身延隨行寫眞師殿

大正十一年 春季修學旅行隊

金品寄附者御芳名

一金五圓　本學院　院長猊下殿
一金參拾參圓　東京鏑木繁子殿
一金五圓　油田珠邦殿

大正十一年 秋季陸上運動會

金品寄附者御芳名

一金拾五圓　本院殿
一金拾圓　本學院　院長猊下殿
一金五圓　加茂監督殿
一金五圓　富川副監督殿
一金五圓　中村監事殿

一金參圓　太田日定殿　一金壹圓　大善坊殿
一金參圓　志村部長殿　一金五圓　清水坊殿
一金參圓　小松錄事殿　一金壹圓　清兮寺殿
一金參圓　太野日貞殿　一金壹圓　林藏坊殿
一金壹圓五拾錢　押田智玄殿　一金五拾錢　圓臺坊殿
一金壹圓五拾錢　麻生是忍殿　一金壹圓　定林坊殿
一金壹圓五拾錢　中村瑞義殿　一金壹圓　竹之坊殿
一金壹圓五拾錢　小屋舜正殿　一金壹圓　山本坊殿
一金壹圓五拾錢　渡邊智正殿　一金壹圓　松井坊殿
一金壹圓　川口智隨殿　一金壹圓　延壽坊殿
一金壹圓　小林貞宜殿　一金壹圓　妙石坊殿
一金壹圓　遠藤是雄殿　一金五拾錢　智寂坊殿
一金五圓　七面山殿　一金五拾錢　圓光庵殿
一金五圓　武井坊殿　一金五拾錢　端塲坊殿
一金五圓　覺林房殿　一金壹圓　圓實寺殿
一金壹圓　大乘坊殿　一金參圓　學院富木堯廣殿
一金貳圓　麓坊殿　一金五圓　物品代　身延町新玉屋殿
一金貳圓　肝井坊殿　一金五圓　玉屋殿
一金參圓　本行坊殿　一金參圓　熊王堂殿
一金貳圓　大林坊殿　一金五圓　田中屋殿
一金壹圓　窪之坊殿　一金參圓

一金參圓　遠藤殿
一金參圓　島屋吳服店殿
一金參圓　三桝屋殿
一金貳圓　山田屋殿
一金貳圓　遠藤文三殿
一金五圓　梅屋殿
一金五圓　望月仁三郎殿
一金參圓　甘養亭殿
一金參圓　小林銀行殿
一金壹圓五拾錢　古屋慶信殿
一金壹圓　松風軒殿
一金貳圓　砂子屋殿
一金參圓　內野ふみ殿
一金壹圓　內野かね殿
一金貳圓　早野やす殿
一金貳圓　小松けい殿
一金壹圓五拾錢　伊藤外二名殿
一金五拾錢　大島末吉殿
一金壹圓　深敬病院殿
一金貳圓　望月本啓殿
一金參圓　永久亭殿

一金壹圓　佐野石屋殿
一金壹圓　富士屋殿
一金壹圓　吉之助殿
一金貳圓　中村晶策殿
一金壹圓　葉山丈太郎殿
一金壹圓　山下市造殿
一金貳圓　玉川樓殿
一金拾圓　本院殿
一金貳圓　東京市宮田久子殿
一物品　大野郵便局殿
文章の奬勵　一百冊　中里日勝殿
以上

大正十二年二月十二日印刷
大正十二年二月十六日發行

編輯人　山梨縣身延村　伊丹靈瑞

發行人　山梨縣身延村　太田純志

印刷人　靜岡市吳服町二丁目三十四番地　野崎重兵衛

印刷所　靜岡市兩替町二丁目一番地　池鶴堂印刷所

發行所　山梨縣南巨摩郡身延山久遠寺　祖山學院同窓會文學部